

331.34-Ma59-2cウ



1200500737295

34

59

2c ㊦

複製



始



12-51-62

331.34
MA 59-2c



マルクス著
猪俣津南雄譯

經濟學批判

彰考書院刊行



1906
143

譯者のノート

「經濟學批判」の初版は一八五九年に出た。マルグスの死後、一八九七年に、彼が生前にその初版本に施しておいた訂正に基づいた改訂版が、カウツキーによつてインテルナチオナル文庫の一冊として刊行された。さらに一九〇七年の版には、「經濟學批判の序論」の一篇が追加された。これは、一九〇二年にマルグスの遺稿の中から発見され、一九〇三年の「ノイエ・ツァイト」に發表されてゐたものである。この翻譯の原本として用ひたのは、そのカウツキー版の第十版（一九二四年版）である。

「經濟學批判」が公けにされた一八五九年は、「資本論」第一巻の出版に先立つこと八年である。「資本論」のサブタイトルがやはり、經濟學批判となつてゐるのでもわかるとほり、彼のこれらの經濟學上の全研究は、一貫した、意義ふかき經濟學批判の立場から企てられたものである。本書「經濟學批判」の序文と「資本論」の序文とは、さらに、この偉大な兩著作の理論上および歴史上の關係を明らかにする。マルクスが「經濟學批判」を書いた時には、すでに、「全部の材料は、獨立の諸論文の形で私の前に」あつたこと、およびそれがすでに組織立てられた一體系として彼の頭にあつたことは、「批判」の序文における、彼の全計畫についての記述によつて明瞭である。また、「資本論」について、彼

がその第一巻第一版の序文においていつてゐるやうに、「こゝに第一巻を刊行しようとする作は、一八五九年刊拙著『經濟學批判』のつゞきとなるものである。その着手からつゞきまでの間がかく永引くことゝなつたのは、幾度も幾度も私の仕事を中絶させた多年にわたる宿病のためであつた。」そして「資本論」第一巻の第一節第一章——すなはち「何事も初めが困難である。……本書においても、(その)理解が最も困難であらう」ところの第一章——は、「經濟學批判」の内容を概括したものである。「批判」においては「單に暗示に止まつてゐた多くの點」が、「資本論」第一章においては「一そう充分に説明」されてあることももちろんであるが、「反對にまた、かの書『批判』において詳細に説明された點が、たゞ暗示に止められてゐるところもある。」そして「批判」に收められた「價値理論および貨幣理論の歴史」關する諸節は、本書『資本論』においてはもちろん全く削除されてゐる」のである。

さらに「經濟學批判」の序文は、マルクスの唯物史觀の根本的諸命題——わが國のマルクス學徒の間には、いはゆる唯物史觀の「公式」ないしは「要約」としてしばしば論議にのぼるところの——を内容とする一節があるために、とくに名高い。さらにまた「經濟學批判の序論」の方は、マルクス經濟學の方法論が最も組織的に展開されてゐるために、とくに重要である。この序論は、一般經濟學書にいはゆる概論として扱はれてゐる部分を、生産、分配、交換、消費の各項およびそれらの相互關係に即しつゝ、マルクス独自の立場から検討批判して、一方にはブルジョア經濟學における根本的矛盾、

誤謬、欺瞞、不徹底を暴露し、他方ではそれらの一般的經濟諸現象ないし諸範疇の眞性質を解明すると同時に、自身の方法論を展示し、確立する。この至要な研究は、「經濟學批判」の刊行以前にすでに書き下されてゐた。マルクスがみづからこれを、「經濟學批判」はもとより「資本論」にすら添附せず、永眠まで遂に發表する機會をもたなかつたのは、周知のとほり、それらの尨大な著作さへが、なほ彼によつて仕遂げられてゐた研究の全範圍をつくすに至らず、従つてこの序論を示すことは、まだ「これから證明すべき諸結果を前もつて示す」所以になるのを恐れたからにすぎない(本書の序文参照)。

が、さうした事態のために、この序論が彼の死後に發見された時には、最初のノート様な草稿の形のままであつた。それを版に上せて發表せんとしたカウツキーは、判讀しかねる箇所をすくなくならず見出し、明らかに誤記もしくは故意の省略と思はれる箇所は、それぞれに正誤、註釋、ないしは補足を試みる必要があつた。で、「序論」において散見するところの(?)は、彼が判讀しかねた箇所を示し、また「」の内に挿入された言葉は、彼が試みた補足を示すものである。従つて譯者は、序論の譯出には一段の困難を感じたのであるが、それだけにまたとくに力を入れてゐた。それにしても——もちろん、本書全體についていへることであるが——譯者は、わけても序論の譯出が種々なる缺點を含むであらうことを恐れないうけにはゆかず、とくに諸兄の批正をまつ次第である。

本書は當初、「序論」を巻頭に載せてあつたが、「譯者のノート」にもあるとほり、右はマルクスの歿後、一九〇二年にカウツキ
が發見し、補足、訂正したもので、序論とはいへ、マルクスみづから「經濟學批判」に入れず、分離してあつたもの。従つてそれを
そのまま巻頭に載せるのは、原著者の序文の言葉からしてもマルクスの本意ではあるまいと考へ、實は刊行者の慈悲ではあるが、本
書ではとくに附録とした。

なほ、巻末の索引は、當書院編輯部の勦察にかかると、一九三四年刊行のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版より譯し、
本書の完璧を期しておいた。——刊行者

序 文

私は、ブルジョア經濟の組織を次の順序で考察する。——資本、土地財産、賃労働。國家、外國貿
易、世界市場。で、最初の三項目の下においては、近代ブルジョア社會が分裂してゐる三大階級の經
濟的生活諸條件を攻究する。自餘の三項目の關係は一見して明らかである。資本をとり扱ふ第一卷の
第一部は、次の諸章からなる。(一)商品、(二)貨幣もしくは單純流通、(三)資本一般。その最初の二
章が本書の内容をなすのである。全部の材料は、獨立の諸論文の形で私の前にある。それらは、刊行
の目的でなく、自分一個の理解のために、それぞれ長い時を置いて書かれたもので、これをさらに右
の計畫に従つて組織的に手を入れて纏めることは、今後の事情次第であらう。

私がざつと書き下しておいた一般的序論は、こゝには現はさぬことにする。といふのはよく考へて
みると、これから證明せんとする諸結果を前もつて示すといふことはいけないと思へるし、それに讀
者は、私の説くところを全般的に見ようとするなら、個々から一般へとよびのぼる覺悟が要るからで
ある。だが、私自身の政治經濟的研究の經路について一、二の説明しておくことは、かならずしもこ
の際無用ではあるまい。

私の専攻は法學であつたが、哲學と歴史とをやる傍ら、それを副次的な學科として勉強したまでである。一八四二年から四三年の間に、「ライン新聞」の主筆として、私は始めていはゆる重大利害關係に喙を容れねばならぬといふ破目に陥つた。山林盜伐および土地所有の細分に關するライン州議會の討議や、時のライン州知事ヘル・フォン・シアールがモーゼル農民の状態について「ライン新聞」に對して起した公けの論争や、それから自由貿易と保護關稅に關する討論などが、始めて私に經濟問題を勉強させる刺戟を與へたのであつた。一方、「さらに進まん」のよき意思が事實の知識を遙かに乗り越えてゐたその頃には、フランケンの社會主義および共產主義の淡く哲學的に色づけられた反響が、「ライン新聞」へも聞えて來た。この不手際なものに對して私は反對を唱へたのだが、しかし同時に「アルゲマイネ・アウグスブルグ新聞」との論争に際して、この種のフランス傾向の思想内容に對しては、私の従來の研究ではなんの判斷をも下しえないことがすつかり解つて來た。そこで私は、筆鋒さへ和らげれば、「ライン新聞」に下されてゐた死の宣告を免かれうると信じてゐた同紙の發行人たちの幻影をよいことにして、むしろ喜んで公生涯から書齋へ退いたのであつた。

私を困らせてゐた疑問を解くために企てられた第一の勞作は、ヘーゲル法理學の批判的修正であつて、その序論は、一八四四年パリで發行された「獨佛年誌」に現はれた。

私の研究はかういふ結果に到達した。すなはち、法律關係ならびに國家形態は、それ自身からも、

またいはゆる人間精神の普遍的發展からも理解しうるものでなく、むしろそれは物質的の生活諸關係に根ざし、該諸關係の總體は、ヘーゲルがこれを十八世紀の英佛人の例にならつて「ブルジョア社會」の名の下に包括したところのものであるが、ブルジョア社會の解剖は、これを經濟學に求めねばならぬ、といふそれである。パリで始めた經濟學の研究を、私は、ギゾー君の追放命令のおかげで越して行つたブラッセルでつゞけることになつた。私が得たところの、しかも一度得られた後は私の研究の指針として役立つところの、一般的結果は、次のやうに手短かに要約することが出来る——

人々は、その生活の社會的生產において、特定の、必然的な、彼らの意思に依存せざる諸關係を結び、この生產關係は、彼らの物質的生產力の特定の發達段階に應當するものである。これらの生產關係の總體は、社會の經濟的構造を形づくり、これが實在的の基礎であつて、その基礎の上に法律的および政治的の上部構造が立ち、その基礎に相應して特定の社會的意識諸形態がある。物質的の生活の生產方法は社會的、政治的、および精神的の生活過程一般を制約する。人々の意識が彼らの存在を決定するのではなく、むしろ反對に、彼らの社會的存在が彼らの意識を決定するのである。彼らの發達の或る段階に到ると、社會の物質的生產力は、今まで彼らとその内部で動いて來たところのその現在の生產諸關係、もしくは、その法律的表現にすぎないところの所有諸關係と、矛盾撞着することになる。これらの關係は、生産の發展形態であつたのが、今やその桎梏と變ずる。そこで社會革命の時代

が始まる。經濟的基礎の變化とともに、尤大な上部構造全體が徐々にか急激にか變革される。かゝる變革の考察においては、物質的な、自然科学的に忠實に確認すべきところの、經濟的生產諸條件における變革と、人々がこの衝突を意識するに到つてそれを戦ひ決せんとするその法律的、政治的、宗教的、藝術的ないし哲學的の、一口にいへば觀念上の諸形態とは、常にこれを區別せねばならない。或る個人を判斷するのに、その人自身の考へてゐるところに基づいてはしないのと同じやうに、かやうな變革の時代を、時代の意識から判斷することは出来ない。却つてこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、社會的生產諸力と生產諸關係との現存の衝突から、説明しなければならぬ。一つの社會構成は、そこに發展する餘地あるすべての生產諸力が發展しきらないうちに破滅することは決してなく、また新しい一そう高級な生產諸關係は、それらにとつての物質的生存條件が、舊社會それ自體の胎内に孕まれないうちに出現することは決してない。さればこそ人類は、いつも自分で解決しうる問題のみを提起する。けれど、少しく正確に考へるなら、そもそも當の問題そのものが、その解決にとつての物質的諸條件がすでに存在するか、ないしは少くとも生成の過程にある時にのみ發生することを、常にさとするであらうから。大づかみには、アジア的、古代的、封建的、および近世ブルジョアの生產諸方法が、經濟的社會構成の前進的諸紀元として區別される。ブルジョアの生產諸關係は、社會的生產過程の最後の敵對的形態であり、敵對的とは個人的敵對の意味ではなくて、諸個人の社會的生活

諸條件から生じ來る敵對の意味である。だが、ブルジョア社會の胎内に發展しつゝある生產諸力は、同時に、この敵對の解決のための物質的諸條件をつくり出す。従つて、この社會構成とともに人間社會の前史が終りを告げる。

フリードリッヒ・エンゲルスと私とは、經濟的諸範疇を批判した彼の天才的な論文が（「獨佛年誌」に）現はれて以來、たえず手紙で思想の交換をつゞけてゐたが、彼は違つた道をへて私と同じ結果に到達してをつた（彼の「イギリスにおける労働階級の地位」を見よ）。そして一八四五年の春には、彼もまたブラッセルに到着したので、私たちは、ドイツ哲學の觀念論的見解に對する私たちの見解の對立を、共同でまとめ上げることに、——實は、私たちの以前の哲學的良心の總決算をすることに、決めたのであつた。この決意は、新ヘーゲル派哲學の批判といふ形において遂行された。二冊の厚いオクタヴ版の原稿は、疾くにヴェストファーレンの書肆に送られてゐたのだが、その後、事情が變つて來たために刊行しかねるといふ知らせがあつた。私たちは、私たちの主要目的——自身の理解——を達してゐただけに、それだけ喜んでその草稿は鼠どもの牙の批判にまかせてしまつた。當時、なほ吾々が、あれやこれやの問題を論じて公けにした斷片的な仕事のうちでは、エンゲルスと私との合作である「共產黨宣言」と、私が發表した「自由貿易論」とをあげるに止めよう。私たちの見解の決定的諸點は、私がブルードンに反對して書いた一八四七年出版の著作「哲學の貧困」において、なほ論

争態をとつたとはいへ、始めて科學的に示された。「賃労働」に關してドイツ語で書いた小論文は、私がこの題目についてブラッセルドイツ人労働組合で試みた講演を綴り合はせたものであるが、二月革命のために、またそのおかげで私がベルギーを追放されたことのために、その印刷は中止された。

一八四八年および一八四九年の「新ライン新聞」の發行と、その後つゞいたいろいろの事件とは、私の經濟學の研究を中絶させ、一八五〇年、ロンドンにおいて漸く、再びそれに着手することが出来た。大英博物館に累積してゐるところの、經濟學の歴史に關する夥だしい資料、ブルジョア社會の觀察にとつてロンドンが占める有利な位置、それからカリフォルニアおよびオーストラリアの金の發見とともに始まつたやうに見えたブルジョア社會の新しい發展段階、これらは、私をしてもう一度すつかり初めからやり直し、新しい材料によつて、批判的に仕事を仕上げようと決意させた。これらの研究の一部は、おのづから、まるで枝道と思へるやうな諸學科にも導いたが、それらにもやはり、多かれ少かれ時を費さねばならなかつた。が、わけても、私に許された時間は、生活費をうることのつひきならぬ必要のために削られた。第一流の英米新聞「ニューヨーク・トリビューン」への、これで八年になる私の寄稿は、通信員としての新聞通信をたゞ例外的な方法でやるのであつたから、研究の方をひどく分裂させずにはおかなかつた。だが、それにしても私の寄せたものでは、イギリスおよび歐洲大陸の目ぼしい經濟上の出來事に關する記事が、そのごく重要な部分をなしてゐたので、私はい

きほひ、經濟學本來の學問的範圍の外にある實際上の細目に通曉して來ずにはをれないといふ次第であつた。

以上の、經濟學の領域における私の研究の経路についてのスケッチは、私の見解がいかに批判されようと、またいかに支配者諸階級の利害本位の偏見と合はなからうと、それが私の誠實なる長年月の研究の成果であることを立證するばかりであらう。だが、地獄の入口と同じに、科學の入口にも一つの要求が掲げられねばならない——
こゝに一切の疑懼を棄てねばならぬ。
一切の怯懦がこゝに死なねばならぬ。

一八五九年一月

ロンドンにて

カール・マルクス

目次

譯者のノート

序文

第一篇 資本一般

第一章 商品

A 商品の解剖の史的考察

第二章 貨幣または單純流通

第一節 價値の尺度

B 貨幣の尺度單位に關する諸學說

第二節 流通要具

a 商品の轉形

b 貨幣の流通

c 鑄貨、價値表章

目次

目次

第三節 貨幣

二六

a 貨幣の退蔵

二七

b 支拂器具

二九

c 世界貨幣

三〇

第四節 貴金屬

三一

C 流通要具および貨幣に関する學說史

一八

〔附〕 經濟學批判の序論

(一) 生産一般

三五

(二) 分配、交換、消費に對する生産の一般的關係

三四

(三) 經濟學の方法

三二

(四) 生産、生産手段と生産關係。生産關係と交通關係。生産および交通關係

二七

との關係における國家および財産形態。法律關係。家族關係

二七

索引 (引用文獻目錄、人名索引)

二七

經濟學批判

第一篇 資本一般

第一章 商品

「見したところ、ブルジョアの富は、一の尨大な商品集成と見られ、個々の商品はその初等的存在と見られる。が、各商品は、使用價值と交換價值との二重の觀點の下に現はれる。」

(一) 「吾々がもつ一切の物には二つの用がある。一つは物の固有の用であり、他は固有ならざる用、ないしは第二次的な用である。たとへば靴は、穿くことに用ひられ、また交換のためにも用ひられる。靴を欲する者に貨幣にかへて靴を與へる者は、いかに靴を靴として用ひてはゐるが、しかしそれは靴の固有のないしは第一次的な目的ではない。靴は交換のためにつくられるのではないからである。同じことはあらゆる所有物についていへよう。」(アリストテレス「政治學」第一卷、第九章)

商品とはまづ、イギリス經濟學者の語法をもつてすれば、「生活にとつて必要な、有用な、もしくは快適なる何らかの事物」であり、人間の欲望の對象であり、最も廣義においての生活資料である。かかる、使用價值としての商品の存在と、商品の自然の一目瞭然たる存在とは、一致する。たとへば小麦は、綿、硝子、紙などの使用價值とは異なる一つの特種の使用價值である。使用價值は、使用にまつての價值のみをもち、消費の過程においてのみ實現される。同一の使用價值は、さまざまに利用さ

れうる。がしかし、その可能なる諸利用のすべては、一定の特質をもつ物としてのその存在のうちに包括されてゐる。さらにそれは、質的にのみならず、量的にもまた規定されてゐる。自己の自然的特性に従つて、種々なる使用價值には種々なる尺度がある。たとへば小麥幾シェフェル、紙何ブーフ、リンネル何エルレ、等。

富の社會的形態の如何を問はず、諸種の使用價值は常に、この形態に對してまづもつて無關係な、富の内容を形成する。人は、小麥を誰がつくつたか、ロシアの農奴か、フランスの小農か、それともイギリスの資本家かを、小麥を食つて知ることとは出來ぬ。使用價值は、社會的欲望の對象であり、だから社會的關係にあるとはいへ、しかも何ら社會的生產關係を表はさない。この使用價值としての商品が、たとへばダイヤモンドであるとする。ダイヤモンドを見ても、それが商品であるかどうかは解らない。ダイヤモンドが、美術的にか工業的にか、娼婦の胸にか硝子切り職工の手にか、使用價值として役立つてゐる場合には、それはダイヤモンドであつて、商品ではない。使用價值であることは、商品にとつての必要前提と見えるが、商品であるとはいは、使用價值にとつてどうでもよい規定である。經濟上の形態規定に對するかうした無關係性においての使用價值は、すなはち使用價值としての使用價值は、經濟學の考察範圍外にある^(三)。この範圍内に使用價值がはいるのは、使用價值がそれ自身、形態規定たる場合に限られる。そして使用價值こそは直ちに特定の經濟關係、すなはち交換價值

がそれに表現されるところの、質料的基礎である。

(二) それが、何故にドイツの編纂屋たちが「財」なる名の下に定義された使用價值を好んで論述するかは理由である。たとへば、ルドキッヒ・シュタイン「國家學の體系」第一卷「財」に關する章を見よ。「財」に關する聰明なる理解は、「商品學指針」の中に求めねばならぬ。

交換價值はまづ、使用價值が相互に交換されうる數量關係として現はれる。この關係においては、使用價值は等しき交換量を形づくる。だからプロペル一卷と嗅ぎ煙草八オンスとは、煙草と哀歌といふ異なつた使用價值にもかゝらず、等しき交換價值である。交換價值としては、一の使用價值はたゞ、適當な分量にある時にのみ他の使用價值とちやうど等しく價ひする。一宮殿の交換價值は、靴墨の一定分量で表はされうる。ロンドンの靴墨製造業者は、逆に、彼らの靴墨の交換價值を何倍かにしたものを、いくつかの宮殿で表はした。すなはち、その自然の存在状態とまづたく無關係に、また商品を使用價值たらしめてゐる欲望の特殊の性質にかゝはるところなく、諸商品は一定の數量において相等しく、交換において互ひに置き換へ、等價物として通用し、その多種多様な外觀にもかゝらず同一單位を表現する。

使用價值はそのまゝ生活資料である。だがしかし、この生活資料は、それ自身、社會的生活の產物であり、支出されたる人間の生活力の成果であり、對象化された労働である。社會的労働の體現として、すべての商品は、同一單位の結晶態である。では、この單位の、すなはち交換價值に表現される

労働の、特定の性質を、これから調べよう。

一オンスの金、一トンの鐵、一クォーターの小麥、二十エルの絹が、等しい大きさの交換価値であるとする。これらのものは、その使用価値の質的差別の消された、かやうな等價物として、同一労働の等量を表現する。それらのもの、うちに對象化された労働は、それ自體、同形態の、無差別の、單純な労働であらねばならぬ。この労働が金に、鐵に、小麥に、絹に現はれるかはあへて問はないことは、ちやうど、酸素が鐵の鏽に、大氣に、葡萄の液に、人間の血液にあるか、酸素にとつて問題でないと同様である。が、金を掘る、鐵を鑛山から採る、小麥をつくる、絹を織ることは、質的に相違する數種の労働様式である。事實において、物件的に使用価値の相違として現はれるものが、過程的には使用価値をつくり出す活動の相違として現はれる。交換価値をつくる労働は、だから、使用価値の特種の材質に無關係であると同様に、労働そのもの、特種の形態に對して無關係である。異なる使用価値は、その上に、異なる諸個人の活動の產物、すなはち、個人的に異なる労働の成果である。がしかし、交換価値としては、同一の、無差別の労働、すなはち、労働する者の個人性の消された労働、を表現する。交換価値をつくる労働は、それだから、抽象的に、一般的な労働である。

もしも一オンスの金、一トンの鐵、一クォーターの小麥、二十エルの絹が、等量の交換価値、すなはち等價物であるなら、一オンスの金、二分の一トンの鐵、三プッシュルの小麥、五エルの絹は、

全く違つた大きさの交換価値である。そしてこの量的差異は、それらのものが交換価値一般として可能なる唯一の差異である。異なる大きさの交換価値として、それらのものは、かの、交換価値の實體を形づくる單純の、同形態の、抽象的に一般的な労働の多少、大小量を表現する。いかにしてこの量をはかるか、といふ問題が起る。もしくははむしろ、交換価値としての商品の量的相違は、それらの商品中に對象化された労働の量的相違にすぎないのだから、では、その抽象的一般的労働そのもの、量的存在は何か、といふ問題が起る。運動の量的存在が時間であるやうに、労働の量的存在は労働時間である。労働の質が一定したものとすれば、労働それ自體の繼續時間は、それにとつて可能なる唯一の差異である。労働時間としての労働は、その尺度を、自然の時間尺度たる、時、日、週、等に得る。労働時間は、労働の形態、内容、個性の如何を問はず、労働の生成的存在である。労働時間は、量的存在としての、かつ同時にそれ自身の内在的尺度を有するものとしての、労働の生成的存在である。商品の使用価値のうちに對象化された労働時間は、使用価値を交換価値たらしめ、従つてまた、商品たらしめるところの實體であるとともに、商品の特定の價值量をはかる。同一労働時間が對象化されてゐるところの、異なる使用価値のそれぞれの當量は、等價物である。すなはち、すべての使用価値は、それらが同一労働時間をかけられて、それを對象化して保持する割合においてみな等價物である。交換価値としては、すべての商品は、凝結した労働時間の特定尺度にすぎない。

労働時間による交換価値の規定を理解するためには、次の重要な點をしつかり握らねばならぬ。すなはち労働を、單純な、いはば無質の労働に還元すること。交換価値をつくる、すなはち商品を生産する労働が、社会的労働であるところのその特殊の様式。最後に、使用価値に結果するかぎりの労働と、交換価値に結果するかぎりでの労働との間の差別。

商品の交換価値を、商品のうちに含まれてゐる労働時間で量るためには、種々の労働そのものが無差別同形態の單純労働、いひ換へれば、質的に同一で、従つて量的にのみ差別ある労働に還元されてゐなければならぬ。

この還元は一つの抽象とは見られるが、しかし、社会的生産過程において日々に行はれるところの抽象である。すべての商品を労働時間に分解することは、すべての有機體を氣體に分解することより以上の抽象でないと同時に、より以下に現實的な抽象でもない。かく時間によつて量られる労働は、事實上種々なる主體の労働として現はれず、むしろ却つて労働する種々なる個人が、労働の單なる機關として現はれる。もしくは労働は、それが交換価値に表現されるかぎり、一般的人間労働として表現されることが出來よう。この一般的人間労働の抽象は、與へられた社會の各平均個人が行ひうる平均労働に存する——人間の筋肉、神經、腦力、等の一定の生産的出費、等。それは各平均個人が服せしめられうる、かつ、何らかの形態において行はねばならぬやうな單純労働である。この平均労働の

性質は、それ自身、國土を異にし、文化段階を異にするに従つて異なるが、しかし一定の社會において與へられたものとして現はれる。單純労働は、ブルジョアの社會のすべての労働のつゞけて大きな部分を形づくること、どの統計でもが證明するとほりである。Aは六時間に鐵を、六時間にリンネルを生産し、Bが同じく六時間に鐵を、六時間にリンネルを生産するにせよ、もしくはまた、Aは十二時間に鐵を、Bは十二時間にリンネルを生産するにせよ、それは明らかに、單に同一労働の種々なる適用にすぎぬと見られる。がしかし、より強度の、より特殊重要性ある労働として平均標準以上にある複雑労働はどうであるか？ この種の労働は、合成された單純労働、強度の單純労働に外ならず、従つてたとへば、一複雑労働日は三單純労働日に等しい。この還元を律する法則は、まだこゝで扱ふことがらでない。しかし、この還元が行はれるといふことは明らかである。なぜなら、複雑労働の生産物は、交換価値として、一定の割合において單純平均労働の生産物に對して等價であるから。すなはち、この單純労働の一定量に等しいから。

(III) これを「不熟練労働」と英國の經濟學者は呼んでゐる。

労働時間による交換価値の規定は、さらに、一定の商品、たとへば一トンの鐵のうちには、Aの労働たるとBの労働たるとを問はず、同量の労働が對象化されてゐること、ないしは種々の個人が、質的および量的に一定した使用価値の生産に、等量の労働時間を費すことを假定する。別な言葉でいへ

ば、一つの商品のうちに含まれてゐる労働時間は、その生産に必要な労働時間、すなはち與へられた一般的生産諸條件の下に、おなじ商品の新たな一見本を生産するに要する労働時間である、といふことが假定されてゐる。

交換價值をつくる労働諸條件は、交換價值の分析が示すとほり、労働の社會的規定、ないしは社會的労働の諸規定である。が、社會的といつても、たゞの社會的ではなく、特殊の意味におけるそれである。それは社會的なることの特種な一種である。労働の、無差別なる單純さは、まづ、種々なる個人の労働の同等であり、彼らの労働が交互的に等しい關係にあることであつて、しかもその關係は、一切の労働を同一種の労働に、事實上還元することによつて生じてゐる。各個人の労働は、それが交換價值に表現されるかぎり、かゝる同等の社會的性質をもつのであり、そして、各個人の労働が他のすべての個人の労働に等しい關係にあるかぎりにおいてのみ、交換價值に表現されるのである。

さらに、交換價值には、個々の個人の労働時間が直ちに、一般的労働時間として現はれ、この個別の労働の一般的性質は、個別労働の社會的性質として現はれる。交換價值に表現された労働時間は、個人の労働時間である。個人の労働時間ではあるが、それは他の個人、すべての個人がおなじ労働を行ふかぎり、彼らと區別されることなき個人の労働時間であり、従つて、一定の商品の生産のために、一人によつて必要とされる労働時間は、同じ商品の生産のために他の各人が費すであらうところの、

必要労働時間である。必要労働時間は、個人の労働時間であり、彼の労働時間であるが、しかし、どの個人の労働時間たるを問はないところの、すべての個人に共通なる労働時間としてのみ、さうである。一般労働時間としての労働時間は、一般的生産物に、一般的等價物に、對象化された労働時間の一定量に、表現される。後者は、直接に個人の生産物として現はれる使用價值の特定形態に對して無關係であり、どの他人でも生産物として表現されるところの、使用價值のどの形態にでも自由に置き換へることが出来る。それは、たゞかゝる一般的な大きさとしてのみ、社會的大きさなのである。個人の労働は、それが交換價值に結果するには、一般的等價物に結果しなければならぬ。——すなはち、一般的労働時間としての個人の労働時間の表現、もしくは個人の労働時間としての一般的労働時間の表現に。それはあたかも、種々なる個人が、彼らの労働時間を一しよに投げ出して、彼らが共同に處分しうる労働時間の種々なる量をば、種々なる使用價值に表現したやうなものである。個人の労働時間は、だから、事實において、社會が一定の使用價值の表現のため、すなはち一定の欲望の満足のために必要とする労働時間である。が、こゝで關はるところは單に、労働が社會的性質をうるところの特殊の形態だけである。紡工の一定労働時間が、たとへば、百ポンドの亞麻絲に對象化され、織工の生産物なる百エルのリンネルが、同量の労働時間を表現するとする。この二つの生産物が、一般労働時間の同量を表現し、従つて、等しき労働時間を含むところのどの使用價值でも、等價物であ

るかぎりにおいて、この二つの生産物は互ひに等價物である。紡工の労働時間と織工の労働時間とが一般的労働時間として表現され、従つて彼らの生産物が一般的等價物として表現されることによつてのみ、この場合には、紡工の労働は織工のために、織工の労働は紡工のために實現され、一方の労働が他方の労働にとつてかはり、彼らの労働の社會的性質が兩者にとつて實現される。これに反し、紡手と織手とが同じ屋根の下に住み、たとへば家族の自家用のために、女が紡ぎ、男が織つたやうな、農村家長制の場合には、撚絲とリンネルとは家族の限界内での社會的生產物であり、紡ぐこと織ることとは同限界内での社會的労働であつた。だが、それらのもの、社會的性質は、一般的等價物としての撚絲が一般的等價物としてのリンネルと交換され、もしくは、兩者が同じ一般的労働時間の同等價の表現として互ひに交換される、といふことに存するのではない。家族關係は、むしろ、その労働の自然發生的な分業労働によつて、労働の生産物に自己特有の社會性の刻印を押した。次に、中世の賦役や現物給付をとつてみよう。ここでは、自然形態における諸個人の特定の労働が、すなはち労働の一般性ではなく、特殊性が社會的鞆帶を形づくる。最後に、あらゆる文化國民の歴史の黎明期に見られるやうな、自然生長的な形態における共同労働をとつて見てもよい。こゝでは、労働の社會的性質は、明白に、個人の労働が一般性の抽象的形態を、もしくは彼の生産物が一の一般的等價物の形態をとる、といふことから生じてゐない。こゝで個人の労働を私的労働たらしめず、個人の生産物を私

的生産物たらしめざるもの、個人の労働をむしろ、直接的に社會有機體の成員の職分として現はれしめるものは、生産に前提されてゐる共同體である。交換價値に表現される労働は、個々別々の個人の労働である、とまづもつて見なされてゐる。彼の労働は、その正反對の形態、抽象的一般性の形態をとることによつて、社會的になる。

(四) 自然生長的な共同所有の形態が、とくにヌラグ族の形態であるとか、ロシアに限られた形態であるとかいふのは、近來行はれるに至つた笑ふべき偏見である。それは、ローマ族、ゲルマン族、ケルト族に存したことが證明される原始形態であり、その多數の標本は、一部分は敗滅状態にあるとはいへ、なほ雜多の證據とともに現にインド族において見られる形態である。アジアの、わけてもインドの共同所有の諸形態を、なほ一そう正確に調べるならば、いかにして共同所有の種々なる形態からそれらの解體の諸形態が生ずるかを確かめようであらう。で、インドの共同所有の諸形態から、たとへば、ローマおよびゲルマンの私的所有の原典型を推定しえよう。

最後に交換價値を特徴づけるものは、人々の社會的關係までが顛倒されて現はれること、すなはちそれが事物の社會的關係として現はれることである。一つの使用價値が、交換價値として他の使用價値と關係するかぎりにおいてのみ、異なる人々相互の労働が、同等の、一般的の労働として結びつけられる。だから、交換價値が人間相互間の關係であるといふのが正しいとしても、それは、物的外皮の下に隠された關係だつて加へねばならない。一ポンドの鐵と一ポンドの金が、その物理的、化學的特質が異なるにかゝはらず、同一重量を表現するやうに、同一労働時間の含まれてゐる二商品の

各使用價值は、同一交換價值を表現する。交換價值は、そこで、使用價值の社會的なる自然的確定として現はれる。この確定性は物としての使用價值に屬し、物たることのために使用價值が、特定の量的比例において互ひに置き換へられ、等價物を形づくること、たとへば、單純な化學的諸元素が特定の量的比例において結合され、化學的等價物を形づくるのと異ならない。社會的生產關係が客體の形をとり、従つて、労働における人々相互の關係が、むしろ、物と物との關係および物と人との關係からなる關係として現はれることが何でもないことに思へるのは、日常生活の習慣から來ることにはすぎない。商品にあつては、この神祕化はまだ極めて單純である。交換價值としての商品の關係は、むしろ、諸人が自分ら相互の生産的活動に對する關係であるといふことは、誰にも、多かれ少かれ思ひ浮ぶ。より高度の生産關係においては、この單純さの外見が消え失せる。貨幣學派のすべての錯覺は、貨幣をば、一の社會的生產關係を表現するものと見ず、特定の性質をもつ自然物の形において見ることから生ずる。貨幣學派の錯覺を蔑視する近世經濟學者にあつても、より高度の經濟的範疇、たとへば資本のごときを扱ふ段になると、直ちに同じ錯覺に陥る。彼らが、不手際ながら、物として把握せんと欲するところのものが、忽ちにして社會關係として現はれ、彼らがやうやく社會的關係として定義してしまつたところのものが、今度はまた物として現はれて彼らを揶揄するといつた場合の、彼らの素朴な驚嘆のうちに、いさなりその錯覺が暴露される。

(五) 「價值は二個人の間の關係である。」クストデイ編「イタリー經濟學の古典的文獻、近世の部」(一八〇三年、ミラノ發行)におけるガリアニの「貨幣論」。

商品の交換價值は、事實において、諸個人の労働が互ひに同等で、そして一般的であるといふ關係に外ならず、労働の或る特殊的に社會的なる形態の、客體的表現に外ならないのであるから、労働は交換價值の唯一の源泉であり、従つて、富が交換價值によつて成立するかぎり、富の唯一の源泉であるといふのは、同義異語である。また、労働および交換價值としての交換價值は何らの自然物をも含まないから、自然物としての自然物は、何らの交換價值をも含まない、といふのも同様の同義異語である。しかし、ウキリアム・ペティが「労働は富の父であり、土地はその母である。」といひ、ビショップ・バークレイが「この四要素が、そしてその中の人間の労働が、富の眞の源泉ではないのか。」と問ひ、もしくはアメリカのトーマス・クーパーがさらに平明に、「一斤のパンからそれに費された労働、すなはちパン焼きの労働、粉挽きの労働、小作人の労働等を引きさつたら、何が残るか？ 野生の、しかもどんな人間の使用にも役立たない二三本の草つばだ。」といふ時、これらの觀察にあつてはすべて、交換價值の源泉たるやうな抽象労働ではなくて、素材的富の源泉としての具體的労働、短かくいへば、使用價值をつくり出すかぎりでの労働が問題にされてゐる。商品の使用價值は前提されてゐるのだから、商品のうちに吸収された労働の特種の有用性、特定の合目的性は前提されてはゐるが、

それによつて、しかし商品の立場からは、有用労働としての労働に關する考慮の一切が盡されてしまふ。使用價值としてのパンを考へるとき、吾々の興味を惹くのは、食料品としてのその特質であつて、小作人、粉挽き、パン焼き等の労働では決してない。或る發明によつて、この労働の二十分の九が廢されても、一斤のパンの役立つ程度は以前と變らない。もしこの一斤が出来あがつて天から降つて來たとしても、その使用價值の一原子をも失はないであらう。交換價值をつくる労働は、一般的等價物としての商品の同等性において實現されてゐるのだが、合目的生産的活動としての労働の方は、商品の使用價值の無限の多様性において實現される。交換價值をつくる労働は、抽象的に、一般的なる、同等の労働であるが、使用價值をつくる労働の方は、具體的特種的な労働であつて、形式と素材とにしたがつて無限に異なる労働方法に分れてゐる。

(六) 「その自然状態においては、物質はつねに價値を缺く。」マカロック「經濟學の起原……」プレボスト譯、ジュネーブ、一八二五年、五七頁。

マカロックでさへがいかに高くドイツの「思想家」らの上に立つかは明らかである。後者は、「物質」その他半ダースほどのこまごまとしたものを、價値の要素だと唱へてゐる。たとへば、エル・シュタイン、前掲書、第一卷、一一〇頁を見よ。

(七) バークレイ「質問者」ロンドン、一七五〇年、「この四要素が、そしてその中の人間の労働が、富の眞の源泉ではないのか？」

(八) トーマス・クルーバー「經濟學原理講義」ロンドン、一八三二年、(コロンビア、一八二〇年)、九九頁。

使用價值をつくり出すかぎりでの労働について、それが、それによつてつくり出されたもの、すなは

ち物質的富の唯一の源泉である、といふのは謬りである。この労働は、素材的なものを、あれこれの目的に適合したものと化する活動であるから、前提として素材を要する。種々の使用價值の異なるに從つて、労働と自然素材との割合は甚だしく異なるが、しかし使用價值は常に自然的土臺を含む。自然的なものであれかこれかの形において我物化するための目的活動として労働は、人間の生存の自然條件であり、人間と自然との間の、材料交換の條件としてすべての社會的形態から獨立した條件である。交換價值をつくる労働はこれに反して、労働の、特殊に社會的なる形態である。たとへば、裁縫労働は、特殊の生産的活動としてのその物質的定性において上衣を生産するが、しかし上衣の交換價值は生産しない。裁縫労働は、上衣の交換價值はこれを裁縫労働としてでなく、抽象的に一般的な労働として生産し、そしてかゝる労働は、裁縫師が企圖しなかつた社會關係に屬する。で、古代の家内工業にあつては、婦人は、上衣の交換價值を生産することなしに、上衣を生産した。素材的富の源泉としての労働は、税關官吏アダム・スミスにも、また立法者モーゼにも知られてゐる。^(九)

(九) フリドリッヒ・リストは、有用物、使用價值をつくるに役立つかぎりでの労働と、富の特定の社會的形態たる交換價值をつくるかぎりでの労働との區別を、遂に理解しえなかつた。理解するといふことが、總じて彼の偏した實際的な頭とは距たりがあつたから。だから彼は、イギリスの近世經濟學者に、エジプトのモーゼのたゞの剽竊者を見たのである。

では、交換價值を労働時間に歸着させることから生ずる一層立ち入つた二三の規定を觀察しよう。

使用價值としては、商品は原因的に作用する。たとへば小麦なら食料として作用する。機械なら、一定の關係において労働にとつてかはる。商品のこの作用——それによつて商品が僅かに使用價值であり、消費對象であるところの——は、商品がする奉仕、商品が使用價值としてなす奉仕だといつてよい。しかるに交換價值としては、商品はつねにたゞ結果の觀點においてのみ觀察される。この場合に問題となるのは、商品が與へる奉仕ではなく、商品の生産に際して商品自身に向つて與へられたところの奉仕である。で、たとへば一機械の交換價值は、機械によつてとつてかはられる労働時間の多少によつて規定されず、機械そのものに施されてゐるところの、従つて同一の新機械を生産するに要するところの労働時間の多少によつて、規定される。

(一〇) この「奉仕」なる範疇が、かの、いたるところ經濟的諸概念の特種の形態確定を引き去るところの、セイヤバスター型の經濟學者らに、いかなる「奉仕」を與へねばならぬか知られる。

だから、もし商品の生産に要する労働量が不變であるなら、その交換價值も不變であらう。だが、生産の難易は絶えず變ずる。労働の生産力が増大すれば、労働は同じ使用價值をより短時間で生産する。労働の生産力が減少すれば、同一使用價值の生産により長時間を必要とする。一商品のうちに含まれた労働時間の大きさ、すなはち商品の交換價值は、可變の大きさであつて、労働の生産力の増減に反比例して増減する。労働の生産力は、それが製造工業に適用されて豫定の程度を保つものでも、

農業および採取産業においては、同時にまた統制しがたい自然的事情に制約される。同一の労働も、地殻内の各種金屬の含有量の多少によつて、その産出量を異にする。同じ労働でも、豊年には二ブッシェルの小麦に、凶年には辛うじて一ブッシェルの小麦に對象化されよう。かゝる場合には、自然的事情としての稀少なり饒多なりが、商品の交換價值を規定するかに見える。それらは、自然事情に結びついた特種の現實の労働の生産を決定するから。

各種の使用價值は、その大小種々なる容積の中に、同一労働時間もしくは同一交換價值を含むものである。労働時間の一定量を含む一商品の使用價值の容積が、他に比較して小なれば小なるほど、該商品の特殊の交換價值は大きい。ところで吾々は、數種の使用價值、たとへば金、銀、銅、鐵、もしくは小麦、裸麥、燕麥、のごときは、ひどく隔たりあつた文化期において、精確に等しい數字的比例でないまでも常に上位と下位の一般關係を保つやうな、特殊の交換價值の一系列を形づくるのを見る。とすれば、社會的生産力の進歩的發展は、前記の各商品の生産に要する労働時間に對して、同程度にないしは殆んど同程度に影響する、といふことになる。

商品の交換價值は、商品そのもの、使用價值の中には顯現されぬ。一般的社會的労働時間の對象化としてはしかし、一商品の使用價值には他の諸商品の使用價值との關係が生ずる。そこで、一商品の交換價值は他の諸商品の使用價值に現示される。等價物とは事實、他の商品の使用價值に表現された

一商品の交換価値である。たとへば、私が一エルのリンネルが二封度のコーヒーに價ひするとすへば、リンネルの交換価値はコーヒーの使用価値に、詳しくはこの使用価値の一定量に表現される。この比率が與へられておれば、私はリンネルの各量の價值をコーヒーで表現することができる。一商品の交換価値、たとへばリンネルの交換価値は、他の特定の二商品、たとへばコーヒーがその等價物を形づくるところのその割合に盡さるのではない。一エルのリンネルをその表現とするところの、一般的労働時間の量は、同時に、あらゆる他の商品の使用価値の無数の異なる數量に實現される。他の商品の使用価値は、何たるを問はず、それが等量の労働時間を表はすところの割合において、一エルのリンネルの等價物を形づくるところの、單一の商品の交換価値は、だから、あらゆる他の商品の使用価値がその等價を形づくるところの、無数の方程式においてのみ表現しつくされる。この方程式の合計、もしくは、一商品が他の各商品と交換しうるところの種々の比率の總和においてのみ、すべての商品の交換価値は、一般的等價物として表現しつくされる。たとへば方程式の一系列、

$$1 \text{ エルのリンネル} = \frac{1}{2} \text{ ポンドの茶}$$

$$1 \text{ エルのリンネル} = 2 \text{ ポンドのコーヒー}$$

$$1 \text{ エルのリンネル} = 8 \text{ ポンドのパン}$$

$$1 \text{ エルのリンネル} = 6 \text{ エルの更紗}$$

は次のごとく表はすことができる。

$$1 \text{ エルのリンネル} = \frac{1}{8} \text{ ポンドの茶} + \frac{1}{2} \text{ ポンドのコーヒー} + 2 \text{ ポンドの}$$

$$\text{パン} + \frac{1}{2} \text{ エルの更紗}$$

だからもし吾々が、一エルのリンネルの價值が表現しつくされてゐる方程式の、完全な合計を前にすれば、商品の交換価値を一系列の形式で表はすことができるであらう。事實、この系列は無限である。何故なら商品の世界は決して確定的に結終せず、却つて絶えず擴がるから。が、この一商品は、かやうに自身の交換価値を他のすべての商品の使用価値ではかるのだが、他のすべての商品の交換価値は、逆に、それらによつてはかられてゐるこの一商品の使用価値ではかられる。もし一エルのリンネルの交換価値が、二分の一封度の茶や、二封度のコーヒーや、六エルの更紗や、八封度のパンなどで表はされるなら、コーヒー、茶、更紗、パン等は、第三者、すなはちリンネルに等しいといふ關係において互ひに等しく、リンネルは、そこでそれらの交換価値の一般的尺度の役をつとめる。對象化された一般的労働時間、すなはち一般的労働時間の一定量としての各商品は、つぎつぎに、その交換価値を自餘のすべての商品の使用価値の種々の特定量に表現し、そして他のすべての商品の交換価値は、反對にこの獨自の一商品の使用価値ではかられる。が、交換価値としての各商品は、自餘の

すべての商品の交換価値の共通尺度の役をつとめる獨自の一商品でもあるが、しかし他方ではまた、各商品が直接その交換価値を表はすところの全連續を形づくる、多數の商品の一つにすぎない。

(一一) 「量られる物が、ある仕方、量る物の尺度になる、といふやうな關係を、量られる物に對してもつのが尺度の性質である。」クストディ編「イタリイ經濟學の古典的文獻、古代の部」第三卷、四八頁にあるモンタナリの論文から。

一商品の価値の大きさは、その商品以外に、他種類の商品が多く存在するか少く存在するかによつては影響されない。が、しかし、商品の交換価値が實現するところの方程式の系列の大小は、他商品の種類の多少によつて定まる。たとへばコーヒーの価値が表現される方程式の系列は、コーヒーの交換される範圍を表はし、コーヒーが交換価値として作用する限界を表はす。一般的社會的労働時間の對象化としての一商品の交換価値に應答して、その等價物が、限りなく多様な使用価値で表現されてゐる。

吾々は既に、一商品の交換価値は、直接その商品自體のうちに含まれてゐる労働時間の數量とともに變化することを見た。一商品の實現された交換価値、すなはち他の商品の使用価値で表はされた交換価値は、他のすべての商品の生産に費された労働時間が變化する率にも依存せざるを得ない。たとへば、一シェフェルの小麦の生産に要する労働時間が同一でも、他のすべての商品の生産に要する労働時間が二倍になるなら、等價物で表はされた一シェフェルの小麦の交換価値は半減するであらう。

結果は、一シェフェルの小麦の生産に要する労働時間が半減し、他のすべての商品の生産に要する労働時間が變化せずにあるのと、實際上同じことであらう。諸商品の価値は、同一労働時間内に生産される諸商品の比率で定まる。この比率にいかなる變化が生じうるかを見るために、二つの商品AとBをとらう。第一、Bの生産に要する労働時間が變らずにあるとする。この場合には、Bで表現されるAの交換価値は、Aの生産に要する労働時間の増減に正比例して増減する。第二、Aの生産に要する労働時間が不變なら、Bで表現されるAの交換価値は、Bの生産に要する労働時間の増減に反比例して増減する。第三、AとBとの生産に要する労働時間が、同一比例で増減するとする。この場合は、BをもつてするAの等價の表現は變化しない。何らかの事情によつて、すべての労働の生産力と同じ度合で低下したために、すべての商品がその生産のために同じ割合でより多くの労働時間を要するとすれば、すべての商品の価値は増すであらう。その場合、すべての商品の交換価値の現實の表現は變化しないであらうし、そして社會の實際の富は、社會が使用価値の同一量を創造するのにより多くの労働時間を要することになるから、減ずるであらう。第四、AとBとの生産に要する労働時間が双方とも増すなり減るなりするが、しかし異なる比率であるかも知れず、もしくはまた、Aに要する労働時間が増すのに、Bのそれが減ずる、ないしはその反對であるかも知れない。これらの場合はすべて簡単に、一商品の生産に要する労働時間が不變なのに、他の商品の生産に要する労働時間が増す

か減るかする、といふ場合に約元することができる。

各商品の交換価値は、他の各商品の使用価値——その全體なり部分なりで、表はされる。交換価値としてはどの商品でもが、商品のうちに對象化された労働時間そのものと同じく、可分である。諸商品の等價物が、使用価値としての諸商品の物理的可分性から獨立してゐることは、ちやうど、諸商品の交換価値の和が、諸商品の使用価値が一箇の新しい商品に轉換される際に受ける、現實の形態變化の如何を問はないのと同様である。

以上においては、商品は、二重の觀察點から、使用価値としておよび交換価値として、どちらも一面的に考察された。しかるに、商品としての商品は直接に、使用価値と交換価値との統一である。同時に商品は、他の諸商品との關聯においてのみ商品である。商品相互の現實の關聯は、商品の交換過程である。それは互ひに獨立なる諸個人が互ひに込んでゆく社會的過程であつて、しかし彼らは、ただ商品所有者としてのみ、それへは入り込んでゆく。彼ら相互の關係は、彼らの商品と商品との關係であり、従つて彼らは事實上、單に交換過程の意識的擔ひ手として現はれるにすぎない。

商品は、使用価値であり、小麥、リンネル、ダイヤモンド、機械、等、等であるが、しかし商品としての商品は、同時に使用価値ではない。商品がその所有者にとつて使用価値であるなら、すなはち所有者自身の欲望充足のための直接資料であるのなら、商品は商品ではないだらう。商品所有者にと

つては、商品はむしろ非使用価値である。すなはち、單に交換価値の質料上の擔ひ手であり、ないしは單なる交換要具である。交換価値の能動的な擔ひ手として使用価値は、交換要具となる。所有者にとつては商品はなほたゞ交換価値たる點でのみ使用価値であるにすぎない。だから、その商品は、まづ第一に他の人にとつて、これから使用価値にならねばならぬ。商品は、その商品の所有者にとつて使用価値ではないがゆゑに、他の商品の所有者にとつての使用価値である。さうでないなら、所有者の労働は有用性のない労働だつたことになり、労働の成果が商品でないことになる。が、一面では、商品は所有者自身にとつての使用価値とならねばならぬ。何故ならその商品以外に、すなはち彼に屬する商品の使用価値のなかに、彼の生活資料が存在するから。使用価値となるためには、商品は、それをもつて充足すべき特種の欲望に對應しなければならぬ。で、諸商品の使用価値は、それらがあまねく位置を轉換して、交換要具として所有する者の手から、使用對象として所有する者の手に移ることによつて、使用価値となる。諸商品のこのあまねき讓渡によつてのみ、それらに含まれた労働は有用労働となる。諸商品がかやうに互ひに使用価値としてとりかへられる關係においては、それらは何ら新しき經濟上の形態確定を享けない。却つて、商品としての商品の特徴づけてゐた形態確定が消え失せる。たとへばパンは、パン屋の手から消費者の手に移つても、そのパンとしての存在は變じない。反對に、それがさきにパン屋の手にあつては一つの經濟的關係の擔ひ手であり、感官的には超感覺的

であつたのを、消費者が始めて使用價值として、特定の食料品としてそれに關係することになるのである。で、諸商品が、使用價值としてのその生成においてうけるただ一つの形態變化は、所有者にとつては非使用價值で、非所有者にとつては使用價值であつたところの、その形態上の存在の止揚である。諸商品の使用價值としての生成は、それらのあまねき讓渡を、交換過程への入り込みを、條件とする。が、交換にとつての商品の存在は、交換價值としての存在である。だから商品が、使用價值として實現されるためには、交換價值として實現されねばならぬ。

(二二) アリストテレスが交換價值を理解したのは、この規定においてである(本章「註一」引用文を見よ)。

一箇の商品が、使用價值の觀點下には、本來、獨立の物として現はれたなら、交換價值としては、それはむしろ初めから他のすべての商品との關聯において觀察された。この關係は、しかし、理論上思考上のそれにすぎない。この關係は交換過程においてのみ實證される。一方、商品は、一定量の労働時間がそれに費されてゐるかぎり、従つてまた商品が對象化された労働時間であるかぎり、たしかに交換價值ではある。だが商品は、そのまゝでは、單に特種の内容をもつ對象化された個人的労働時間であつて、一般的労働時間ではない。だから商品は、直ちに交換價值であるのでなく、これからそれにならねばならない。商品はまづ、それが労働時間を一定の有用な適用において、すなはち一の使用價值に表はしてゐる場合にかぎり、一般労働時間の對象化であることができる。これは物的條件で

あり、その下においてのみ、諸商品に含まれる労働時間が、一般的社會的なものとして豫定されてゐた。従つて商品が、交換價值として實現されることによつてのみ使用價值となりうるのなら、他方は商品は、その讓渡において使用價值たることを立證することによつてのみ、交換價值として實現されうるのである。一商品は、使用價值としては、單に、それを使用價值、すなはち特種の欲望の對象と見る人へのみ、讓渡されうる。他方ではまた、一商品は、他の一商品に對してのみ讓渡され、またこれを他商品の所有者の側からいへば、彼もまた商品をば特定の欲望——その對象が該商品であるところの——と接觸させることによつてのみ、彼の商品を讓渡し得、實現しうる。だから、使用價值としての商品のあまねき讓渡においては、商品は、その特種の性質によつて特種の欲望を充たすところの特種の物としての、その質料上の差異を通して互ひに關係する。だが、かやうな單なる使用價值としては、諸商品は、互ひにとつてどうでもいゝものであり、むしろ無關係である。使用價值としては、それらはたゞ特種の欲望との關係において交換されるにすぎぬ。しかるに商品は、たゞ等價物としてのみ交換され得、そして對象化された労働時間の等量としてのみ等價物であるところから、使用價值としての商品の自然の性質についての一切の關心、従つてまた、特種の欲望に對する關係についての一切の關心は消されて跡を止めない。交換價值としては一商品は、むしろ、他のあらゆる商品の任意の一定量——その所有者にとつて、自己が使用價值であると否とを問はず——にとつてかはるこ

とによつて、商品としての自己を立證する。だが一商品は、それが他商品の所有者によつて使用價值であるかぎりにおいてのみ、彼にとつての商品となり、そしてそれが彼にとつて商品であるかぎりにおいてのみ、該商品自體の所有者にとつての交換價值となる。かくして同一關係が、一方では、質的には等しくたゞ量的にのみ異なる大きさとしての諸商品の關係であらねばならず、一般的勞働時間の體現としてのそれらの同等化であらねばならぬと同時に、また、質的に異なる諸物として、特種の欲望に對する特種の使用價值としての、それらの關係であらねばならず、一口にいへば、現實の使用價值として差別化の關係であらねばならぬ。だが、この同等化と差別化とは交互に排斥する。そこで、二つの問題の一方の解決が、他方の解決を前提とするところから、そこに一つの循環論が現はれるばかりでなく、一つの條件を充たすことが、直ちにその反對條件を充たすことに係るところから、矛盾した諸要求の一全體が現はれる。

商品の交換過程は、これらの矛盾の展開であるとともに解決でなければならぬ。もつとも、その矛盾は、交換過程においてかゝる單純な形では表はれえない。吾々はたゞ、いかにして商品がそれ自身お互ひに使用價值として關係を結ぶか、すなはち、いかにして商品は、使用價值として交換過程の内部に現はれるかを見た。一方、これまで吾々の考察した交換價值は、吾々の抽象において存在した。ないしは、一箇の商品所有者の抽象において存在し、その彼にとつて、使用價值としての商品は

倉庫の中に、交換價值としての商品は意識の中に、あるかのやうに見えてゐたのだともいへよう。しかるに、商品それ自體は、交換過程の内部に、單に使用價值としてのみならず、またお互ひに交換價值として存在しなければならず、しかも商品のこの存在が、その固有の相互關係として現はねばならない。吾々が第一に逢着した困難は、商品が、交換價值として對象化された勞働として現はれるためには、まづもつて使用價值として讓渡され、人の手に渡つてをらねばならないのに、使用價值としての商品の讓渡は、あへこべに交換價值としての商品の存在を前提とする、といふことであつた。が、いま、この困難が解決されてゐるものとする。商品がその特種の使用價值を脱却し、その讓渡によつてもはや特定個人の特種勞働ではなしに、社會的有用勞働であるといふ質料的條件を充たしてゐるとする。さうなれば商品は、交換過程において、交換價值として、他の諸商品にとつての一般的等價物、對象化された一般的勞働時間となり、従つてもはや、特種の一使用價值の制限的作用でなく、その諸等價物としての、すべての使用價值で直接に表はされる能力をもたなくてはならぬ。が、あらゆる商品は、かく、その特種の使用價值の讓渡によつて一般的勞働時間の直接體現として現はるべき、まづ、かゝうした商品なのである。が、また、交換過程においては、たゞ特種の諸商品が對立し、特種の使用價值に體現された私的諸個人の勞働が對立する。一般的勞働時間とは、それ自身一つの抽象であり、かゝる抽象としてのそれは商品にとつて存在しない。

5. 第一商品の交換価値が、その現實の表現を見出すところの方程式の總和、たとへば、

$$1 \text{ エルレのリンネル} = 2 \text{ ポンドのコーヒー}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = \frac{1}{2} \text{ ポンドの茶}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = 8 \text{ ポンドのパン}$$

を觀察すると、これはいかにも同一量の一般的社會的労働時間が、一エルレのリンネル、二封度のコーヒー、二分の一封度の茶、等に對象化されることを意味するまでである。だが事實においては、これら特種の使用価値に表現される諸個人の労働は、これら特種の使用価値が自身のうちにふくむ労働の繼續時間に比例して、現實に互ひに交換される時のみ、一般的な、かつ現形態のまゝで、社會的な労働となる。社會的労働は、いはゞ潜在的にこれらの商品のうちに存在し、商品の交換過程において始めて顯現される。共同労働としての諸個人の労働が出發點ではなく、反對に、私的諸個人の特種の労働に始まり、それが交換過程において始めて、その元來の特性の止揚によつて、一般的社會的労働たることを立證するのである。従つて、一般的社會的労働は、既成の前提ではなく、生成しつゝある成果である。そこでまた、新たな困難が生ずる。すなはち、商品は、一方では對象化された一般的労働時間として交換過程にはいり込まねばならず、他方では、一般的労働時間としての諸個人の労働時間の對象化は、それ自體、交換過程の所産にすぎない、といふそれである。

各商品は、その使用価値の、すなはちその本來の存在の讓渡によつて、交換価値としてのそれ相當の存在を得なくてはならぬ。従つて商品は、交換過程において、その存在を二重に具へなければならぬ。が、他方では、交換過程においては商品のみが對立するのだから、商品の、交換価値そのものとしての第二の存在は、他の一商品のみがそれでありうる。では、いかにして特種の一商品が直ちに、對象化された、一般的労働時間として表はれるといふのか？ ないしは、別な言葉で、いかにして特種の一商品に對象化された個人的労働時間が、直ちに一般的といふ特性を得るといふのか？ その一商品の、すなはち一般的等價物としての各商品の、交換価値の現實の表現は、次のやうに、限りなき方程式の全連續にあつて示される。

$$1 \text{ エルレのリンネル} = 2 \text{ ポンドのコーヒー}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = \frac{1}{2} \text{ ポンドの茶}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = 8 \text{ ポンドのパン}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = 6 \text{ エルレの更紗}$$

$$1 \text{ エルレのリンネル} = \text{等}$$

この表現は、商品が、對象化された一般的労働時間の一定量として思考されただけのことであつた間は理論的であつた。一般的等價物としての特種の一商品の存在は、前のやうな方程式の一連續を單

に置換することによつて、單なる抽象から變じて交換過程そのもの、社會的成果となる。すなはちたとくば、

$$2\text{ポンドのコーヒー} = 1\text{エールのリンネル},$$

$$\frac{1}{2}\text{ポンドの茶} = 1\text{エールのリンネル},$$

$$8\text{ポンドのパン} = 1\text{エールのリンネル},$$

$$6\text{エールの更紗} = 1\text{エールのリンネル}。$$

コーヒー、茶、パン、更紗、等、一口にさへばすべての商品が、それ自身のうちにくむ労働時間をリンネルで表現するのに、リンネルの交換価値は、反對に、その等價物としての他のすべての商品で現はされ、そしてリンネル自體のうちに對象化された労働時間が、直ちに、他のすべての商品の種類の容量のうちに等一に表はされてゐるところの、一般的労働時間となる。そこでリンネルは、他のすべての商品のリンネルに對してのあまねき働きかけによつて、一般的等價物となるのである。前には、各商品が、交換価値として他のすべての商品の價値の尺度となつた。が、こゝでは反對に、すべての商品が、その交換価値を特種の一商品ではかることによつて、この獨自の商品が交換価値の妥當な存在となり、一般的等價物としてのその存在となる。これに對して、あらゆる商品の交換価値が表はされる無限の一系列、ないしは限りなく多數の方程式は、たゞの二項からなる單一の方程式に約元

される。ポンドのコーヒー = 1エールのリンネルが、今や、コーヒーの交換價値の餘蘊なき表現である。何故ならリンネルは、この表現において直ちに他のあらゆる商品の一定量に對する等價物として現はれるから。すなはち交換過程内において、諸商品は今や、互ひにリンネル形態の交換價値として存在し、ないしは現はれる。すべての商品が交換價値として互ひに關聯すること、對象化された一般的労働時間の異なる諸量としてのみ關聯することは、今や、交換價値としてのすべての商品が、同一の對象物リンネルの異なる諸量を表はすこととなつて現はれる。従つて一般的労働時間もまた、特殊の一物として、他のすべての商品と並んで、しかもそれらの外なる一商品として表現される。しかし、一商品が他の一商品にとつての交換價値として表はされる方程式、たとへば、ポンドのコーヒーとエールのリンネルは、これから實現されなくてはならぬ同等化である。一商品が、欲望對象たることを交換過程において立證するかいなかには依存するところの、その使用價値としての讓渡によつてのみ、商品は現實に、コーヒーといふ存在からリンネルといふ存在に轉化され、そこで一般的等價物の形態をとつて、そして現實に他のすべての商品にとつての交換價値となる。逆に、すべての商品が、使用價値としての讓渡によつてリンネルに轉化されるといふことによつてリンネルは、他のすべての商品の轉化されたる存在となり、かつこの、他のすべての商品のリンネルへの轉化の結果としてのみ、直接に一般的労働時間の對象化となる、すなはちあまねき讓渡の、個人的労働の止揚の、

所産となる。諸商品が、かやうに、お互ひにとつての交換價值として現はれるべくその存在を二重化するなら、一般的等價物として除外されたる商品の方は、その使用價值を二重化する。特種の商品としてその特種の使用價值の外に、一つの一般的使用價值を享ける。この一般的使用價值はそれ自身、形態確定であり、すなはち、この商品に向つての、他の諸商品のあまねき働きかけによつて、この商品が交換過程で演ずる特殊の役割から生ずる。特種の欲望の對象としての各商品の使用價值は、異なる人々の手において異なる價值をもち、たとへばそれを賣却する人の手においては、それを獲得する人のおけるとは、異なる價值をもつ。今や、一般的等價物としての獨自の商品は、交換過程自體のうちから生長する一般の欲望の對象であり、交換價值の擔ひ手、一般的交換手段であるといふその同じ使用價值を、あらゆる人に對してもつ。そこで、特種の使用價值であると同時に一般的等價物であり、従つてあらゆる人にとつての使用價值、一般的使用價值であるといふ、商品が商品としてふくむところの矛盾が、この一商品において解けてゐる。すなはち他のすべての商品は、今や、その交換價值を、まづ觀念上の、これから實現さるべき方程式——獨自の商品に對する——として表はすのだが、この獨自の商品の方にあつては、その使用價值は、實在的だといへ、交換過程自體においては單なる形態存在——現實の使用價值への轉化によつて始めて實現しうる——として現はれる。商品は最初、商品一般として、特種の一使用價值に對象化された一般の労働時間として現はれた。交換過程

において、すべての商品は、商品一般としての獨自の商品、商品中の商品、特種の一使用價值における一般の労働時間の存在たる商品、と關係をむすぶ。だから、特種の商品としてのあらゆる商品は、一般的商品としての特種の一商品と、對蹠的に關係する。で、商品の所有者が、かくして交互に一般の社會的労働としての彼らの労働に關係することは、彼らが交換價值としての商品に關係することとなつて現はれ、交換價值としての商品同士の交互關係は、交換過程において、その交換價值の妥當表現としての特種の一商品に對する諸商品のあまねき關係として現はれ、そのことがまた逆に、他のすべての商品に對するこの特種の一商品の特殊關係として現はれ、それ故にまたその特定なる、自然發生的に、社會的なる性質として現はれる。かやうに、すべての商品の交換價值の妥當的存在を現はすこの特種の商品は、ないしは特種の、獨自の、商品としての諸商品の交換價值は、貨幣である。貨幣は、諸商品が、交換過程それ自體において形成するところの、彼らの交換價值の結晶である。だから諸商品は、すべての形態確定を脱却して、その直接の質料的姿態において相互に關係することによつて、交換過程内で、お互ひにとつての使用價值となると同時に、お互ひに交換價值として現はれるためには、新たな形態確定をもたねばならぬ。貨幣形成へと進まねばならぬ。貨幣は象徴ではなす。商品としての使用價值の存在が象徴でないと同じことである。社會的生產關係が諸個人の外に存在する對象として表はれ、諸個人がその社會的生活の生産過程においてむすぶ特定の諸關係が、一物の特

殊の性質として表はれるといふこの顛倒と、空想的どころではなく、むしろ散文的に現實なるこの神祕化とは、交換價值をつくる労働のすべての社會的形態を特徴づける。この神祕化は、貨幣においては、商品におけるよりもさらに顯著に現はれるまでである。

(一三) この表現はジェノヴェジが用ひた(第二版註)。

すべての商品の貨幣態が結晶すべきところの、特種の商品に必要な物理的特性は、それが交換價值の性質から直接に生ずるかぎり、任意に分割しうることに、各部分が同質なること、およびそのすべての見本が無差異なることである。一般的労働時間の體現としてのそれは、一樣なる材質であり、量的差異のみを表はしえねばならない。もう一つの所要の特性は、その使用價值の永續性である。この商品は永く交換過程内に留まらねばならないからである。貴金屬はこれらの特性において優越する。貨幣は、思案や談合の所産ではなく、本能的に交換過程で形成されるのだから、實に種々様々な、多かれ少かれ不適當な商品が、代る代るに貨幣の機能を行つて來た。交換過程の發達のある段階において、交換價值と使用價值との諸規定が兩極的に諸商品に分配される必要が生じ、そこで、たとへば一商品が交換手段として作用する場合に、他商品は使用價值として賣却されるやうになり、それに伴つて、最も一般的な使用價值をもつ一つもしくは一つ以上の商品が、どこでもまづ偶然的に貨幣の役目を演ずることになる。かゝる商品は、直接現存の欲望の對象ではないにしても、富の質料的主要成分

としてのその存在が、自餘の使用價值より以上に一般的な性質を該商品に與へる。

交換過程の自然生長的形態たる物々交換は、貨幣への商品の轉化といふよりはむしろ、商品への使用價值の轉化の始まりを表はす。交換價值はまだ少しも自由な形態を受けず、なほ直接に使用價值にむすびついてゐる。これは二重にあらはれる。生産そのものは、その全構成において使用價值の生産に向けられ、交換價值の生産を目指さない。だからこの場合に、使用價值が使用價值たることをやめて交換の手段となり、商品となるのは、たゞ消費に要する程度を越えた生産剩餘によつてのことすぎない。使用價值はまた、たとへ兩極に分かたれてゐても、それが直接に使用價值である限界内のみ商品となることから、商品の所有者らが交換する商品は、そのおのものが非所有者の方に對して使用價值であるのはもとより、所有者のいづれにとつても使用價值たらざるを得ないことになる。事實において、商品の交換過程は、初めから、自然生長的な共同團體の内部に現はれるものでなく、却つて共同團體が共同團體でなくなるところ、その境界において、それが他の共同團體と接觸する少數の點に現はれる。こゝに交易が始まり、そこから共同團體の内部へと襲つて行つて、それを崩壊させるやうに作用する。だから、種々なる共同團體間の交易において、商品となつた特種の使用價值、たとへば奴隸、家畜、金屬、等が、概して、これらの共有制自體の内部における最初の貨幣を形づくるのである。吾々は、いかにして一商品の交換價值が、その等價物の系列が長ければ長いほど、また商

品の交換される範囲が大ならば大なるほど、いよいよ高度に交換価値としてあらはれるかを見た。交易の漸次的擴張、交換數の増加、交易に入りくる商品の多種化は、従つて、商品に交換価値として發展させ、貨幣形成に至らしめ、それとともに物々交換に向つて解體作用を及ぼした。經濟學者らは、貨幣の發生を、擴張した交易がつき當る外部的困難に歸するのを常とするが、それに際して彼らは、それらの困難が、交換価値の、従つて一般勞働としての社會的勞働の、發展から生ずることは忘れてゐる。一例をとらう。商品は、使用価値としては任意に分割されえないが、交換価値としてなら分割されうる。またAの商品がBにとつては使用価値であつても、Bの商品はAにとつて使用価値でないことがあらう。また、商品の所有者らが、交互に交換すべき商品にして分割しがたいものを、不等の價值比率において必要とすることもあらう、と。言葉を換へれば、經濟學者らは單純な交易を考察すると稱して、使用価値と交換価値との直接的統一としての商品の存在が包藏する矛盾の、ある一面を明らかにする。さうして彼らは、他方では、交易は商品の交換過程の妥當な形態であるとの説を固持し、交易にはたゞある種の技術的困難が伴ふだけであつて、貨幣は實にそれに對應するための、いみじく工夫された方便であると説く。この極めて淺薄な立場から、機智湧くがごときイギリスの一經濟學者が、貨幣は、船や汽船のやうに單なる物質的器具に止まつて、社會的生產關係の表現ではなく、従つて經濟的範疇ではない。だから事實上、工藝學と何の共通するところもない經濟學においてそれ

をとり扱ふのは間違ひである、と主張したのはもつともである。^(二五)

(一四) アリストテレスは、原始共同體からの私家族の發生について同じことをいつてゐる。しかし、家族の原始形態は種族家族であり、この種族家族の歴史的關係から、はじめて私家族が發展したのである。「家族であつたところ、最初の共同體においては、この技術は明らかに無用である。」(前掲書)

(一五) 「事實、貨幣は、賣買を行ふための道具にすぎないのであつて、だが、失禮ながら、賣買とは何のことだらう?」貨幣の考察が經濟學の一部をなさぬことは、船や蒸氣機關やその他、何でも生産と分配とを容易にするために用ひられる道具の考察と同様である。」(トーマス・ホッヂキソン「通俗經濟學」ロンドン、一八二七年、一七八、一七九頁)

商品の世界には、發達した分業が前提されてゐる。といふよりはむしろ、發達した分業は、直ちに使用価値の多様さにあらはれ、後者は特種の諸商品として相對し、それにおいて同じく多様な勞働方法がある。分業は、あらゆる特種の生産的職業様式の總體として、質料的方面から、使用価値をつくる勞働として觀察された社會的勞働の全形態である。が、分業としての分業は、商品の立場からは、また交換過程の内部にあつては、分業の結果のみに存し、商品そのもの、特殊化のみに存する。

商品の交換は、一つの過程で、それにおいて社會的質料轉換、すなはち私的諸個人の特種の諸生産物の交換が、同時に、特定の社會的生產諸關係の造出であり、諸個人は當の質料轉換においてそれらの關係をむすぶ。この、商品が互ひにとり換へられる關係は、一般的等價物の差別的諸規定に結晶する。従つて交換過程は、同時に貨幣の形成過程である。この、種々の過程の續行としてあらはれると

この過程の全體が、流通である。

A 商品の解剖の史的考察

商品を分析して二重の形態の労働に歸すること、使用価値を現實の労働もしくは合目的に生産的な労働に歸し、交換価値を労働時間もしくは平等の社會的労働に歸することは、イギリスではウキリアム・ペテイ、フランスではボアギューベルに始まり、イギリスではリカアドー、フランスではシスモンデイに終るところの古典經濟學の、一世紀半を超える諸研究の批判的成果である。

(一) ペテイとボアギューベルとの著作および性格の比較研究は、それが十七世紀の終り、十八世紀の初めにおける、英國と佛國との社會的對立の上に投げられてあらう強い光を外にしても、英國經濟學と佛國經濟學との國民的對照を起原的に示すであらう。同じ對照は、リカアドーとシスモンデイにおいて、最終的にくりかへされる。

ペテイは、労働の創造力の自然的制限について欺かれることなしに、使用価値を労働に還元した。彼は、現實の労働を、直ちにその社會的な全姿態において、分業として把握した。質料的富の源泉についてのこの見解は、たとへば彼の同時代人ホップスにおけるやうに、多かれ少かれ不毛なものではなく、經濟學が獨立の科學として分化した最初の形態である政治算術に彼を導いた。とはいへ、彼は、

交換価値をば、それが交換過程に現はれるがまゝに貨幣として解し、貨幣そのものをば、現存の商品、金および銀として解した。貨幣主義の諸觀念にとらはれて、彼は、金および銀を獲得するところの特定種類の現實の労働が、交換価値をつくる労働であると説いた。實際に彼が考へたのは、ブルジョア社會の労働は、直接の使用価値を生産してはならず、商品——すなはち交換過程で讓渡されて金銀として、すなはち貨幣として、すなはち交換価値、對象化された一般的労働として現はれるやうな使用価値を、生産せねばならぬ、といふのである。それにしても彼の場合は、確かに次のことを示してゐる。労働を質料的富の源として認識することが、決して、労働を交換価値の源泉たらしめるところの特定の社會形態を誤認することを含まないわけではないことを、はつきりと示してゐる。

(二) ペテイは分業を生産力としても展開した——しかもそれを、アダム・スミス以上の大規模において。「人類の増殖に關する論文」第三版、一六八六年、三五—三六頁参照。この論文において彼は、後年アダム・スミスが留針の製造をもつてしたやうに、懷中時計の製造によつて、生産にとつての分業の利益を示したばかりでなく、同時にまた、一大工場施設と見た都市および一國全體の考察によつてそれを示した。一七一一年十一月二十六日の「スペクテーター」紙が、この「偉大なるサー・ウキリアム・ペテイの説明」について述べてゐる。で、マカロックが「スペクテーター」は、ペテイを四十歳も年少の學者と間違へてゐる、と考へたのは謬りである。マカロック「經濟學文獻、分類目錄」ロンドン、一八四五年、一〇五頁参照。ペテイは、新しい科學の建設者といふ自覺をもつてゐた。彼は、自分の研究方法は「傳統的なそれでない」といつてゐる。彼は、比較級や最上級の言葉を羅列し、思辨的文字をつらねる代りに、數字や重量や尺度の言葉で語らうとし、ひとへに感覺的經驗から立論し、そして「目に見える根柢を自然の中にもつやうな」諸原因をのみ考察しようとして、「特定人の變りやすい心理、意見、欲求、情熱等」に依存する觀察は、彼は、これを他人に任せたとである(「政治算術……」ロンドン、一六九九年、序言)。

彼の天才的な鋭きは、たとへばアイルランドと高地スコットランドの住民および動産を、グレイト・ブリテンの殘餘の地に移すべしといふ提唱にも、示されてゐる。それによつて労働時間が節約され、労働の生産力が増加し、そして「國王および臣民は、一そう富強になるであらう」(「政治算術」第四章)と。また「政治算術」のある章において彼は、オランダがなほ商業國として重要な役割を演じ、フランスが今や支配的商業強國となりさうに見えた時に、イギリスの使命が世界市場の征服にあることを示してゐる。曰く、「英國の國王および臣民は、全商業世界の取引をやつてのけるに充分な力あり、かつ好都合な貯へをもつ」。(同書、第十章)。「英國の偉大にとつての邪魔は偶然のもの、除きうるものにすぎない」(二四七頁)。彼の書いたものにはみな、獨創的な機智が横溢してゐる。で、たとへば彼は指摘する。ちやうど今日の英國が、大陸の經濟學者らにとつて模範國であるやうに、當時の英國經濟學者らにとつての模範國であつたオランダが、世界市場を征服したのは、ある者がオランダ人に認めるやうな、神のごとき智慧や判断によるのではなく、自然的諸條件によるのである、(同書一七五、一七六頁)。彼は商業の條件としての信仰の自由を支持した。「何故なら、非國教徒は辛抱強い人々であり、労働と勤勉とは、神に對する彼らの義務なりと信ずるものであり、また「富をもつこと少きものこそは、より多くの智と理解、わけても彼らが主として貧しき者に屬するとなすところの神の事物についての智と理解をもつものだ、と信じてゐる」。「果してしからば、商業取引は、宗教なるものよりの一分派にも固有なるものでない。むしろ却つて……全宗教の異端的部分に屬する」。(同書一八三—一八六頁)。彼は、浮浪の徒救済のための公けの課税を提議した。理由は、彼らのために課税する方が、彼ら自身から課税されるよりも、公衆にとつてましだらうからである。一方では、彼は勤勉な人々の手から「食ひ、飲み、遊び、踊り、ないしは、形而上學をもてあそぶことより外に何もほしくない」やうな者の手に、富を移す租税には反對した。ベティの書いたものは殆んど古本屋の珍物であつて、散逸したみすばらしい舊版で得られるにすぎない。これは、ウキリアム・ベティがイギリス經濟學の父たるのみならず、また英國自由黨の創立者、別稱ランズダウン侯ヘンリー・ベティの祖先であるだけに一そう驚かされる。だが、ランズダウン家の者は、ベティの全集を公刊して、それに彼の傳記を添へないわけにはゆくまい。そしてこの場合にもまた、大概の自由黨の家族の起りについての「いはぬが花」があてはまる。クロンウエルの威をかりて、アイルランドを掠奪しようとしもすれば、その掠奪のために入用なバロンの稱號を得るために、チャールス二世の前に跪きもしようといふ、鋭い思索力はあるが、とるにたぬ一軍醫はたうてい公衆の觀覽に供するに適はしい型ではない。そればかりでない、ベティは、その生前に發表した彼の著作の多くにおいて、英國の繁榮はチャールス二世の時代に絶頂に達したことを證明しようといつてゐる。

——「光榮ある革命」の世襲的讚美者らにとつての異端的見解。

ボアギューベルはといふに、彼が、諸個人の労働時間が特種の産業諸部門に分配される正しき割合によつて、「眞の價值」(La juste valeur)を規定し、自由競争をもつて、この正しき割合をつくり出す社會的過程であるからには、彼もまた、意識的でないまでも、事實上、商品の交換價值を労働時間に還元するものである。が、それと同時に、そしてベティとの對照において、彼は熱狂的に貨幣に對して闘つた。彼によれば、貨幣は、その介在によつて、商品交換の自然的平衡、調和をみだすもの、あらゆる自然の富を犠牲にほしがる、奇怪至極な人身御供神である。で、ボアギューベルは、ルードキッヒ十四世の宮廷や、その徵税人や、貴族などの盲滅法の黄金慾を攻撃するといふのに、ベティは、一國民を刺戟して、産業的發展と世界市場の征服とに至らしめる強大な衝動を、黄金慾において祝福するのだから、貨幣に對するこの論争は、一面では特定の歴史的情勢に關聯してゐるにしても、しかも同時に、そこに純英國經濟學と純フランス經濟學との不斷の對照としてくりかへされるところの、より深い理論的對照が發現する。ボアギューベルは事實において、たゞ富の質料的内容、使用價值、享樂をのみ眺め、そして労働のブルジョアの形態たる、商品としての使用價值の生産、および商品の交換過程を、個人的労働がその目的を達するところの、自然にかなつた社會的形態と見たのである。だから、彼がブルジョアの富の特殊の性質にぶつかるときは、彼はそれを僭越な異分子の飛び

入りであるかに信じ、一つの形態のブルジョアの労働に對してはユートピア的に嘆美を與へながら、他の形態のそれに對しては激怒する。商品の交換價値に對象化され、時間によつて量られる労働が、諸個人の直接の自然的活動と混同されてゐるとはいへ、ポアギューベルは、労働時間が商品の價値量の尺度としてとり扱はれうることを立證した。

(三) ポアギューベルは當時の「暗闇的財政術」に反對していふ。「財政學は農業および商業の利害の深遠な知識に外ならない」と。「フランス詳論」一六九七年。「十八世紀の經濟財政學者」ユージエヌ・ディル發行、パリ、一八四三年、第一卷、二五一頁。

(四) が、ラテン系經濟學はさうでない。といふのは、イタリー學者は、英佛經濟學の對照をナポリおよびミラノのそれぞれの兩學派に複製してゐるし、初期のスペイン學者は、純重商主義者ないしはウスタリツのやうな溫和重商主義者であるか、もしくはヨヴェラノスのやうに(彼の「著作集」バルセロナ、一八三九—四〇年を見よ)、アダム・スミス同様「中庸」に終始する。

(五) 「眞の富……全享樂は、人生に必要なものばかりでなく、一切の奢侈品、および官能を喜ばせうところのあらゆるものを合んでゐる。」ポアギューベル「富の性質についての論考」前掲書、四〇三頁。ペティは輕浮な、掠奪好きで、節操もない冒險屋であつたが、ポアギューベルは、ルードキッヒ十四世の顧問の一人であるにもかゝらず、被壓迫階級に對して大膽な同情をもつてゐた。

(六) アルドドン型のフランス社會主義は、同じ國民的世襲悪にかゝつてゐる。

交換價値を労働時間に還元する最初の意識的な、殆んど微細にまで明らかにした分析は、新世界の一人において見られる。そこでは、ブルジョアの生産關係が、その擔ひ手とともに輸入されて、その歴史的傳統の缺如を豊饒な沃土が償つてゐる土壤の中で、急速に發達した。その一人とは、ベンジャミ

ン・フランクリンである。彼は、まだ青年時代の一七一九年に書いて一七二一年に出版した、その最初の著作において、近世經濟學の根本法則を定式づけた。彼は、貴金屬以外に價値の尺度を求めることが必要であると説く。労働こそはそれである。「労働によつてなら、銀の價値も、またその他の物の價値も量ることが出来る。たとへば、一人が穀物を生産するために働き、他の一人が銀を採掘し精鍊すると假定する。一年ないしは何らかの期間の終りに、穀物の全生産と銀の全生産とは互ひにとつての自然價格である。でもし一方が二十ブッシェルで、他方が二十オンスなら、その銀の一オンスは穀物一ブッシェルの生産に費した労働に値ひする。そこでもし、もつと近くの、もつと手數のかゝらない、ないしはもつと豊かな鑛山が発見されて、二十オンスを得たと同じ手數で今や四十オンスの銀を得、しかも二十ブッシェルの穀物を生産するのに以前と同じ労働を要するなら、銀二十オンスは穀物一ブッシェルを生産する、以前と同じ労働以上には値ひせず、また前の一オンスに値ひした一ブッシェルが、他の事情に變化がなければ、今や二オンスに値ひするであらう。であるから、一國の富はその住民が購ひうる労働の量によつてその價値が量られねばならぬ。」フランクリンにあつては、労働時間が、直ちに經濟的に一面的に商品の尺度として現はれる。現實の生産物の交換價値への轉化は自明のことであり、従つて生産物の價値大小の尺度の発見だけが問題となる。彼はいふ、「商業は一般に労働と労働との交換に外ならないから、あらゆる物の價値は最も正當に労働によつて量られる。」もしこの労働といふ言葉

に代へて現實の勞働といふ言葉をおけば、直ちに、一形態の勞働と他形態の勞働との混同が見られる。商業は、たとへば製靴勞働、鑛業勞働、紡績勞働、畫家の勞働等の交換に存するのだから、靴の價値は最も正當に畫家の勞働で量られるといふのか？ フランクリンは反對に、長靴、鑛物、紡績、繪畫等の價値は、何らの特殊の質なき、従つて單なる數量によつて量られるところの抽象勞働によつて決定されると考へた。⁽¹⁰⁾しかし彼は、交換價値に含まれた勞働を、諸個人の勞働のあまねき讓渡から生ずる、抽象的に一般的な社會的勞働としては展開しないので、必然的に、この讓渡される勞働の直接の存在形態としての貨幣を誤解した。従つて彼にあつては、貨幣と、交換價値をつくる勞働とは、少しも内部的關聯がなく、貨幣はむしろ技術上の便宜のために、交換のうちにも外的にもち込まれた道具である。⁽¹¹⁾フランクリンの交換價値の分析は、經濟學の一般過程に直接の影響は與へてをらぬ。何故かといふに、彼は特定の實際的諸問題に即して經濟學の個々の問題をとら扱つただけだから。

- (七) 「フランクリン集」スパークス編輯、第二卷、ボストン、一八三六年。「紙幣の性質および必要に關する小研究」。
- (八) 上掲書、二六五頁。「かくして一國の富は、その住民が買ひうる勞働の量によつてはからるべきである」。
- (九) 「商業は一般に、勞働と勞働の交換に外ならないのだから、すべての物の價値は、前述のごとく、勞働によつて最も正當にはかられる。」(上掲書、二六七頁)。
- (一〇) 上掲書、「アメリカの紙幣に關する事實ならびに考察」を見よ。一七六四年。
- (一一) 「アメリカ政治論集」參照。「アメリカの紙幣に關する事實ならびに考察」一七六四年(上掲書)。

現實の有用勞働と、交換價値をつくる勞働との對立は、いかなる種類の現實の勞働がブルジョアの富の源泉であるかといふ問題の形において、十八世紀のヨーロッパを騒がした。だから、使用價値に實現される、ないしは生産物をつくるあらゆる勞働が直接、富をつくるのではない、といふことはすでに前提されてゐた。だが重農學派にとつては、その反對者にとつてと同様に、いかなる勞働が、價値をではなく、餘剩價値をつくるかがやがましい問題であつた。すべての科學の歴史的發達が、交叉錯綜した道のある程度まで歩んでから始めて眞の出發點に到達するやうに、彼らもまた右の問題を、その初等的形態において解決する以前に、複雑な形態においてとり扱つてゐた。科學は、他の建設者とは違つて、その礎石をおく前にまづ、單に空中樓閣を築くだけでなく、建築物の二階だの三階だのをばらばらにつくり上げる。こゝではこれ以上重農學派に足を留めず、また多かれ少かれ適切な思ひつきで、正當な商品の分析にふれたイタリイ經濟學者の一群をも飛ばして、吾々は直ちに、ブルジョア經濟學の全體系を編み出した最初のイギリス人、サ、イ、ジ、エ、ム、ス、テ、ユ、ア、ー、トに移らう。彼にあつては、經濟學の抽象的諸範疇が、なほそれらの質料的内容からの分離の過程においてあらはれ、従つて曖昧に動搖的に現はれてゐるが、交換價値の範疇がやはりさうである。ある所では彼は眞の價値を勞働時間(一勞働者が一日になしうる勞働時間)で規定するが、しかしそれと並んで給料や原料が混亂的にもち出されてゐる。他の所では質料的内容との闘ひが、さらにありありと見られる。彼は、一

商品のうちに含まれた自然的物質、たとへば銀皿における銀を、その内的價值(インtrinsic value)（内在價值）と名づけながら、その一方で彼は、商品に含まれた労働時間をその使用價值と呼んでゐる。彼はいふ、「前者は何らかそれ自體實在的なるものであり……使用價值はこれに反し、それを生産するに要した労働によつて量られねばならぬ。質料の變形に用ひられる労働は、人の時間の一部分を代表する」と。ステュアートが、その先行者と追隨者とに拔んでゐるのは、交換價值に表現される特殊に社會的なる労働と、使用價值を目ざす具體的労働とはつきりと區別した點である。彼はいふ——その讓渡によつて一般的等價物をつくり出す労働を、私は産業(インダストリー)と名づける、と。産業としての労働を、彼は具體的労働から區別するだけでなく、労働の他の社會的形態からも區別する。この労働は、彼にあつては、古代および中世の形態と對立するブルジョア的な労働形態である。彼は、とくにブルジョアの労働と封建的労働との對立に興味をもつた。封建的労働は、彼はこれをその没落の様相において、故國スコットランドにおいても、また彼の長い大陸諸國の旅においても觀察してゐたのであつた。もちろん、ステュアートは生産物がブルジョア以前の諸時代においても商品の形態を得、商品は貨幣形態を得てゐることをよく知つてゐた。しかし彼は、富の初等的な基本形態としての商品が、また私有の主要形態としての商品が、また私有の主要形態としての讓渡が、ブルジョアの生産時代のみ屬すること、すなはち交換價值をつくる労働の性質が特殊にブルジョア的であることを、詳しく證明してゐる。

(一二) たとへば、アリアニ「貨幣論」、イタリイ經濟學古典、第三卷、近世の部(クストディ、ミラノ、一八〇三年)參照。曰く、「努力のみがすべての物の價值を與へることができぬ。七五頁。努力として労働をいひ表はすのは南方人の特徴である。

(一三) ステュアート「經濟學原理の研究、自由國家の對内政策の科學に關する論文」は、初め一七六七年クォート版二冊で、ロンドンにおいて發行された。アダム・スミスの「諸國民の富」の十年前である。私は一七七〇年のダブリン版を引證する。

(一四) 同、第一卷、一八一—一八三頁。

(一五) 同、第一卷、三六一—三六二頁。「人の時間の一部分を代表する。」

(一六) だから彼は、家長的な、直接に土地所有者のための使用價值創造にむけられた農業は、スバルタ、ローマ、ないしアチネにおいてはさうでなくとも、十八世紀の産業諸國においては、一つの「惡弊」であると説いてゐる。この「惡弊的な農業」は、「職業」ではなく「單なる生活の手段」である。ブルジョアの農業はその國土の過剩人口をかたづけるやうに、ブルジョアのマニユファクチュアは工場(ファクトリー)の過剩労働をかたづける。

現實の労働の特種の諸形態たる農業、マニユファクチュア、海運、商業、等が順々に、富の源泉として主張された後に至つて、アダム・スミスは、労働一般を、しかもその社會的全姿態において、分業として、質料的富もしくは使用價值の唯一の源泉として、主張した。それに際して彼は、自然的要素を全然度外視してゐるが、そのことは彼を、社會的富のみの、交換價值のみの限界内に追ひやつた。スミスはもちろん、商品の價值を、商品に含まれる労働時間によつて規定しはするが、しかしこの價值規定の現實性をば、アダム以前の時代へとおき違へてゐる。いひ換へれば、單純な商品の觀點からは正しく彼に見えてゐるところのものが、それに代つて資本、賃労働、地代等の、より高度、より複雑

な形態が現はれるやいなや、彼には不明瞭になるのである。それを彼はかういひ表はしてゐる。商品の價値が、商品に含まれる労働時間によつてはかられるのは、人間が、資本家、賃労働者、地主、小作人、高利貸等としてでなく、まだ單なる商品生産者、商品交換者として向き合つてゐるところの、ブルジョア制度の失樂園においてである、と。彼は、商品に含まれる労働時間による商品の價値の規定と、労働の價値による商品の價値の決定とを絶えず混同し、細論に入つて常に動搖し、社會的過程が不平等の諸労働に對して強制的に遂行するところの、客觀的な同等化を、諸個人の労働の主觀的な權利同等と見誤つた。^(一七) 現實の労働から交換價値をつくる労働、すなはち基本的形態におけるブルジョアの労働への過渡を、彼は、分業によつて説明しようとしてゐる。が、私的交換が分業を前提するといふのは正當であるが、分業が私的交換を前提するといふのは謬りである。たとへばペルト人の間には、何らの私的交換も發生せず、商品としての生産物交換は發生しなかつたにもかゝらず、大規模に分業が行はれてゐた。

(一七) たとへばアダム・スミスはいふ、「労働の同一量は、あらゆる時、あらゆる處において、労働するもの自身にとつて同一價値をもたねばならぬ。彼の健康、力、活動等が常態にあり、かつ彼のもちうるやうな熟練が平均度にあるとすれば、彼は常に、自己の休息、自由、および幸福の同一量を割愛しなければならぬ。彼が報酬として受ける諸商品の量の如何を問はず、彼が拂ふ價格は常に同一である。いかにもこの價格は、時には少量の、時には多量の商品を購入であらう。しかしそれはたい商品の價値が變化するからであつて、商品を買ふ労働の價値が變化するのではない。すなはち労働のみは、それ自身の價値を決して變へない。そこで労働は商品の眞價格である。」

アダム・スミスとは違つて、デイヴィッド・リカード^(一八)は明らかに、労働時間による商品の價値の規定をし遂げ、かつこの法則が、一見それと最も矛盾するやうに見えるブルジョアの生産關係をも支配することを示した。

リカードの研究は、ひとへに價値の大小に限られ、それに關聯して彼はすくなくとも、この法則の實現が、一定の歴史的前提に依存することを豫示してゐる。すなはち彼はいふ。労働時間による價値大小の規定は、「産業によつて思ふまゝに増量し得、かつその生産が無制限の競争によつて支配されるところの」商品にのみあてはまる、と。事實においてこれは、價値法則は、その完全な發展のためには、大産業生産と自由競争との社會、すなはち近代ブルジョア社會を前提とすることを意味するまでである。リカードは、他の箇所において、労働のブルジョアの形態を、社會的労働の永久的自然形態と見てゐる。彼は、原始漁夫と原始獵人とを、忽然、商品所有者と化し、魚と獲物とを、それらの交換價値に對象化された労働時間の割合で交換させる。この場合、彼は、原始漁夫と原始獵人とが、その労働要具の計算のために、一八一七年のロンドン取引所で行はれる年利表に相談するといふ時代錯誤に陥るものである。彼には「オーエン君の平行四邊形」が、ブルジョアの社會形態以外に、彼の知る唯一の社會形態のやうである。リカードは、ブルジョアの水平線内に囚はれてゐるとはいへ、その内奥では表面とは全く別物に見えるところのブルジョア經濟をば、ブルーガム侯をして「リカー

ドー君はまるで、別な星から下つて來たやうな人だ」といはしめたほどに、それほど鋭利な理論的洞察をもつて解剖してゐる。

シスモンデイは、リカードとの直接の論争において、交換価値をつくる労働の特殊の社會的性質を力説するとともに、^(二九) 價值大小を必要労働時間に、「社會の需要と、それを充足せしめる充分なる労働の量との關係」に約元することを、「わが現代の經濟的進歩の特質」としていひ表はしてゐる。シスモンデイはもはや、交換価値をつくる労働が貨幣によつて悪化されるといふ、ポアギューベルの考へに囚はれてをらない。だが、ポアギューベルが貨幣を難するやうに、彼は大産業資本を難する。經濟學は、リカードにおいては、向ふ見ずにその最後の結論をつけてそれで終るが、シスモンデイは、經濟學それ自體の疑惑を表明することによつて、その終りを完うする。

(一八) デーグッド・リカード「經濟學原理および租稅論」第三版、ロンドン、一八二二年、三頁。

(一九) シスモンデイ「經濟學研究」第二卷、フラスセル、一八三七年。「商業がもたらしたといふものは、使用價值と交換價值の對立である。」一六一頁。

(二〇) シスモンデイ、同上、一六三—一六六頁。

リカードは、古典經濟學の完成者として、労働時間による交換價值の規定をもつとも純粹に定式化し、かつ展開した。だから、經濟學者の間における論争はあつたから彼に集中する。その大部分の他

愛もないものを除けば、この論争は次の諸點に要約される。

第一、労働それ自體は交換価値をもち、異なる労働は異なる交換価値をもつ。交換価値を交換価値の尺度たらしめるのは循環論法である。何故なら、はかる交換価値そのものが尺度を要求するから、この反對論は、交換価値の内在的尺度として労働時間が與へられ、この基礎の上に労働を展開する、といふ問題に歸着する。賃労働の理論がこれに答へる。

第二、もし生産物の交換価値が、それに含まれる労働時間に等しいなら、一労働日の交換価値は一労働日の生産物に等しい。いひ換へれば、労働は労働の生産物に等しくなければならない。しかるに實際はさうでない。だからいけない。この反對論は、次の問題に歸着する。曰く、單なる労働時間によつて規定される交換価値に基づいて見るときには、いかにして労働の交換価値が労働の生産物の交換価値よりも少いといふ結果に至るのか？ 吾々はこの問題を資本の考察によつて解く。

第三、商品の市場価格は、需要供給の變動關係に伴つて、その交換価値以上に騰貴し、或ひは以下に下落する。従つて商品の交換価値は、需要供給の關係によつて規定され、商品に含まれる労働時間によつて規定されない。が事實において、この妙な結論は、いかにして交換価値の基礎の上に、交換価値と相違する市場価格が生ずるが、一そう正確には、いかにして交換価値の法則は、その反對にのみ實現されるか、といふ問題を提起するまでである。この問題は、競争の理論において解決される。

第四、最後の、そしてもし、いつもの變な引例の形でもち出されさへせねば、一見もつとも屈強らしい反對論は、もしも交換價值が、商品に含まれる勞働時間に外ならないなら、少しも勞働を含まない商品がどうして交換價值を所有するのか、別言すれば、單なる自然力の交換價值はどこから來るのか、といふにある。この問題は、地代論において解決される。

(一一) 他愛もないといへば、コンスタンシオのリカアドーの佛譯に、ジャン・バチスト・セイが加へた註釋である。哲學的傲慢といへば、マクレオド君の「交換論」(ロンドン、一八五八年)である。

(一二) プルジョア經濟學者らが、リカアドーに向けたこの駁論は、後には社會主義者によつて採用されるに至つた。定式の理論的正しさを假定した上で、彼らは、この理論と矛盾する實際を咎め、そして理論的諸原理から生ずると想像される諸結論を、實際上に實現せよ、とプルジョア社會に要求した。少くともイギリスの社會主義者は、かゝる仕方では、リカアドーの交換價值の定式を適用して經濟學に向けたものである。古い社會の原理を、新しい社會の原理として主張するばかりでなく、同時に自分を、リカアドーのイギリス古典經濟學の總遺產を總括した定式の發見者として主張することが、ブルードン君に残された仕事である。ブルードン君が海峽の向ふ側でそれを「發見」した時には、英國では、リカアドーの定式のニュートピア的解説もすでに忘れられてゐた。(拙著「哲學の貧困」パリ、一八四七年、構成された價值についての章參照)

第二章 貨幣または單純流通

一八四四年—一八四五年の、サー・ロバート・ピールの銀行條令に關する議會の討論において、グラッドストーンは、戀だつて貨幣の本質についての穿鑿ほどに人間を愚かにはしない、といつた。彼は、ブリトン人に向つてブリトン人のことを語つてゐるのである。が、オランダ人は違ふ。ペティの疑ひにもかゝらず、昔から貨幣の投機(スペキュレーション)にかけては「神のごとき智慧」をもつたこの人々は、貨幣の思索(スペキュレーション)においても、決してその智慧を失はなかつた。貨幣の分析における主要な困難は、商品そのものからの貨幣の發生が了解されれば、直ちに克服される。かう前提すれば、貨幣本來の形態規定をきれいに理解することだけが問題となる。が、それになると多少むづかしくはなる。何故といつて、一切のプルジョア的關係は、金鍍金され銀鍍金されて、すべてが貨幣關係と見られるので、貨幣形態も從つてまた、それ自身とは異なるで違つた、限りなく多様な一内容をもつかのやうに見られるから。

以下の研究においては、單に、商品の交換から直接に發生するところの、貨幣の形態だけが論ぜられる。貨幣の、生産過程のより、高き段階に屬する形態、たとへば信用貨幣のごときについては論じな

い。單純化の便宜上、本書を通じて、金をもつて貨幣商品と假定しておく。

第一節 價値の尺度

流通の最初の過程は、 S は、現實の流通にとつての理論的準備の過程のやうなものである。使用價値として存在する諸商品は、まづ第一に、それらが互ひに、觀念上、交換價値として、對象化された一般労働時間の一定量として現はれる、その形態をつくり出す。この過程に必然な第一歩は、すでに吾々が見たやうに、諸商品が、特殊の一商品たとへば金を、一般的労働時間の直接體現として、なししは一般的等價物としてとり除けることである。吾々は、商品金が貨幣に轉化するその形式に、しばし立ち戻らう。

1トンの鐵=2オンスの金。

1クォーターの小麥=1オンスの金。

1ポンドのモウ、カコーヒー= $\frac{1}{4}$ オンスの金。

1ポンドの炭酸加里= $\frac{1}{2}$ オンスの金。

1トンのブライル木材= $1\frac{1}{2}$ オンスの金。

X商品=Xオンスの金。

この一列の方程式において、鐵、小麥、コーヒー、炭酸加里、等はお互ひに、等量の労働、すなはち金に物體化された労働の體現として現はれ、それにおいては、諸商品の異なる使用價値となつて表はれる現實の諸労働の、一切の特殊性が消えてゐる。價値としては、これらのものは同一であり、同一労働の體現物、ないしは労働の同一體現物、金である。同一労働の等量の體現としてのこれらのものは、ただ一つの差異、量的差異を示すだけである。ないしは、これらのものの使用價値には、不等量の労働時間が含まれてゐるのだから、それらは異なる價値量として現はれる。かゝる個々の商品としてのそれらは、獨自の商品、すなはち金としての一般的労働時間そのものに關係しつつ、同時に一般的労働時間の對象化として相互に關係する。諸商品をば、互ひに交換價値として現はれしめるところの商品置換の關係と同じ關係が、金に含まれる労働時間をば一般的労働時間として表現し、後者の一定量が、鐵、小麥、コーヒー、等の種々なる分量、一口にいへばあらゆる商品の使用價値に表現され、ないしはいさなり商品等價物の無限の系列において展開される。諸商品が、あまねくその交換價値を金において表現するところから、金は、直接その交換價値をすべての商品において表現する。諸商品は、互ひに自分自身に交換價値の形態を與へるところから、金に、一般的等價物の、すなはち貨幣の形態を與へる。

すべての商品は、その交換價値を金ではかり、一定量の金と一定量の商品とが、等量労働時間を含

むやうな割合ではかるが故に、金は價值の尺度となる。そして金が、一般的等價物すなはち貨幣になるのは、たゞ價值の尺度としてのこの規定によつてのみであり、價值の尺度として金は、自身の價值を直接、商品等價物の全範圍においてははかるのである。一方、すべての商品の交換價值は今や、金で表現される。この表現においては、質的要因と量的要因とが區別されるべきである。商品の交換價值は等態同一労働時間の體現として存し、商品の價值量は表現しつくされてゐる。何故なら、諸商品が金と同等化されてゐる關係において、諸商品は互ひに同等化されてゐるから。一面では諸商品に含まれる労働時間の一般、性質が現はれ、他面では諸商品に含まれる労働時間の數量性が、等價物としての金に現はれる。かやうに、一般的等價として、また同時に特殊の一商品における、ないしは諸商品と特殊の一商品との方程式における、該一般的等價の大小として表はされたる交換價值が、價格である。價格は、商品の交換價值が流通過程内に現はれる、その轉化形態である。

諸商品が、その價值を金價格として表はす過程と同じ過程において、諸商品は金を、價值の尺度として、従つて貨幣として表はす。諸商品が、銀なり小麥なり銅なりで、あまねくその價值をはかり、従つて銀價格や小麥價格や銅價格として表はすなら、銀なり小麥なり銅なりは價值の尺度となり、それとともに一般的等價物となるであらう。流通において價格として現はれるべく、流通する諸商品はあらかじめ交換價值としてそこにある。すべての商品が、その交換價值を金で評價するが故にのみ、金

は價值の尺度となる。だがこの、諸商品を置き換へる關係の——それからのみ金の、尺度としての性質が発生するところの——普遍性は、次のことを前提とする。あらゆる個々の商品が、自己と金とに含まれる労働時間の割合に従つて金ではかられ、従つて商品と金とに通ずる實際の尺度が労働そのものであるか、ないしは、商品と金とが物々交換によつて、互ひに交換價值として等置されること、これである。いかにしてこの同等化が實際に行はれるかは、單純流通の範圍では説明しえない。だが、これだけのことは明らかである。金や銀を生産する國々においては、一定の労働時間が直接に金や銀の一定量に體化するし、一方、金も銀も生産しない國では廻り路をして——自國商品を、すなはち國民的平均労働の一定部分を、鑛山所有國の金や銀に體現された労働時間の一定量と、直接または間接に交換することによつて、同じ結果に立ち到る。價值の尺度として役立つためには、金は出来るだけ可變的價值であらねばならぬ。何故なら、金は労働時間の體現物としてのみ他の商品の等價物となりうるのだが、しかしこの労働時間が、現實の労働の生産力の變化につれて、同一使用價值の異なる容量のうちに實現するから。各商品が、その交換價值を、他の一商品の使用價值に表現する場合にあつてと同様、すべての商品が金ではかられる場合にも、たゞ、金が一定の瞬間に一定の労働時間を表はすといふことが、前提されるまでである。金の價值變化に關しては、さきに展開した交換價值の法則があてはまる。諸商品の交換價值が變らずにゐるなら、諸商品の金價格の一般的騰貴は、金の交換價值

が下つた時のみ可能である。金の交換價值が變らずにゐるなら、金價格の一般的騰貴は、すべての商品の交換價值が上つた時のみ可能である。商品價格の一般的下落の場合はその逆である。一オンスの金價值が、その生産に要する労働時間の變動の結果、下るか上るかするなら、一オンスの金の價值は、他のすべての商品に對して一様に、下るか、上る。従つて、金一オンスはすべてに對して、依然として一定量の労働時間を表はしてゐる。諸商品の同一交換價值が、今や、以前よりも大なるか小なる金量ではかられるのだが、しかしそれらの交換價值は、それぞれ自身の價值量に比例してはかられ、従つてそれら相互の間には同一價值率が保たれる。2:4:8の比率は、1:2:4なりしは4:8:16として、同率のまゝである。諸商品の交換價值をはかる金の分量の、金價值の變化に伴ふ變化が、價值尺度としての金の職能を少しも妨げないことは、恰かも金價值の十五分の一しかない銀價值が、金をその價值尺度たる職能から追ひ出すことを妨げないのと同じである。労働時間が金と商品とに通ずる尺度であり、金は、すべての商品が金ではかられるかぎりにおいてのみ價值の尺度となるのだから、貨幣が諸商品を同單位化するかのやうに見えるのは、流通過程のほんの外観にすぎない。對象化された労働時間としての諸商品の通約性こそが、却つて金を貨幣たらしめるのである。

(一) アリストテレスは、いかにも、商品の交換價值が商品價格の前提であることを見抜いてはゐた。「貨幣ある前にまづ交換あることは明らかである。何故といつて、家屋一箇に對して糞土五箇を與へようと、糞土五箇分の貨幣を與へようと、同じことなのだから。」が、他方では、商品に、價格において始めて、お互ひに交換價值形態をとりうるといふ理由から、貨幣が商品

に通約性を與へるのだとした。「だから、すべての價值が量られねばならぬ。かくてこそ不斷に交換が行はれ、それによつて社會も存在することが出来る。貨幣は物指しと同様、あらゆる物を同單位化し、等一にする。交換がなければ社會なく、等一がなければ交換なく、同單位化がなければ等一はない。」彼は貨幣で量られる種々な事物が、たうてい同單位化されえぬ諸量であることを隠さない。彼が求めたものは、交換價值としての諸商品の共通單位である。が、それを古代ギリシア人たる彼は、見出しえなかつた。彼は、事實上通約しえないものを、實際的要求が必要とするかぎりにおいて、通約しうるものたらしめることによつて、この困難を切り抜けてゐた。「これほど違つたものを同單位化することは、本當は不可能である。が、實際的目的のためには、それは許しうることである。」(アリストテレス「ニコマコス倫理學」第一卷、第五篇第八章、ベッケリ編纂、オクソニール、一八三七年)

諸商品が交換過程にはいりゆく現實の姿は使用價值であり、それらは、讓渡によつて始めて現實の一般的等價物とならねばならぬ。それらの價值規定は、單に觀念上の、該一般的等價物への轉化であり、これから實現されねばならぬ金との同等化である。が、諸商品は、それらの價格において、單に觀念的に金に、ないしは想像上の金に轉化されてをり、諸商品の貨幣存在は事實上、まだ現實の存在から分離されてゐないのだから、金は未だ觀念上の貨幣に轉化されてゐるにすぎず、價值の尺度たるに止まり、そして金の特定諸量は事實上、まだ特定諸量の労働にとつての諸稱呼として機能するにすぎない。金が貨幣として結晶化するその形態確定は、いつでも、商品が互ひに自身の交換價值を表明する、その特定の方法に依存する。

諸商品は、今や、二重の存在として互ひに對する。現實には使用價值として、觀念的には交換價值

として。諸商品は、今や互ひに、自身に含まれる労働の二重形態を表現することになる。といふのは、商品の使用価値としての特種の現實の労働が現實にそこにあると同時に、一方では、一般的抽象的労働時間が、諸商品の価格において一箇の想像上の存在を得、それにおいて諸商品は、同一價值實體の、等質な、たゞ量的にのみ異なる體現としてあるからである。

交換價值と價格との區別は、一面では、アダム・スミスがいふやうに、労働は眞の價格で、貨幣は諸商品の名目價格であるといつた風な、單なる名目上のものとして現はれる。もし一オンスの金が三十労働日の生産物なら、一クォーターの小麥が三十労働日で評價される代りに、今や、同じ小麥は一オンスの金で評價される。が、他面では、その區別は、單なる名義上の差異どころではなく、この相違の中にこそ、商品が現實の流過程で襲はれる暴風雨のすべてが集中される。三十労働日が一クォーターの小麥に含まれてをるから、だから小麥が直ちに労働時間で表はされるのではない。だが、金は小麥とは違つた商品であつて、果して一クォーターの小麥が、その價格において豫想されてゐるやうに、實際に一オンスの金となるかどうかは、流通においてのみ立證されることがらである。それは、小麥が使用價值としての自己を立證するかどうか、それに含まれた労働時間量が、小麥一クォーターの生産のために、社會がどうしても必要とする労働時間量としての自己を、立證するかどうかによつて定まる。商品としての商品は交換價值であり、一の價格をもつ。交換價值と價格とのこの相違に

おいて、商品に含まれた特種の個々の労働は、讓渡の過程において始めてその對立物としての、没個性的な、抽象的に一般的な、かつ、この形態においてのみ社會的なる労働として、すなはち貨幣として表現されねばならないことが見られる。が、件んの労働が果してかく表現されうるかどうかは、偶然に見える。それだから價格においては、商品の交換價值はたゞ觀念的にのみ商品と區別される存在を得、商品に含まれる労働の二重存在はまだ、二様の表現方法としてのみ存し、他方では、従つてまた一般的労働時間の體現物たる金は、まだ想像上の價值尺度としてのみ現實の商品に對するのだといへ、價格としての交換價值の存在、ないしは價值尺度としての金の存在のうちには、商品を正金に對して讓渡することの必要と、商品が賣れないことの可能性とが、一口にいへば次のことから生ずる全矛盾が、潜在的に含まれてゐる。すなはち、生産物が商品であること、ないしは、私個人の特種労働が社會的作用を営むために、その直接の對立物としての、抽象的一般的労働として表現されねばならぬことから發現するところの全矛盾が、である。であるから、かの、商品を欲して貨幣を欲せず、私的交換を基礎とする生産をば、この生産の必要條件を除外してもたうと欲するユートピア主義者らが、まづ實體的な形態における貨幣を「廢棄」する前に、早くも、價值尺度としての、その雲のごとく幻のごとき形態における貨幣を「廢棄」してゐるのは、彼らの主義に忠なるものである。眼に見えぬ價值尺度のうちに、硬い貨幣が待ち伏せする。

金を價値の尺度たらしめ、交換價値を價格たらしめたその過程を假定するとしても、すべての商品はその價格においてはまだ、大小さまざまの、想像上の金量にすぎない。同一物すなはち金の、かゝる種々量としての商品は、互ひに等一化され、比較され、秤量され、そこで商品が、尺度單位としての一定量の金に關係する技術的必要が發展して行く。この尺度單位は、自身が可除部分に割られ、それがさらに可除部分に割られることによつて、尺度標準にまで發展してゆく。が、かゝるものとしての金の諸量は、重さによつて秤量される。で、尺度標準は、諸金屬の一般的重量尺度においてすでに存在し、従つて後者は、金屬の流通する場合には、すべて最初から價格の標準として役立つものである。諸商品が、もはや労働時間ではかられる交換價値としてではなく、金ではかられた同稱呼の大きさとして、互ひに關聯するとすれば、金は、價値、尺度から價格標準に轉化する。金の種々量としての商品價格相互の比較は、想定された金の定量に書き込まれて、それをば可除部分からなる尺度標準として現はすところの諸々の數字に結晶されて来る。價値尺度としての金と、價格標準としての金とは、全然ちがつた形態確定をもつ。そして兩者の混同からばかけきつた學說が生まれた。金は、對象化された労働時間として價値尺度であり、一定の金屬重量として價格標準である。交換價値としての金が、交換價値としての商品に關聯してゐることによつて、金は價値の尺度となり、價格標準においては、一定量の金が、他の諸量の金にとつての尺度單位として仕へる。金が價値尺度であるのはその價値が可

變であるからであり、價格標準であるのは、金が不變の重量單位として固定されてゐるからである。ここにおいて、同單位の種々量の尺度規定のあらゆる場合と同様、尺度比率の確實と確定とが絶対必要となる。一定量の金をば尺度單位として、可除部分をば該單位の細別として、確定することの必要、その必要は、自然に可變なる價値をもつところの金の一定量が、ある固定した價値比率において、諸商品の交換價値に對置されてゐるかのやうな想念を産み出した。それにあつてはたゞ、金が價格の標準として發展する前に、すでに諸商品の交換價値が諸價格に、金の諸量に轉化されてゐることが、見逃されてゐるだけである。金價値がいかに變動しようとも、金の種々量は常に、互ひに同一の價値比率を表示する。金價値が一〇〇〇パーセント下落しても、十二オンスの金は依然として、一オンスの金に比べて十二倍の價値をもつであらうし、そして價格にあつてはたゞ、金の種々量相互の比率のみが問題である。また他方では、金一オンスはその價値の騰落とともに、決してその重量を變ずるものではないから、可除部分の重量もまた變ずるわけがなく、そこで金は、その價値がいかに變らうと、價格の固定的標準として常に同じ役目をつくすのである。

(11) イギリスにおいては、一オンスの金が、貨幣の尺度單位として、可除部分に分割されてゐないといふ不思議は、次のやうに説明される。「わが國の貨幣鑄造は、元來、銀のみを用ふるに適したものであつた。——従つて銀一オンスは、常に都合よい若干数の鑄貨に分割することが出来る。しかし金は、後になつてたゞ銀に適合させて鑄造に採用されたのだから、金一オンスは、都合よい數片に鑄造されえないのである。」(「マタラーレン」通貨史「一六頁、ロンドン、一八五八年」)

(三) 「貨幣は絶えず價值において變化しながら、しかも完全に停止してゐるかのやうによく價值の尺度たりうる。たとへば、それが價值において低落したとする。……低落前には、一ギニーが小麥三ブッシュェルもしくは六日の労働を購ひ、後では僅かに、小麥二ブッシュェルもしくは四日の労働を購ふであらう。どちらの場合でも、小麥および労働の貨幣に對する關係が與へられる以上、小麥と労働相互の關係は推定しえられる。いひ換へれば、小麥一ブッシュェルが二日の労働に價ひすることを確かめることが出来る。價值秤量なるものゝ意味のすべてに外ならないところのこれは、低落後も前同様わけなく出来る。一物の、價值尺度としての卓越は、その物の價值における變動性からは全然獨立してゐる。」(ペーレー「貨幣およびその變遷」一一頁、ロンドン、一八三七年)

後に金屬流通の性質から説明するであらうところの歴史的過程は、價格の標準たる機能にある貴金屬の重量が絶えず變動し、減少しても同一の重量名が維持されることを要求した。そこでイギリスのポンドは、その元來の重量の三分の一以下であり、聯合前のスコットランドのポンドは三十六分の一にすぎず、フランスのリーブルは七十四分の一、スペインのマラベデイは一千分の一以下、ポルトガルのレーは更にそれ以下の割合である。そこで金屬重量の貨幣名は、歴史的にその一般的重量名から分離した^(四)。尺度單位、その可除部分、およびこの可除部分の名稱の規定は、一方では純粹に因襲的であり、他方では流通の内部にあつて普遍性と必然性との特質をもたねばならぬから、それらは法律的規定とならねばならなかつた。従つて、純粹に形式的なるその運用は政府の役目となつた。貨幣の材料として役立つ特定の金屬は、社會的に與へられてゐた。國の異なるに従つて、おのづから法律上の價格標準が異なる。たとへば英國では、金屬重量としてのオンスは、ペニーウェイト、グレインおよび

カラット金量に分かれるが、貨幣の尺度單位としての金一オンスは、^(五)ソヴァレインに、ソヴァレインは二十シリングに、シリングは十二ペンスに分かれ、従つて、二十二カラット金百封度(一千二百オンス)が四千六百七十二ソヴァレインと十シリングに等しい。がしかし、國家的境界が消滅する世界市場においては、貨幣尺度のこの國家的特性は再び消滅して、金屬の一般的重量尺度に地位を讓る。

(四) 「今日では觀念的である鑄貨(たとへば、その名稱がもはやその價值に該當しないところの)は、どの國でも比較的古いものの中にある。かつては、それらはみな實質的であり、それがために計算の目的に役立つたのである。」(ガリアニ「貨幣論」前掲書、一五三頁)

(五) 浪漫的なアダム・ミューラアはいふ。「吾々の考ふところでは、あらゆる獨立君主は、金屬貨幣に命名する權利、社會的名目價值、等級、稱號を與へる權利を有する。」(アダム・ハインリッヒ・ミューラア「政治學の初歩」ベルリン、一八〇九年、第二卷、二七九頁)。稱號に關するかぎりでは、この宮中顧問殿は正しい。彼はたゞ實質を忘れてゐるだけである。彼の「考ふところ」がいかに混亂してゐたかは、たとへば次の言葉で知れる。「いかに多くが鑄貨價格の正しき規定にかゝるかは、誰もが知る。わけても英國のやうに、政府が宏大な寛容さをもつて無償で鑄貨し(ミューラア君は、英國政府の役人が、鑄貨費用を自分のポケットから出すと信じてゐるらしい)、すこしも鑄造料をとらない、等、等の國においては、さうである。で、すなはちそこでは、もし政府が金の鑄造價格をばその市場價格より著しく高く定めるなら、もし現在のごとく金一オンスに對して三ポンド十七シリング十ペンス半を與へる代りに、金一オンスの價格を三ポンド十九シリングに決めるなら、すべての貨幣は造幣局へ流入し、そこで得られた銀は市場において、こゝでは安いところの金と取り替へられ、そこでまた更にそれが造幣局へ送られることになり、鑄造制度は混亂に陥らざるを得ないであらう。」(二八〇頁、二八一頁)。ミューラアは、イギリスの造幣局の秩序を維持せんとして、彼自身を混亂におとしつけた。シリング、ペンスは、單に名稱であり、銀記號、銅記號で表はされた、金一オンスの一部分の名稱にすぎないのに、ミューラアは一オンスの金が、金と銀と銅とではかられると想像し、従つてイギリス人が三様の價值標準をもつてゐることを祝福してゐる。金と並んでの貨幣尺度としての銀は、形式上は一八一六年に

漸くジョージ三世によつて廢止されたが、事實において、それは夙に一七三四年にジョージ二世によつて法律上廢止され、實際に實行としては更にそれよりも早くから廢止されてゐた。ミューラアをして特別にいはゆる經濟學の高級理解に達するを得しめた事實は二つある。一方では經濟事實に對する彼の廣汎な無智、他方では哲學に對する彼の哲學的熱狂的態度がそれである。

一商品の價格、すなはち商品が觀念的に轉化されてゐる金量は、そこそ今や、金尺度標準の貨幣名でいひ表はされる。小麦一クォーターは金一オンスに等しいといふ代りに、英國でなら、小麦一クォーターは三ポンド十七シリング十ペンス半に等しいといふ、といつた次第だ。で、一切の價格は、同名稱でいひ表はされる。諸商品がその交換價值に與へる特有の形態は、諸商品がお互ひに幾何に價ひするかを語るところの、諸々の貨幣名に轉化する。貨幣は貨幣で計算貨幣となる。^(六)

(六)「人が、ヘラス人は貨幣を何のために使用するかとアナカルシスに問うた時、アナカルシスは答へた。計算に、と。」(ア
チナユス「晚餐における學者」シユヅァイグハイザア編、第二版、一八〇二年)

頭の中、紙の上、言葉についての、商品の計算貨幣への轉化は、どんな富でもが交換價值の觀點下に見つめられると同時に、常に生ずる。この轉化においては金の材質が必要であるが、——しかし單に觀念されたものとしてにすぎない。一千梱棉花の價值を、オンス金の一定數で評價し、そしてこの一定數オンスそのものを更にオンスの計算名、ポンド、シリング、ペンスでいひ表はすためには、現實の金の一原子をも要しない。で、一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行條令の發布前は、スコットランドでは、オンス金が、それもイギリスの計算尺度標準として三ポンド十七シリング十ペンス半に

ス半にいひ表はされて、價格の法定標準として役立つてゐたにもかゝらず、一オンスの金も流通しはしなかつた。で、また銀は、シベリア對支那の取引が、單なる交易にすぎなかつたにかゝらず、その商品交換における價格尺度として役立つてゐた。だから、計算貨幣としての貨幣にとつてもまた、その尺度單位の全部なり一部なりが實際に鑄造されてゐるかどうかは、どうでもよい。英國では、征服王ウキリアムの時代には、當時一封度の純銀であつた一ポンドと、二十分の一封度なるシリングとは、たゞ計算貨幣としてのみ存在したと同時に、一方では二百四十分の一封度の銀なるペニーが、當時存在した銀鑄貨中の最大なるものであつた。反對に今日の英國では、シリングおよびペンスは、一オンスの金の特定部分に對する法律上の名稱なるにかゝらず、それらがたゞの一箇も存在しないのである。計算貨幣としての貨幣は、一般にたゞ、觀念的にのみ存在しうると同時に、一方では實際に存在する貨幣が、全然他の標準に従つて鑄造されてゐる。で、北米の多くのイギリス植民地においては、そこに流通する貨幣が、ずつと十八世紀にはいつてからも、スペイン、ポルトガルの鑄造貨幣から成り立つてゐたが、しかも計算貨幣の方は、常に英國におけると同一のものであつた。^(七)

(七) 夙にアダム・スミスを佛譯した一人であるジェルメン・ガルニエーは、計算貨幣の使用と現實貨幣の使用との間の比率を確定するといふ、奇想な考へを抱いた。彼の比率は十と一とである。(ガルニエー「上代からの貨幣の歴史」第一卷、七八頁)
(八) 一七二三年のメリーランドの條令は、煙草を法定貨幣と定めた。しかし煙草の價值は、イギリスの金貨に約元され、一封度の煙草が一ペニーとされてゐた。この條令は、ローマ時代の *Leges barbarorum* (民族法) を想起させる。これにあつては

反對に、特定の貨幣額が、牡牛、牝牛、等と同量化されてゐた。この場合には、金でもなく、銀でもなく、牡牛や牝牛が、計算貨幣の實際の材質であつた。

價格標準としての金は、商品價格と同一計算名をもつて現はれ、たとへば一オンスの金も、一トンの鐵も、等しく三ポンド十七シリング十ペンス半でいひ表はされるといふところから、人はこれらの計算名をば金の鑄貨價格と呼んでゐる。そこで恰かも、金がそれ自身の材質で評價され、そして他のすべての商品と違つて、ある固定した價格を國家制度から得る、といふやうな奇妙な考へが生じて來た。特定の金重量に對する計算名の固定を、かゝる金重量の價值の固定と思ひ違へたのである。金が價格規定の要素として、従つて計算貨幣として役立つとき、金は少しも固定した價格をもたないばかりか、また價格なるものは少しももたない。金が價格をもつため、すなはち一般的等價物としての特、殊の一商品で表現されるためには、その特殊の商品は、流通過程において、金と同一なる独自の役割を演ぜねばならないことにならう。だが、他のすべての商品を除外する二つの商品は、お互ひを除外する。だから、金と銀とが法律上、貨幣として、すなはち價值尺度として並び存する場合には、いつも兩者を同一の材質として扱はうとする無効な試みがなされてゐる。同一労働時間が、不變的に、同じ比率の銀と金とに對象化されてゐると假定する者は、事實において、銀と金とが同一物質であると假定し、價值のすくない金屬の銀が、金の不變分數であると假定することになる。エドワード三世の治

世からジョージ二世の時代にいたるイギリスの貨幣史は、金銀の價值比率の法律的固定と、金銀の現實的價值動搖との衝突から生ずる、不斷の混亂をもつて終始する。ある時は金が、ある時は銀が、價值以上に評價された。價值以下に評價された金屬は、流通から引き去られ、鎔きつぶされ、輸出された。そこで兩金屬の價值比率が、さらに法律によつて變更された。が、新しき名目價值はまもなく、舊のそれと同じやうに、現實の價值比率と衝突しはじめた。現時にあつては、インドおよび支那の銀需要のために生じたところの、銀に對する金の價值の極めて輕度の一時的低落が、これと同一の現象——すなはち銀の輸出、金によつての銀の流通外への驅逐——をば、フランスにおいて遙かに大規模につくり出してゐる。一八五五年、五六年および五七年において、フランスの金輸出に對する金輸入の超過は四千一百五十八萬封度、銀輸入に對する銀輸出の超過は一千四百七十萬四千封度にのぼつた。フランスにおいてのやうに、金と銀とが雙方とも法定價值尺度で、支拂に際して雙方とも受け取る義務があり、しかも各人は、どちらでもを隨意に支拂つてよいといふ國々にあつては、事實上、價值において騰貴する金屬は打歩を生じ、自餘のあらゆる商品同様、自身の價值をば、價格以上に評定されてゐる金屬ではかることになると同時に、後者の金屬のみが價值尺度として役立つてゐる。この問題に關する一切の歴史的經驗は、結局、法律上二つの商品が價值尺度の機能を營む場合には、事實上つねにその一方のみが價值尺度としての地位を維持する、といふことに歸着する。

(九) たとへば、デーヴィッド・アークハート君の「親しき言葉」には、かう書いてある。「金の價値は、金自身によつて量られねばならぬ。どうして一物體が、他物において自身の價値の尺度たりえよう？ 金の價値は、金自身の重量によつて、その重量の假名の下に、設定されねばならぬ。——そして一オンスが若干ポンド若干分の一に價ひせねばならぬ。これは尺度を變造すること、標準を設定することではない。」

(一〇) 「貨幣は商業の尺度であり、従つて他のすべての尺度同様、できるだけ確實に保持されるべきである。しかるにもし貨幣が二種の金屬からなり、その價値比率が絶えず變動するならば、それは不可能である。」(ジョン・ロック「利子の低下に關する若干の考察」一八九一年刊、全集、ロンドン、一七六八年、七版、第三卷、六五頁)

B 貨幣の尺度單位に關する諸學說

諸商品は價格としてたゞ觀念的にのみ金に轉化され、従つて金は、たゞ觀念的にのみ貨幣に轉化されるといふ事態は、貨幣を觀念的尺度單位なりとする學說を生んだ。價格規定にあつては、單に想像上の金または銀が作用し、金および銀はたゞ計算貨幣としてのみ作用するところからして、ポンド、シリング、ペンス、ターレル、フラン等の名稱は、金や銀の重量部分、ないしはどうなりと對象化された勞働を示すのでなく、むしろ、觀念的な價値原子を示すのであると主張された。で、たとへば一オンスの銀の價値が騰れば、銀はかゝる原子のより多くを含むことになり、従つてより多くのシリングに算へられ、鑄造されねばなるまい、と。この説は、英國最近の商業恐慌に際して復活され、議會

でもまた、一八五八年の銀行委員會の報告に附屬する二つの特別報告の中で述べられてゐるが、それは十七世紀末に始まるものである。

ウキリアム三世即位の當時、一オンス銀のイギリスの鑄貨價格は五シリング二ペンス、すなはち六十二分の一オンスの銀はペニー、十二ペンスはシリングと呼ばれた。この標準に従つて、たとへば銀重量六オンスの銀が貨幣三十一箇に鑄造され、その一つがシリングであつた。しかるに一オンス銀の市場價格はその鑄貨價格以上に騰り、五シリング二ペンスから六シリング三ペンスになつた。すなはち、一オンスの銀地金を買ふのに、六シリング三ペンスを投ぜねばならなくなつた。鑄貨價格が單に一オンス銀の可除部分の計算名にすぎないのに、どうして一オンス銀の市場價格がその鑄貨價格以上に騰りうるのであらうか？ この謎は簡単に解かれる。當時流通してゐた銀貨五百六十萬ポンドのうち、四百萬ポンドは磨損され贋造されてゐた。一試験の結果、二十二萬オンスの重量あるはずの銀五萬七千ポンドが、僅かに十四萬一千オンスしかなくことが明らかになつた。造幣局はつねに同一尺度標準に従つて鑄造を續けた。が、實際に流通してゐた軽いシリングは、その名目が語るよりも小なる可除部分——オンスの可除部分——を代表してゐた。その結果、市場においては、一オンスの銀地金に對して、この小さくなつたシリング貨のより多くの量が支拂はれねばならなかつた。かくして生じた攪亂の結果として、全般的改鑄が決められた時に藏相ロビンデスは、これは銀一オンス價値が騰貴

したのでから、銀一オンスは前どほり五シリング二ペンスに鑄貨される代りに、以後は六シリング三ペンスに鑄貨されねばならないと主張した。つまり、事實上彼は、一オンスの價值が騰貴してゐるから、その可除部分の價值は下落してゐる、と主張したのでだ。だが、この謬つた理論は、正しい實際目的の粉飾たるにすぎなかつた。國債は、軽いシリングで契約されてゐた。それが重いシリングで償還されてよいのか？ 名目上は五オンスでも、實際には四オンスを得てゐる場合は四オンスを返せ、といふ代りに、逆に彼は、名目上では五オンスを返せ、だが、金屬の實質上ではそれを四オンスに減らし、從來五分の四シリングと呼ばれたものを今から一シリングと呼ばう、といつたのである。ロンドンデスは、理論においては計算名に執着しながら、事實においては金屬實質を固守してゐた。ひとへに計算名に執着し、従つて二割五分から三割がた目方の切れたシリングが、目方充分のシリングと同一だと唱へたところの彼の反對者らが、あべこべに、金屬實質のみに執着すべしと主張してゐた。

あらゆる形態における新しきブルジョア階級を、労働者階級および貧民に對する工業家を、古風の高利貸に對する商業家を、國債所有者に對する金融貴族を辯護し、そして自著の一つにおいて、ブルジョアの悟性を人間の規範的悟性として論證しなへしたところのジョン・ロックは、ロンドンデスにたいしても挑戦した。ジョン・ロックが勝つて、そしてギニー當り十シリングないし十四シリングで借りた貨幣が、二十シリングのギニーで返された。サー・ジェームズ・ステュアートは、この全取引を諷

刺的に要約していふ。「政府は租税の點で、債權者は資本と利子との點で、大いに利するところがあつた。そして、唯一の被詐欺者たる國民はまことに喜んでゐる。何故なら、彼らの標準（彼ら自身の價值の標準）が貶されはしなかつたから。」ステュアートは、更に商業が發展するにつれて國民はもつと横着になるだらうと考へた。が、彼は間違つてゐた。およそ百二十年ほど経つてから、同じ錯誤がくりかへされた。

(一) ロックはなにかんぐくかういつてゐる。「前に半クローネであつたものを、一クローネと呼ぶとせよ。價值は依然として金屬實質によつて定まつてゐる。諸君がもし、その價值を減らさずに、一貨幣の銀重量の二十分の一を減じうるものなら、その銀重量の二十分の一を減じて減じうるわけである。この説によると、一錢銅貨は、それがクローネと呼ばれさへすれば、その六十倍の銀を含むクローネ銀貨が購ふと同じだけの香料や、絹や、その他どんな商品でも購はねばならないことになる。諸君のなしうるところはといへば、少量の銀に多量のスタンブと稱呼とを與へることにすぎない。だが、負債を償却し、商品を買ふものは、銀であつて名稱ではないのだ。もし貨幣價值を引き上げることが、銀貨の可除部分に勝手な名目を與へること、すなはちたとへば、一オンスの銀の八分の一をペニーと呼ぶといふがごときことをしか意味しないものなら、諸君は實に貨幣の價值をどんなに高く定めてもいふことになる。」ロックは同時にロンドンデスに答へて、市場價格が鑄貨價格以上に騰貴するのは、銀價值が高まることに起因せず、銀貨幣が輕くなることに起因する。騰貴してゐる七十七シリングは、目方充分な六十シリングよりも一毫だつて多く目方がありはしない、と。最後に彼が正當に指摘してゐるのは、流通する貨幣の銀の減損といふことを外にしても、英國では銀貨の輸出を禁じながら、銀地金の輸出を許してゐる以上、銀地金の市場價格はある程度まで鑄貨價格以上に騰りうる、といふことである（前掲書、五四—一六頁、散見）。ロックは、議論の沸騰した公債問題には觸れないやうに、ひどく警戒してゐた。と同じやうに彼は、一つのデリケートな經濟問題に觸れることを用心ぶかく避けてゐた。問題とは、爲替相場もまた銀地金の銀貨に對する比例も、通貨の價值がその實際の銀減損の割合を遙かに超えて下落してはならないことを示したこと、これである。吾々は、流通要具の章において、一般的な形におけるこの問題に立ち戻らざらう。

コラス・パーボン「新貨幣の輕量製造に關する論文、ロツク氏の考察に答へて」(ロンドン 一六九六年)において、
ロツクを困難な地位に陥しおれようとして失敗してゐる。
(一) ステュアート、前掲書、第二卷、一五四頁。

イギリスの哲學の神祕的觀念論の代表者、ビショップ、バークレイが、貨幣の觀念的尺度單位の學說に向つて、實際的な「大藏大臣」が忽せにしたところの、理論的轉向を與へたのは當然のことである。彼は開ふ、「リップル、ポンド、クローネ等の名稱は、單なる比例(すなはち抽象的價值それ自體の比例)の名稱と見るべきではないのか? 金、銀ないし紙幣は、(價值比例の)算定、記録、移轉のための單なる切符、勘定札のたぐひではないのか? 他人の勞(インダストリー)を支配する力が、眞の富ではないのか? そして貨幣は、本當は、かゝる力を傳送し、記録する切符や證據に外ならないのではないか。そしてこの切符が、どんな材質で出來てゐるかが大した問題であるのか。」こゝに、一方では、價值の尺度と價格の標準との混同が、他方では、尺度としての金銀と流通票具としての金銀との混同が、現はれてゐる。貴金屬は、流通の部面において切符類にとつてかはられうるところから、バークレイは、この切符類なるものは何らの物をも代表しない、すなはち、抽象的價值概念を代表する、と結論するのである。

(三) 「質問者」前掲。「貨幣についての諸問」は概して才氣に富んでゐる。なかんづくバークレイが、北アメリカ植民地の發

展は、「金銀が、一國の富にとつては、すべて凡俗の輩が想像するほどには必要でないことを、白晝のごとく明らかにした」としてゐるのは正し。

貨幣を觀念的尺度單位とする學說は、ジエームス・ステュアートがこれをあまりに充分に發展してゐるために、彼の追従者ら——彼を知つてはゐないのだから、夢中の追従者ら——は、それに關する新しい説き方や、新しい例證を何一つ加へてゐない。ステュアートはいふ、「計算貨幣は、賣られる物の相對的價值をはかるために工夫されたもので、同部分の勝手な標準にすぎない。計算貨幣はだから、價格である鑄貨とは全く違つたものであり、すべての商品にとつての比例的等價物たりうる物體が、この世界に存在しなくとも、これは存在しうるであらう。計算貨幣は事物の價值に對して、度や分や秒などが角度に、ないしはスケールが地圖等に對してすると同じ役をする。すべてこれらの工夫にあつては、一つの名稱が單位として採用される。これらすべての工夫の役立ちが、割合の表示に限られてゐるやうに、貨幣單位の役立ちがやはりさうである。だから、貨幣の單位は、價值のいかなる部分に對してにせよ、それと常に一定した比率を保つことはできない。いひ換へれば、貨幣單位は、金や銀やその他いかなる商品の、いかなる特定量にも固定せしめうるものではない。一度單位が與へられ、ば、吾々は、それを乗ずることによつて最大價值にまで達しうる。商品の價值は、それに影響する諸事情の一般的結合と、人間の出來心とに依存するのだから、商品の價值は、たゞその相互の關係にお

てのみ變化するものとして考察するべきである。それだから、それらの比例の變化をば、一般的な一定不變の標準によつて確かめることを妨げ惑はすやうな事柄は、いづれも、商業に有害でなければならぬ。貨幣は、同部分の觀念的な尺度標準にすぎない。では、一つの部分の價値の尺度單位は何であらうかと問はれるなら、私は他の間によつてそれに答へる。曰く、一度の、一分の、一秒の正常の大きさは何であるか、と。それらのものは何ら正常の大きさをもたない。が、一部分が決定されるやいなや、残りの全部は一つの尺度標準の性質に應じて、比例的に定まつてゆかずにはをらない。この觀念的貨幣の實例としては、アムステルダム^(四)の銀行貨幣と、アフリカ海岸のアンゴラ貨幣とがある。

(四) 此に價格とは、十七世紀のイギリス經濟學においてきうであるやうに、現實の等價を意味してゐる。
(五) ステュアート、前掲書、第二卷、一五四、二九九頁。

ステュアートは、ひとへに、價格の標準として、また計算貨幣として、流通において見せる貨幣の現象に執着する。各種の商品がそれぞれ、十五シリング、二十シリング、三十六シリングといふ風に價格表に載つてゐるなら、それらの價値大小の比較にとつては事實上、銀の實質も、シリングといふ名稱も私の興味を惹かない。十五、二十、三十六といふ數の比例が、この場合すべてを語り、一といふ數が唯一の單位をなしてゐる。比率の純抽象的表現は一般に、抽象的な數的比率そのものにすぎない。だから徹底するためにはステュアートは、ひとり金銀のみならず、金銀の法律的洗禮名までも放

棄せねばならなかつたのである。彼は價値尺度が價格標準へ轉化することを理解しないから、あのづから、尺度單位として役立つ特定量の金が、尺度として、他の金量にではなく價値そのものに關係を來たすと信ずる。諸商品は、その交換價値の價格への轉化によつて、同一名稱の大きさとして現はれるところからして、ステュアートは、これらの商品を同名化するところの尺度の質を否定するのであり、またこの、各種の金量の比較において、尺度單位として役立つ金量の大きさが因襲的に定まつてゐるところからして、彼は、この金量の大きさが、一般的に確立されねばならないことを否定するのである。彼としては、圓の三百六十分の一を一度と呼ぶ代りに、百八十分の一をさう呼んでもよいことになる。さうなれば、直角は九十度でなくて四十五度ではかられ、それに準じて銳角も鈍角もはかられるだらう。だが、それにもかゝらず角度尺度は、依然として第一には、量的に規定された數學的一圖形なる圓たることを失はず、第二には、量的に規定された一圓弧たることを失はない。また、ステュアートがあげた經濟的例證に至つては、その一つをもつて彼自身を論駁し、他の一つをもつては何物をも證明しないのである。アムステルダムの銀行貨幣は、事實において、スペインのダブルン貨幣の計算名にすぎず、この貨幣は、流通するクラン貨幣が、外界との激しい軋轢のために瘦せ衰へていつた間に、空しく銀行の金庫にのさばつて、目方たつぷりな脂肪を落さずにもたものである。アフリカの觀念主義者の段になると、批評眼ある紀行文家が、もつとその詳細を知らせてくれるまで

は、吾々は彼を、彼の運命に委せなくてはならぬ。ステュアートの意味においては、観念的貨幣に近いものとして擧げられぬこともないのは、フランスの革命貨幣、すなはち「國民財産、百フランのアシニア」であらう。おそらくこの場合、アシニアが代表すべきは使用價值、すなはち沒收された土地は、いかにも列擧されてはゐたが、しかし尺度單位の量的規定が忘れられ、従つて「フラン」は意味のない言葉であつた。一アシニアフランがどのくらゐ、すなはちどれほどの土地を代表したかは、すなはち公けの競賣の結果に依存した。それにしても實際上は、アシニアフランは銀貨に對する價值表章として流通し、従つてその減價が、この銀標準によつてはかられたのである。

(六) 最近の商業恐慌に際して、英國のある方面では、アフリカの観念貨幣が強調的に頌讚された。が、今度はしかし、この貨幣の所在がアフリカの海岸からババライの中心地方へ移されてゐた。ババライ人が商業恐慌から免れてゐるのは、彼らのババライ貨幣の観念的尺度單位のせりだといはれる。商業および工業は、商工業恐慌の必要條件 (Conditio sine qua non) である、といふ方がもつと單純ではなかつたか？

イングランド銀行が現金拂を停止した時代は、戦時告示さへ、貨幣理論を生んだほどには生まなかつた。紙幣の下落と、金の市場價格の鑄貨價格以上への騰貴とは、二三の銀行支持者の間に、またもや観念的貨幣尺度論を喚起した。ロイド・キャッスルは、貨幣の尺度單位を「諸商品と比較される通貨に關しての價值感」であるとなすことによつて、この混亂した見解のために、古典的に混亂した表現を見つけてくれた諸般の事情が、バリの平和後數年にして現金拂を復興させた時、ウキリア

三世時代にローンデスが提出したものと同一問題が、その形もかへずに頭を擡げた。莫大な國債、二十年以上も積もり積もつた私債、固定した負債等が、下落した銀行紙幣で契約されてあつた。名目上の四千六百七十二ポンド十シリングが、實際には二十二カラット金百封度を代表するといつた銀行紙幣で、その負債が償却さるべきものであらうか？ バアミンガムの銀行家のダマス・アットウッドは、復活のローンデスとして現はれた。債權者は、名目上は、彼がさきに名目上契約したものと同數のシリングを受け取るべきであるが、しかし舊の鑄貨率に従つて、もし七十八分の一オンスの金が一シリングと呼ばれてゐたのなら、今はたとへば九十分の一オンスがシリングと命名さるべきである。アットウッドの一派は、「小シリング連」のバアミンガム學派として知られてゐる。一八一九年に始まつた観念的貨幣尺度についての唾み合ひは、一八四五年に至つてもなほサー・ロバート・ピールとアットウッドの間に續いてゐた。アットウッド特有の賢明さのほどは、それが尺度としての貨幣の機能に關するかぎりでは、次の引用文の中に包括しつくされる。「サー・ロバート・ピールは、バアミンガムの商業會議所との論戰においてかう問うてゐる、『諸君のポンド紙幣は何を代表するのであらう？ 一ポンドとは何であるか。……それとも反對に、現在の價值の尺度單位は、一體何であると解すべきであるか。……三ポンド十七シリング十ペンス半は一オンスの金を意味するのか、それとも一オンスの金の價值を意味するのか？ 金オンスそのものであるなら、なぜ物をその固有の名で呼ばないのか？——ポンド

ド、シリリング、ペンスといふ代りに、オンス、ペニイウェイト、グレインといはないのか？ が、さうなれば吾々は物々交易の制度に立ち歸る。……それとも價値を意味するのか？ もし一オンスが三ポンド十七シリリング十ペンス半に等しいのなら、なぜ一オンスの金は時によつて或ひは五ポンド四シリリング、或ひは三ポンド十七シリリング九ペンスに値ひするのか？ 云々』と。ポンド(磅)なる表現は價値に關係をもつが、しかし金の不變の重量部分に固定された價値にはない。ポンドは一つの觀念的單位である。……労働は生産費が解けこんでゐる實體であり、それが金にも、鐵にと同様、相對的價値をわかち與へる。だから、一人の一日の労働なり一週間の労働なりを表はすために、どんな種類の計算名が用ひられようとも、かゝる名稱は、生産される商品の價値を表現するのである。』

(七) 「通貨問題」ゲミニ文集、ロンドン、一八四四年、二六〇—二七二頁、散見。

この最後の言葉の中に、觀念的貨幣尺度なる模糊たる觀念は融けて消え、その本來の思考内容が暴露される。金の計算名なるポンド、シリリング等は、一定量の労働時間に對する名稱であるといふ。それならば、労働時間が價値の實體であり、價値の内在的尺度である以上、上のごとき名稱は事實において價値比率そのものを表はすことにならう。いひ換へれば、労働時間が貨幣の眞の尺度單位であると主張されるのである。これくらゐでバアミンガム學派はやめにするが、序でながら、觀念的貨幣尺度の學理は、銀行紙幣の兌換性または非兌換性に關する論争において新しき重要性を得た、といふこ

とを注意しておく。紙幣がもしその名稱を金や銀から得てゐるなら、紙幣の兌換性、すなはち金あるひは銀に對する交換性は、法律的规定がどうあらうと、經濟的法則たるを失ふものでない。で、たとへばプロシアのターレル紙幣は、法律上不換紙幣であるとはいへ、日常の取引において銀ターレル以下の價値に下るなら、すなはち實際において兌換不能になるならば、直ちに減價するであらう。だからイギリスの不換紙幣の支持者の徹底した者は、觀念的貨幣尺度に逃れた。もし貨幣の計算名なるポンド、シリリング等が、一商品が他商品との交換において、或ひは多く、或ひは少く吸収し、または放出するところの、一定量の價値原子に對する名稱であるのなら、たとへばイギリスの五ポンド紙幣は、自己と鐵や綿との關係から獨立してゐると同じやうに、自己と金との關係から獨立してゐる。とすれば、紙幣の名稱は、もはや紙幣をば金やその他、どの商品でもの特定量と理論的に等しからしめてはゐないだらうから、その兌換性の要求、すなはち、特殊化された一物の一定量と實際的に同等なることの要求は、該紙幣の概念そのものによつて排除されたであらう。

貨幣の直接的尺度單位としての労働時間についての理論は、まづジョン・グレイによつて組織的に展開された。彼は、國立中央銀行をして、その支店銀行によつて、種々なる商品の生産に費される労働時間を確かめさせる。生産者は商品と引き換へに、公けの價値の證明書、すなはち彼の商品が含むだけの労働時間に對する領收書を受け取り、そしてこの一労働週間、一労働日、一労働時間、等の銀

行紙幣は同時に、銀行倉庫に積まれた他のどの商品でもを等價物として受け取れる小切手として役立つ。^(一〇)これが根本原理であつて、それが詳細に互つて、そしていろいろ英國現存の諸制度物に託して注意ぶかく説述されてゐる。グレイはいふ。この組織の下においては、「貨幣に對して賣ることは、いつでも、ちやうど今日貨幣をもつて買ふことの容易なると同じやうに、容易ならしめられよう。生産は需要の一樣な涸れざる源泉であるであらう。」^(一一)貴金屬は他商品に對するその「特權」を失ひ、「バターや鶏卵や反物やキアラコと並んで、それ相當の位置を市場に占め、そしてその價値は、ダイヤモンドの價値同様、吾々の興味を惹かなくならう。」^(一二)「吾々は觀念的價値尺度、金、を保持して國の生産力を束縛すべきであるか、それとも價値の自然的尺度、労働、に赴いて國の生産力を解放すべきであるか？」^(一三)

(八) ジョン・グレイ「社會組織、交換の原理に關する一論文」エディンバラ、一八三一年。同著者の「貨幣の本質および有用に關する講義」エディンバラ、一八四八年、を参照。二月革命後グレイは、フランス假政府に建議書を送り、その中で彼はフランスは「労働の組織」ではなく「交換の組織」を要し、その組織の計畫は、彼の案出した貨幣制度のうちに充分に具體化されてあると教へた。正直者のジョンは、彼の「社會組織」の發刊後十六年にして、同じ發見の專賣特許を發明の天才ブルドンに奪はれようとは豫想しなかつた。

(九) グレイは「社會組織……」六三頁でいふ。「貨幣は單に一領收書であるべきだ。すなはちその所持人が、富の國民的貯蔵に向つて一定の價値を寄與してゐるか、ないしはそれを寄與した誰かから同じ價値に對する權利を得てゐることの證據、——それだけのものであるべきだ。」

(一〇) 「生産物にはあらかじめその見積價値を附しておき、それを銀行に保管させ、そして必要に應じていつでもまた引き出すことにする。その場合、前記の國立の銀行にどんな財産でも預ける者は、いくらでもそれが含むと同じだけの價値をそこ

からも出すことが出来、あへて預けた物自體を引き出すには及ばないといふことに、一同の同意によつて定めておくだけでよす。」(同書、六八頁)

(一一) 同書、一六頁。

(一二) グレイ「貨幣論講義……」一八二頁。

(一三) 同書、一六九頁。

労働時間が價値の内在的尺度であるのに、なぜそれと並んで、なほ他の外在尺度があらねばならぬのか？ なぜ交換價値は價格にまで發展するのか？ なぜ一切の商品は、その價値を獨自の一商品で秤量するのか？ すなはち、かくて交換價値の妥當的存在に、貨幣に、轉化されるところのその一商品で？ これがグレイの解かねばならぬ問題であつた。それを解く代りに、彼は、諸商品は直接に互ひに社會的労働の生産物として關係しうるであらうと想像した。だが諸商品は、それらがあるがま、ものとしてのみ互ひに關係しうるのである。諸商品は、直接には個別化された獨立の私的諸労働の生産物であり、この私的諸労働は、私的交換の過程におけるそれらの讓渡によつて、一般的社會的労働としての自己を立證しなければならぬ。すなはち、商品生産の基礎にたてる労働は、個人的諸労働のあまねき讓渡によつて、始めて社會的労働となる。しかるに、グレイが商品に含まれる労働時間を直接に社會的労働時間と假定するとすれば、彼はそれを共同的労働時間、ないしは直接に結合された諸個人の労働時間であると假定するものである。かゝる場合には事實において、金や銀のやうな

特種の一商品は、一般的労働の體現として他の諸商品に對することができない。交換價值は價格とはならないであらう。が、使用價值もまた交換價值とならないであらう。生産物が商品とならないであらう。そこで、ブルジョアの生産の基そのものが廢されるであらう。が、これは決してグレイの考へてゐたことではない。生産物は商品として生産されねばならないが、しかし、商品として交換されてはならない。この敬虔な願望の實行を、グレイは國立銀行に託した。銀行形態の社會が、一方では諸個人を私的交換の諸制約から獨立にし、他方では、彼らを私的交換の基礎に立つて生産を続けさせる。彼が單に商品交換から生ずる貨幣を「改革」しようとしたのが、しかもその内的徹底は彼を驅つて、ブルジョアの生産諸條件をつぎつぎに否定し去らせた。で、彼は資本を國有資本と化し、土地財産を國有財産と化す。そしてよくよく彼の「銀行」を視ると、それは單に一方の手で商品を受け取り、他方の手で給付労働の證明書を渡してゐるだけではなく、生産そのものを秩序立て、ゐるといふ始末である。彼が、しきりに彼の労働貨幣をば、純然たるブルジョアの改革として表はさうと試みてゐる彼の最後の著書「貨幣論講義」において、さらにけばけばしい矛盾の中に連れ込んでゐる。

(一四) 「あらゆる國における事業は國有資本で行はねばならぬ。」(ジョン・グレイ「社會組織……」一七一頁)

(一五) 「土地は國有財産に變ずべし。」(同書、二九八頁)

どの商品でもが、直ちに貨幣である。これが、グレイの不充分な、従つて謬れる商品分析から導き

出された理論であつた。「労働貨幣」と「國立銀行」と「商品倉庫」との『有機的な』組織なるものは、獨斷が手品で世界に普遍な法則に化けてゐる夢物語にすぎない。商品が直ちに貨幣であるとか、商品に含まれる私個人の特種労働が直ちに社會的労働であるとかいふ獨斷は、一銀行がそれを信じ、それに従つて行動することによつて、眞實なものとはもちろんならない。破産こそがそんな場合に、實際の批評家の役を引き受けるであらう。グレイの書にあつては隠されてをり、わけても、被自身に對して祕密にされてゐたこと、すなはち、労働貨幣なるものが、かの、貨幣から免れよう、貨幣とともに交換價值から、交換價值とともに商品から、商品とともに生産のブルジョアの形態から免れようといふ敬虔な願望に對しての、經濟的に鳴り響く言葉使ひであるといふことは、グレイの前または後に筆をとつた二三の英國社會主義者によつて、立ちどころに打ち明けられてゐる。だが、貨幣を地獄に落して商品を昇天させることが、社會主義の神髓であると眞面目くさつて説教し、よつてもつて社會主義をば、商品と貨幣との間の必然的聯關についての初等的誤解に歸着させることは、ブルードン君とその一黨のためにとつておかれた。

(一六) たとへば、ウキリアム・ソムアプスン「富の分配の攻究……」ロンドン、一八二七年。ジョン・ブレイ「労働虐待と労働救済」リーツ、一八三九年。

(一七) この種のメロドラマ式貨幣論の拔萃書と見るべきもの、アルフレッド・ダリモン「銀行改革論」パリ、一八五六年。

第二節 流通要具

商品が價格賦與の過程でその流通しうる形態を享け、金がその貨幣の特性を享けてしまつた後に、流通は、商品の交換過程が閉ぢこめてゐる諸矛盾を、同時に現はし、かつ解くであらう。現實の商品交換、すなはち社會的質料轉換は、使用價值および交換價值としての、商品の二重性が展開されながら、しかも同時に、商品自身の形態變化が貨幣の特定諸形態に結晶されるところの、一つの形態變化において行はれる。この形態變化の表述は、流通の表述である。商品の世界と、従つてまた、實際に發展した分業とが前提されるならば、商品は發展した交換價值にすぎないことを吾々は見たが、流通がやはり、あまねき交換行爲とその不斷の更新の流れとを前提する。第二の前提は、價格決定された諸商品としての諸商品が、交換過程に入りこむこと、もしくは、交換過程内で互ひに二重存在として、實質的には使用價值、觀念的には——價格において——交換價值として現はれること、これである。

ロンドンの繁華な街には商店が軒を並べ、その大きなショールウィンドウには、インド製のショール、アメリカの連發短銃、支那の磁器、バリ製のコルセット、ロシアの毛皮製品、熱帯地方の香料、等、世界のあらゆる富が輝いてゐる。だが、すべてこれらの享樂品は、その額に、L、s、dといつた風な略字で始まるアラビヤ數字が書きこまれた、運命的な白紙標をつけてゐる。これこそは、流通に現は

れた商品の姿である。

a 商品の轉形

精密に觀察するとき、流通過程は二様の循環形態を示す。いま商品をW、金をGで表はせば、その兩形態を次のやうに表はすことが出来る。

W—G—W

G—W—G

この章におしては、もつばら第一の形態、すなはち商品流通の直接的形態を扱ふことにする。循環W—G—Wは、二つの運動に分かれる。W—G、商品を貨幣に換へる交換、すなはち賣却、と、その反對の運動G—W、貨幣を商品に換へる交換、すなはち購買、とである。そしてこの兩運動の統一にあつてW—G—W、貨幣を商品に換へるために商品を貨幣に換へる交換、すなはち購買のための賣却となる。が、この過程それ自身が終結する成果としてW—Wが生ずる。商品を商品に換へる交換、すなはち現實の質料轉換が。

W—G—Wは、もし第一商品の極から出發すれば、商品の、金への轉化とそして金から商品への、商品の再轉換を表はす。すなはち、商品がまづ特殊の使用價值として存在し、次にこの存在を脱却し

て、その自然發生的存在との一切の關係から解放された交換價值、ないしは一般的等價物としての存在を獲得し、さらにまたこれを脱却して、そして結局、個々の欲望に對する現實の使用價值たるものに歸着するところの一運動を表はす。この最後の形態で商品は流通から消費に入る。だから、流通の全體 $W-G-W$ は、まづ個々の各商品が、その所持者にとつての直接的使用價值となるために通過する、轉形の全系列である。第一の轉形は流通の前半 $W-G$ にあつて、第二の轉形は流通の後半 $G-W$ において行はれ、しかして全體として流通は商品の履歴を形づくる。が、流通 $W-G-W$ は、單に單一の商品の總轉形でありながら、同時に、他の諸商品の特定の一面的な諸轉形の總計である。何故なら、第一の商品の各轉形は、他の一商品への該商品の轉化であり、従つてその他商品の、第一商品への轉化であり、従つてまた、流通の同一階段において行はれる兩面的の轉化である。で、吾々はまづ、流通 $W-G-W$ が分かれる二つの交換過程のものを、個別的に觀察しなければならぬ。

$W-G$ すなはち賣却、——商品 W は、單に特種の使用價值、たとへば一トンの鐵として流通過程に入るだけでなく、また特定價格の使用價值、たとへば三ポンド十七シリング十ペンス二分の一、すなはち一オンスの金として入る。この價格は一面では鐵に包含された労働時間量、すなはちその價值量の指數でありながら、同時にまた鐵が金たらんと欲する敬虔な願望、すなはち鐵自身に含まれる労働時間に、一般的社會的労働時間の姿態を與へんと欲する願望を表はしてゐる。もしもこの變質がもの

にならないとなると、一トンの鐵は商品たることのみならず、また生産物たることさへ歇める。何故といつて一トンの鐵は、その所有者にとつては非使用價值であるが故にのみ商品であるし、その労働は他に對しての有用労働としてのみ現實的労働であり、抽象的一般的労働としてのみ彼にとつて有用なのであるから。だから、鐵が金を引きつける點を商品界において見つけ出すことが、鐵の或ひは鐵の所有者の任務である。が、この困難、この商品の命がけの飛躍は、この單純流通の分析において假定されてゐるやうな賣却が、現實に行はれる時に克服される。一トンの鐵はその讓渡によつて、すなはちそれが非使用價值であるところの手から使用價值である手に移動することによつて、使用價值として實現されながら、しかも同時にその價格を實現して、そして單に想像されたる金から現實の金になる。一オンスの金の名稱、或ひは三ポンド十七シリング十ペンス半に代つて、今や現實の金の一オンスが現はれる。が、一トンの鐵は退場してしまつた。賣却 $W-G$ によつて、その價格において觀念的に金に轉化してゐた商品が、現實に金に轉化するといふだけでなく、同一過程によつて、また價值尺度としてたゞ觀念的貨幣であり、事實において商品の貨幣名そのものとしてのみ役目してゐた金が、現實の貨幣に變ずる。すべての商品がその價值を金ではかるが故に、觀念的に金が一般的等價となつたのと同じやうに、今や金は、金に對しての諸商品のあまねき讓渡の所産として——そして賣却 $W-G$ はこの普遍的讓渡の過程である——絶對的讓渡商品となり、現實の貨幣となる。だが金は、商品の交換

價值が價格において既に觀念的に金であつたが故にのみ、賣却において現實の貨幣となるのである。

(一) 「貨幣には、觀念的なものと現實的なものと二種あつて、そして異なる二用途に適應する。物の價值を規定することと物を購買することがそれである。評價の目的にとつては、觀念的貨幣は現實的貨幣に劣ることなく、或ひはむしろ勝りきする。貨幣のいま一つの用途の方は、それが評價した物自體を購ふことである。……價格および契約は觀念的貨幣で定められて、そして實質的貨幣で實行される。」(ガリアニ、前掲書、一一二頁)

賣却 $W-G$ にあつても、購買 $G-W$ にあつても、交換價值と使用價值との統一體なる、二箇の商品が對立する。が、商品においては、その交換價值は單に觀念的に價格として存するのみに、金においては、金そのものは現實の使用價值であるといへ、その使用價值が單に交換價值の擔ひ手としてのみ存在し、従つて單に形式的な、少しも現實的個人的欲望に關聯しない使用價值として存在する。そこで、使用價值と交換價值の對立は、兩極的に $W-G$ の兩極に分かれる。すなはち商品は、その觀念的交換價值、價格を金において始めて實現せねばならぬところの、金に對立する使用價值であるが、同時に一方、金は、その形式的使用價值を商品において始めて現物化するところの、商品に對立する交換價值である。商品のこの商品と金との二重化によつてのみ、そして、このさらに二重にして對立的なる關係、すなはち兩極のものは、その對極が現實なる場合に觀念的であり、そして、その對極が觀念なる場合に現實的であるといふ關係によつてのみ、つまり商品とは二重的に兩極的なる

對立として表はすことによつてのみ、商品の交換過程のうちに含まれる矛盾は解かれる。

吾々は今まで、賣却としての $W-G$ 、商品の貨幣への轉換を觀察してきた。しかし吾々をいま一つの極の方において見ると、同一過程はむしろ $G-W$ として、購買として、貨幣の商品への轉換として現はれる。賣却は必然に、同時にその對立たる購買である。過程を一つの側から見れば賣却、他の側から見れば購買である。ないしは、現實においてはこの過程は、 $W-G$ にあつては商品の、ないしは賣却者の極に發動が起り、 $G-W$ にあつてはそれが貨幣の、ないしは購買者の極に起るが故にのみ、區別が生ずる。すなはち吾々は、商品の第一轉形、商品の貨幣への轉換を第一の流通段階 $W-G$ の完了の結果として表はすことによつて、同時に、他の一商品がすでに貨幣に轉化されたといふこと、すなはちすでに第二の流通段階 $G-W$ にあるといふことを假定してゐる。そこで吾々は不斷に前提を循環させることになる。流通そのものがこの不斷循環なのである。 $W-G$ における G を、他の一商品の轉形として觀察しないとなれば、それは流通過程から交換行爲をとり去るものである。流通過程外では $W-G$ の形態も消え失せ、そしてたゞ二つの W 、たとへば鐵と金とが對立してゐるだけであつて、それらの交換は流通における特種の行爲のどの一つでもなく、物々交換の行爲である。金は、他のあらゆる商品と同様、その生産の起原において商品である。こゝにおいては、金の相對的價值と、鐵その他のすべての商品の相對的價值とは、それらが相互に交換されるその數量で表はされる。しかるに、

この作用は流通過程にあつてはすでに前提されてをり、商品それ自身の價値は商品價格において與へられてをる。だから、金と商品とは流通過程内で物々交換の關係に入るものであり、従つてそれらの相對的價値は單なる商品としての、それらの交換によつて確かめられる、といふ考へほど間違つたものはない。流通過程において、金が單なる商品として諸商品と交換されるやうに見えるとしても、この外觀は單に、價格において、すでに特定量の商品が特定量の金と等置されてゐることから生ずる。すなはち特定量の商品が、すでに貨幣としての、一般等價物としての金に關聯してをつて、従つて直接的にそれと交換されうる、といふことから生ずる。一商品の價格が、金に實現されるかぎりにおいて該商品は、商品としての、労働時間の特種の體現物としての、金と交換される。がしかし、金が金に實現されるところの商品の價格であるかぎりにおいては、該商品は、商品としてではなく貨幣としての金、またすなはち労働時間の一般的體現物としての金と交換される。だが、この兩關係によつて、商品が流通過程内で引き換へられるところの金の量は、交換によつて規定されるのではなく、交換が商品の價格、すなはちその金で評價された交換價値によつて規定されるのである。

(11) このことは、もちろん、商品の市場價格が商品の價値以上、或ひは以下になりうることを妨げない。だが、この考慮は單純流通には關係がなく、後に吾々が價値と市場價格の關係を攻究するであらうところの、他の範圍に屬する事柄である。

流通過程内では、金は、賣却 $W \rightarrow G$ の結果として各人の手に現はれる。が、賣却 $W \rightarrow G$ は、同時に

購買 $G \rightarrow W$ であるから、この過程が開始するところの商品 W が、その第一の轉形を行ふ間に、極として G に對立するところの他商品は、その第二の轉形を行ひ、従つて流通の後半をば、最初の商品がなほその過程の前半にある間に通過する、といふことは明らかである。

流通の第一過程たる賣却の結果として、第二の過程の出發點たる貨幣が出現する。第一形態における商品の代りに、その金等價物が現はれてゐる。この結果は、まづ一つの休止點をなしうる。この第二の形態における商品は、それに固有の永續的な存在を有するからである。その持ち主の手において使用價値でないところの商品が、今や、常に交換しうるが故に常に使用しうるころの形態において存在し、そして商品世界の地表のいかなる點で、いつ、それが再び流通に入るかは、その時の諸事情で定まる。商品の金への蛹化は、その生涯における獨立の一章をなし、商品は長かれ短かれそこに留まる。交易においては、一つの特定使用價値の交換は、直接に他の一特定使用價値の交換に結びついてゐるが、交換價値をつくる労働の一般的性質は、賣買の行爲が分離することと、情けなくちくはぐになることに現はれる。

購買 $G \rightarrow W$ は、 $W \rightarrow G$ の逆の運動であり、同時にまた、商品の第二の轉形、すなはち最終轉形である。金として、すなはち一般的等價物としてのその存在において、商品は直接的に、他のすべての商品の使用價値のうちに表現されうる。これらの他商品は、その價格においてすべて、自己の來世とし

ての金に向つて努力しながらも、同時に自己の肉體たる使用價值が貨幣の側に飛び移り得、靈魂たる交換價值が金そのものに飛び込みえんがために鳴らさねばならぬ譜をば、彼らの價格において示してゐる。商品讓渡の一般的產物は、絶對的に讓渡可能なる商品である。金の商品への轉化にとつては、質的制限は少しもなく、たゞ量的制限、すなはちそれ自身の量、ないしは價值量の制限があるにすぎない。「正金を出せばあらゆるものが得られる。」商品は、運動 $W \rightarrow G$ においては、使用價值として讓渡されることによつて、それ自身の價格と他人の貨幣の使用價值とを實現するが、運動 $G \rightarrow W$ においては、交換價值として讓渡されることによつて、それ自身の使用價值と、他人の商品の價格とを實現する。商品が、その價格の實現によつて同時に金を現實の貨幣に轉化すれば、その再轉換によつては、金を商品自身の單に瞬時的なる貨幣存在に轉化する。商品流通は發達した分業を前提し、すなはち、個人の生産物の一面性に反比例する彼の欲望の多面性を前提するところから、購買 $G \rightarrow W$ は、ある時は一箇の商品等價物を有する一方程式に表はれ、ある時は、購買者の欲望の範圍と彼の貨幣額の大きさとで限定された一系列の商品等價物に分裂する。——賣却が同時に購買であるやうに、購買は同時に賣却であり、 $G \rightarrow W$ は同時に $W \rightarrow G$ であるが、しかし發動はこゝでは金ないし購買者に起る。

すなはち、全流通 $W \rightarrow G \rightarrow W$ に立ち歸つて見るに、これにおいては、一商品がその轉形の全系列を通過することは明らかである。が、それにしても、この商品が流通の前半を開始して、そして第一轉形を

行ふあひだに、第二の商品は流通の後半に入り、その第二轉形を行つて、そして流通から離脱する。反對にまた、第一の商品が流通の後半に入り、その第二轉形を行つて、そして流通から離脱するあひだに、第三の商品は流通に入り、その行程の前半を済ませて、そして第一轉形を完了する。だから、一商品の全轉形としての全流通 $W \rightarrow G \rightarrow W$ は常に、同時に第二の商品の全轉形の終りであり、第三の商品の全轉形の始めである。すなはち、始めも終りもなき一系列である。商品の別を明瞭にするために、兩極の W を區別してたとへば $W' \rightarrow G \rightarrow W''$ とする。事實にあつて、第一環 $W' \rightarrow G$ は、他の $W \rightarrow G$ の結果としての G を假定し、従つてそれ自身ただ $W' \rightarrow G \rightarrow W''$ の最後の環にすぎない。と同時に一方、第二環 $G \rightarrow W''$ は、その結果にあつて $W'' \rightarrow G$ であり、従つてそれ自身 $W' \rightarrow G \rightarrow W''$ の最初の環を表はす……等である。また更に明らかなのは、後環 $G \rightarrow W$ は、その G はただひとつの賣却の結果であるとは $S \rightarrow G \rightarrow W' + G \rightarrow W'' + G \rightarrow W''' + \dots$ として表はすことが出来、従つて無數の購買に、すなはち無數の賣却に、すなはち商品の、無數の新たな全轉形の第一環に、分裂しうることである。とすると、もし單一の商品の全轉形が、一箇の、始めなく終りなき轉形連鎖の環としてのみならず、多數のかかる連鎖の環として表はされるなら、商品世界の流通過程は、各個の商品が流通 $W \rightarrow G \rightarrow W$ を通過する以上、かぎりなく異なる諸點において絶えず終るとともに、また絶えず新たに始まるところのこの運動の、限りなく纏れ合つた連鎖錯綜として表はれる。がしかし同時に、各個の賣却または

購買は、それぞれに無關係的、孤立的な行爲としてなりたち、それを補足するところの行爲は、時間的および空間的にそれと分離することが出来、従つてその繼續として直接に、それに結びつくことを要しない。種類の流通過程 $W-G$ ならし $G-W$ は、一商品の使用價值への轉化、および他商品の貨幣への轉化として、すなはち流通の第一および第二段階として、両面から、一箇獨立の休止點を形づくる。が、他方ではすべての商品は、一般的等價物、金の、商品に共通なる姿態において、その第二轉形を始めて、そして流通の後半の出發點に現はれる。現實の流通においては、任意の $G-W$ が任意の $W-G$ に接続し、一商品の生涯の第二章が、他商品の生涯の第一章に接続する。たとへば、Aは鐵を二ポンドで賣り、 $W-G$ すなはち商品鐵の第一轉形を行ひながら、彼の購買はこれを他日に延ばす。同時に、二週間前に二クォーターの小麥を六ポンドで賣つてゐたBは、同じ六ポンドでモーゼス商會の上衣とズボンを買ひ、 $G-W$ すなはち商品小麥の第二轉形を行ふ。この二つの行爲 $G-W$ と $W-G$ とは、この場合、單に一箇の鎖の環として現はれる。といふのは、Gにおいては、すなはち金にあつては、一商品は他商品と同じやうに見え、それが轉形した鐵であるか、それとも轉形した小麥であるかを、金において認識しかへすことは出来ないからである。だから、現實の流通過程においては $W-G-W$ は、種々なる全轉形の交錯した諸環の、かぎりなく偶然的な、前後左右への連なりとして表はれる。すなはち、現實の流通過程は、商品の全轉形としてではなく、また、對立的な諸相を通過

する商品の運動としてでもなく、偶然的に並行しまたは前後につづく、多數の購買および賣却の、ただの聚合として見られる。過程の形態確定は、かやうにして消失し、その消失は各個の流通行爲、たとへば賣却が同時にその對立の購買であり、またその逆でもあるところから、いよいよ完全である。が、他方においては、流通過程は、商品世界の轉形運動であるから、従つてこれをば自己の全運動に反映させずにはをらない。いかにそれを反映させるかは、次節において考察する。ここではなほ、 $W-G-W$ における二極のWは、Gに對して、同一の形態關係に立たないことに注意しなければならぬ。第一のWは、特殊の商品として、一般的商品としての貨幣に關係するの、貨幣は、一般的商品として、個別の商品としての第二のWに關係する。だから $W-G-W$ は、抽象的論理的には、推論形式 $B-A-E$ に還元することが出来、それにおいて、殊別は第一の極を、一般は連結する中間を、そして個別は最後の極を形づくる。

商品所有者は、單に商品の保護者として流通過程に入る。流通過程内において、商品所有者は、買手と賣手といふ對立形態で、一方は人格化された棒砂糖、他方は人格化された金として相對する。棒砂糖が金となるやいなや、賣手は買手に變る。だがこれらの特定の社會的特性は、人間的個性一般から生ずるのでは決してなく、その生産物を商品といふ特定形態において生産する人々の交換關係から生ずる。と同じやうに、買手と賣手が、彼らの個人的勞働が否定されて、どの個人でもない勞働

として貨幣となるかぎりにおいて、買手と賣手の關係に立つこともまた、かかる關係に表現される純粹の個人的諸關係などではない。だから、この買手と賣手との經濟的ブルジョアの性質を、人間個性の永久的社會的形態と解することが馬鹿らしいのと同じやうに、これらの性質を個性の廢棄であるとして嘆ずるのも僭越である^(三)。それらは、社會的生產過程の特定段階を基礎とする人間個性の必然的表現である。それにまた、この買手と賣手の對立においては、ブルジョアの生産の敵對的性質が、まだあまりに表面的形式的に表はされてゐるだけで、當の對立は、前ブルジョアの社會形態にも屬するほどのものである。ここではただ諸個人が、商品の持ち主として互ひに關係すれば足るのである。

(三) 賣買に現はれる敵對性の、極めて表面的な形態さへが、いかに深刻に、美はしい魂を惱ましたかは、イサーク・ペレイ君の「産業と財政」(パリ、一八三二年)からの左の引用が示してゐる。この同じイサークが、「動産銀行」の創立者重役として、有名なバリ取引所の狼であるといふことが、同時になぜ彼が經濟學の感傷的批評をやつたか、といふことを示す。當時サン・シモンの使徒であつたペレイ君はいふ。「各個人の産業の生産物の交換が各個人の間に行はれるのは、彼らが労働する時も消費する時も、互ひに孤立し分離してゐるからである。交換の必要から、事物の相對的價値を決定する必要が生ずる。かくして、價値と交換價値との觀念が密接に結びつけられ、兩者はその現實の形態において、個人主義および敵對主義を表現する。生産物の價値の決定は、賣却と購買とがあるが故にのみ、いひ換へれば、社會の種々なる成員の間に敵對關係があるが故にのみ起る。賣買のあるところにおいてのみ、いひ換へれば、各個人が、自己の生存維持に必要な對象物を得んとして争闘せざるを得ないところにおいてのみ、價格および價値がある。」(上掲書、二、三頁)

さて、W-G-Wの結果について見るならば、それはW-Wとさふ質料轉換に歸着する。商品が

商品と、使用價値が使用價値と交換され、そして商品が貨幣となることは、ないしは貨幣としての商品は、この質料轉換の媒介に役立つにすぎない。すなはち貨幣は、商品の單なる交換要具として現はれる。が、交換要具一般としてではなく、流通過程によつて特性づけられた交換要具、すなはち流通過要具として現はれる。

(四) 「金錢は手段方法にすぎない。しかるに、生活に有用なる物は終局であり目的である。」(ポアギューベル「フランス評論」一六九七年。ユージエヌ・デイルの「十八世紀の財政經濟學」第一卷、パリ、一八四三年、二一〇頁から)

商品の流通過程はW-Mをはり、従つて單に、貨幣によつて媒介される交易のやうに見えることから、ないしはまた一般にW-G-Wは、二つの孤立した過程に分離するのみならず、同時にその動的統一を表はすといふことから、賣却と購買との間には統一のみがあつて、分裂はないと結論しようとするのは、經濟學上からではなく、論理學上で批評されなくてはならぬ一つの思考様式である。購買と賣却との交換過程の分離は、社會的質料轉換に對する地方的原生的な、傳襲的に敬虔な、氣持よく愚かなる諸制限を突破してゆくと同時に、この分離はまた、社會的質料轉換における相關的な諸要因の滅裂化、およびそれらの對立化の一般的形態であり、一口にいへば商業恐慌の一般的可能性であつて、しかもそれはただ商品と貨幣との對立が、ブルジョアの労働に含まれる一切の對立の抽象的一般的形態なるが故に然るのである。だから貨幣流通は恐慌なしに生じうるが、恐慌は貨幣流通なしに

は生じえない。が、しかしこれはただ、私的交換に立脚する労働が、未だ貨幣形成にまで進んでゐない場合には、もちろんこの労働は、ブルジョアの生産過程の充分な發展を前提とする恐慌の現象などを起しえない、といふことである。従つて人は、貴金屬の「特權」を廢止することによつて、ないしは「合理的貨幣制度」によつて、ブルジョアの生産の「缺陷」を除去しようとする批評家の深さのほどを識ることが出来る。また、經濟學者的な辯明の模型としては、極めて鋭いものだと唱へられてゐる次の一節を引用すれば足るであらう。有名なイギリスの經濟學者ジョン・ステュアート・ミルの父、ジェームス・ミルはいふ。「すべての商品に對して、買手がないといふことは決してない。何人にせよ一商品を買手は、それと交換して一商品を得んと欲し、従つて彼は買手であるといふ單なる事實によつて、買手なのである。すべての商品の買手と賣手とを全體としてとるならば、形而上學的必然として、そこに均衡が保たねばならぬ。だからもし一商品の賣手が買手よりも多いとすれば、他の一商品の買手が賣手よりも多くなければならぬ。」ミルは、流通過程を物々交換に轉化しながら、流通過程から借り出した買手と賣手の人物を、再び物々交換の方へ密輸入することによつて、均衡を回復する。彼自身の纏れた言葉でいへば、たとへば一八五七年—五八年の、ロンドンおよびハンブルグの商業恐慌の際のある時期のやうな場合には、すべての商品が賣れず、事實において一商品、貨幣の買手は賣手よりも多く、他のすべての貨幣、諸商品の賣手は買手よりも多い。買手と賣手との形而上學

的な均衡なるものは、あらゆる購買は賣却であり、あらゆる賣却は購買である、といふ以外のなにものも意味せず、それが商品の守護者にとつて格別の慰めあるわけではなく、それが彼らを賣らせるのでも、従つて買はせるわけでもない。

(五) 一八〇七年十一月、イギリスで、ウキリアム・スペンスの「商業に依存せざる英國」といふ題名の小冊子が現はれた。この書物に展開された原理は、さらにウキリアム・コベットの彼の「政治論」において「商業を葬れ」といふ猛烈な題の下に詳論した。これに對してジェームス・ミルは、一八〇八年に「商業の辯護」を書いてゐるが、その中には、彼の「經濟學原論」から本文中に引用した議論が既に見出される。ジョン・パティスト・セイは、商業恐慌に關するシスモンディおよびマルサスの論争において、この器用な思ひつきをわが物とした。この滑稽な「科學のプリンス」が、いかなる新趣向をもつて經濟學を裨益したかを語ることは不可能であらうから、彼の功績なるものは、むしろ彼がその同時代人たるマルサス、シスモンディ、リカードを、一様に誤解したといふその公平さにあるのだが、大陸の彼の崇拜者らは、買手と賣手の形而上學的均衡といふ、あの寶物を掘り出したのは彼だ、と吹きたてた。

(六) 經濟學者らが、商品の種々なる形態確定をいひ表はす方法は、次の諸例で解らう。

「貨幣を所有してをれば、欲望の對象を得るために吾々はたゞ一回の交換をすれば足るが、他の剩餘生産物をもつてすれば、二つの交換をなさねばならず、その第一のもの（貨幣を獲得すること）は、第二のものよりも遙かに困難である。」(ジョージ・オプダイク「經濟論」ニューヨーク、一八五一年、二七七—二七八頁)。「貨幣のすぐれた賣却可能性は、諸商品の、より小さな賣却可能性の確な効果であり、またその自然的結果である。」(タマス・コルベット「諸個人の富の原因および懸容に關する研究……」ロンドン、一八四一年、一一七頁)。「貨幣は、それが測定する事物といつても交換されうる性質をもつ。」(ボザンケ「金屬、紙幣、信用通貨……」ロンドン、一八四二年、一〇〇頁)。「貨幣は常に他の諸商品を買ひうる。しかし他の商品は必ずしも貨幣を買ふことはできない。」(タマス・テューク「通貨の原理を論ず……」第二版、ロンドン、一八四四年、一〇頁)

賣却と購買との分離は、固有の取引と並んで、商品生産者と商品消費者との間の、確定的な交換に

先立つて多くの假想的取引を可能ならしめる。これが、無數の寄生物を生産過程に喰ひこませ、その分離を喰ひ物にさせる。といふことは、しかし、ブルジョアの勞働の一般的形態としての貨幣とともに、その諸矛盾の發展の可能性が與へられてゐる、といふことに外ならない。

b 貨幣の流通

現實の流通は、まづ、偶然に相並んで行はれる購買および賣却の無數として現はれる。購買においても賣却においても、商品と貨幣とは常に同一の關係で相對する。賣手は商品の側に、買手は貨幣の側に。だから流通要具としての貨幣は、常に購買要具として現はれ、それがために、商品轉形の對立的諸相における貨幣の差別的諸規定が、識別されがなくなつてゐる。

貨幣は、商品が購買者の手に移ると同じ取引において、賣却者の手に移る。かくして商品と貨幣とは正反對の方向に行き、そしてこの、商品が一の側に、貨幣が他の側に現はれるところの位置轉換は、ブルジョア社會の全面の極まりなき多數點において同時に行はれる。が、商品が流通において踏み出す第一歩は、同時にその最後の一步である。商品は、それが金を惹きつける(W-G)が故に、それとも金に惹きつけられる(G-W)が故に、その位置を去るにせよ、一回の行動によつて、一回の位置轉換によつて、流通の分野を脱して消費へと没する。流通は商品の不斷の流れではあるが、各商品

が一回づつしか動かないのだから、常に違つた商品が流れる。各商品はその流通の後半を同じ商品として始めるのでなく、違つた一商品として、金として始める。だから轉形せられた商品の運動は、金の運動である。同一片の貨幣、すなはちM-Mの行爲において、一度商品と位置を轉換したものと同一體の金が、逆に今度はM-Mの出發點として現はれ、そしてそこでもう一度、他の一商品と位置を換へる。貨幣は、買手Bの手から賣手Aの手に移ると同じく、今度は買手となつたAの手からCの手に移る。そこで、一商品の形態運動、その貨幣への轉化とその貨幣からの再轉化、すなはち商品の全轉形運動は、二つの異なる商品と二度その位置を換へるところの、同一個貨の外面的運動として表はれる。いかに分散的に偶然的に相並んで起らうとも、現實の流通においては、常に一人の買手に一人の賣手が對立し、そして賣られた商品の位置に移動する貨幣は、買手の手に歸する以前に、すでに一度他の一商品とその位置を換へてをらねばならない。がまた晚かれ早かれそれは、買手となつた賣手の手から、再び一人の新しい賣手の手に移り、そしてこの、貨幣の位置交換のしばしはなるくかへしのうちに、貨幣は商品轉形の連鎖を表現する。すなはち、同じ貨幣諸片が常に、動かされた商品と反對の方向に向つて、ある者は頻繁に、ある者は緩慢に、流通の一點から他點へと移り、従つてそれらは長短さまざまの流通曲線を描く。この、同じ貨幣片の異なる諸運動は、ただ時間的に繼續しうるだけである——いかにその反對に、諸商品と貨幣との空間的に相並んで行はれる、一度かぎりの

同時的位置轉換においてなされるところの、購買および賣却の多數なることと分散的なることが、見られるにしても。

(一) 同一商品は、幾度も買はれ賣られることは出来る。が、その場合は、商品は單なる商品として流通せず、ある一規定において流通し、該規定は單純流通の立場、商品と貨幣との單純なる對立の立場においては存在しないものである。

單純形態における商品流通 $W-G-W$ は、買手の手から賣手の手へ、そして買手となつた賣手の手から新しい一人の賣手の手への、貨幣の移動において行はれる。それをもつて商品の轉形は終り、従つてまた、その表現であるかぎりでの貨幣の運動が終る。がしかし、絶えず新たなる使用價值が商品として生産されて、絶えず新たに流通に投げ込まねばならないところから、 $W-G-W$ は同じ商品所有者の側からくりかへされ、更新される。商品所有者が買手として使用した貨幣は、彼が新たに商品の賣手として現はれるやいなや、再びその手に戻る。で、商品流通の常住の更新は、貨幣が絶えず一人の手から他の手へと、ブルジョアの社會の全面にわたつて轉々するのみならず、また同時に新しく同一運動をくりかへすべく、無數の諸點から出發しては同一點に復歸しつつ、種々雜多なる小循環の全體を描くといふことに映し出される。

商品の方は常に、貨幣と反對の方向へただ一步だけ動くにすぎないが、貨幣の方は常に、商品のために第二步を踏んで、そして商品がAといつてしまつた時にBといふといつた風であるところから、

諸商品の形態變化貨幣の位置轉換にすぎずと見られ、流通運動の繼續性はひとへに貨幣の方にあると見られる。さうなると、購買に際しては商品が貨幣によつて流通させられるが、賣却に際しては商品が貨幣を引き出して來て流通させるにもかかはらず、しかも全運動は、貨幣から出發するやうに見える。更にまた、貨幣は常に、購買要具としての關係において諸商品に對するが、かかるものとしては、ただ、彼らの價格を實現することによつてのみ彼らを動かすのであるところから、流通の全運動は、貨幣が諸商品と位置を換へ、それに際して、或ひは同時に相並んで行はれる種々なる流通諸行爲において、商品の諸價格を實現し、或ひはまた、繼起的なる流通諸行爲において同一貨幣片が異なる商品諸價格を順次に實現してゆくこととして現はれる。たとへばいま、現實の流通過程では認めがたくなるところの質的諸要因をば度外視しつつ、 $W-G-W-G-W-G-W-G-W-G-W$ ……を觀察すると、そこにはただ同一の單調な動作が見られるにすぎない。GはWの價格を實現した後に、順次に $W-W$ 等、等の價格を實現し、そして諸商品 $W-W-W$ 等、等は、いつも貨幣の棄て去つた位置に入れ替はる。すなはち貨幣は、商品の價格を實現することによつて、商品を流通させるやうに見える。この價格實現の機能において、貨幣はそれ自身、絶えず流通する——或ひは單に位置を轉じ、或ひは一箇の流通曲線を通過し、或ひはまた出發點と復歸點とが一致する小圓を描きながら。流通要具として、貨幣はそれ自身の流通を有する。だから過程しつつある商品の形態運動は、それ自身運動せざる諸商品の交

換を媒介する貨幣獨特の運動として現はれる。故に商品の流過程の運動は、流通要具としての金の運動——貨幣流通において自己を表現する。

商品所有者が、一物、金を、一般的労働時間の直接的存在に、すなはち貨幣に轉化して、もつて彼らの私的労働の生産物を社會的労働の生産物として表はしたやうに、今や、彼らの諸労働の質料轉換を媒介する彼ら自身のあまねき運動は、一物の特有なる運動として、すなはち金の流通として彼らに對する。社會的運動自體は、商品所有者にとつては、一方では外部的必然であり、他方では、個人をして彼が流通に投じた使用價值に對して、他の等量價值の使用價值を流通から引き出しえせしめるところの、單に形式上の媒介過程である。商品の使用價值は、流通からのその離脱とともに始まるが、流通要具としての貨幣の使用價值は、その流通すること自體である。流通における商品の運動は、その時かぎりのことにすぎないのに、流通における休みなき回轉運動は貨幣の機能となる。この流過程内の貨幣特有の機能は、流通要具としての貨幣に新しい形態確定を與へる。それを一そう立ち入つて調べなければならぬ。

まづ明らかなのは、貨幣流通が無限に分散した運動であることである。貨幣流通にこそは、流過程が購買と賣却とに限りなく分裂することと、商品轉形における相互補足的な諸相が無頓着にちくはぐになることが、映し出されるからである。出發點と復歸點とが一致するところの、貨幣の小循環

においては、なるほど一箇の復歸的曲線運動、すなはち實際の圓形運動が見られはするが、しかし、そこにはまづ商品の多數なると同様に多數なる出發點があり、その限りなく多數なることによつてすでにこれらの循環は、あらゆる統制、量定、ないしは算定から離れ去る。更に、出發と復歸との間の時間も不定である。更にまたかかる循環が、果して一定の場合に起るか起らないかのきまりもない。片手で貨幣を出したきりで、別な手でそれをとりこまなくても濟ませるものだ、といふことぐらゐ廣く知れ渡つた經濟事實はない。貨幣は、限りなく異なる諸點から出發して、限りなく異なる諸點に復歸するのだが、出發點と復歸點とが一致するのは偶然である。運動の過程において買手が再び賣手に變るとは、必ずしも極らないからである。貨幣流通は、一の中心點から外圍のすべての點へ走り、外圍のすべての點から同一中心點へ復歸する運動を表はすものではなほさらさない。一つの圓形として想念されたいはゆる圓狀運動なるものは、要するに、貨幣の現出と消失と休みなき位置轉換とがあらゆる點において看取される、といふことに外ならない。貨幣流通の高度の間接的形態、たとへば、銀行紙幣流通においては、吾々は、貨幣發行の諸條件が貨幣の復歸の諸條件を内包してゐることを見出すであらう。しかるに單純貨幣流通にあつては、同一人の買手が再び賣手になるのは偶然である。それにおいて現實の圓狀運動が絶えず表はれる場合には、その運動はより深い生産過程をただ反映してゐるまでである。たとへば、一工場主は彼の銀行から金曜日に貨幣を引き出して、土曜日にそれを労働

者に支拂ふ。労働者はその大部分をすぐに小商人その他に拂ふ。そして小商人は、それを月曜日にまた銀行へもちこむ。

貨幣は、空間にさまざまに相並んで起る賣買において、諸價格の一定總額を同時に實現して、そしてただ一度だけ商品と位置をとり換へるのを、吾々は見た。が他方ではまた、商品の全轉形の運動およびその連鎖が貨幣の運動において現はれるかぎりでは、同じ貨幣片は異なる商品の諸價格を實現しながら、多くなり少くなり何回かの流通を營む。で、一定の期間、たとへば一日における一國の流通過程をとれば、價格の實現のために、従つてまた諸商品の流通のために必要とされる金の總額は、一方では諸商品の價格の總額、他方では同一個貨の流通する平均度數といふ、この二重の要因によつて決定されてゐるであらう。この流通の度數ないしは貨幣流通の速度は、更にまた、諸商品がその轉形の種相を通過する速度、これらの諸轉形が連鎖として續行される速度、諸轉形を通過し終つた諸商品が流通過程において新しき諸商品にとつて代られる平均速度、によつて規定されてゐるか、ないしはただ平均速度を表現するまでである。價格賦與においては、すべての商品の交換價值が觀念的に同一價値量の金量に轉化され、二つの孤立した流通行爲 Q_1W と W_1Q_2 においては、同一價値額が一方では商品に、他方では金に二重に存在したのであるが、流通要具としての金の存在は、個々の休止態商品に對する金の孤立的關係によつて決定するのでなく、過程的な商品界における金の動的存在によつて

規定されてゐる。すなはち、その位置轉換において商品の形態變化を、すなはちその位置轉換の速度によつて商品の形態變化の速度を、表すべき金の機能によつて決定されてゐる。で、流通過程における金の現實的存在、すなはち、流通するところの現實の金の總量は、今や全過程そのものにおいて機能する彼の存在によつて規定されてゐるのである。

貨幣流通の前提は商品流通である。そしてしかも貨幣は、價格をもつ諸商品、すなはち觀念的にすでに特定の金量と等置されてゐるところの商品を流通させる。商品の價格決定そのものにおいては、尺度單位として役立つ金量の價値の大きさ、ないしは金の價値の大きさが、與へられたものとして前提されてゐる。で、この前提の下に、流通のために要する金の量は、まづ實現さるべき商品價格の總量によつて決定される。が、この商品價格總量自體は、(一)價格の程度、金で評價された商品の交換價値の程度の相對的高低によつて、(二)特定の諸價格で流通する商品の總額、すなはち、特定の諸價格での賣買の總額によつて決定される。一クォーターの小麥が六十シリングに價するなら、その小麥を流通させるため、すなはちその價格を實現するためには、小麥が三十シリングにしか價せぬ場合に必要とする金の、二倍の金を必要とする。六十シリングの小麥五百クォーターを流通させるためには、同一價格の小麥二百五十クォーターを流通させる場合の、二倍の金を必要とする。最後に、百シリングの小麥十クォーターを流通させるためには、五十シリングの小麥四十クォーターの流通の場合の、

半分の金で済む。とすると、價格の總量の増大する率よりも流通する商品の量の減少する率の方が大であれば、價格は上騰しても、流通に要する金の量は減らしうることとなる。逆にまた、流通する商品の量が減つても、その價格總量が一そう大なる率で増せば、流通要具の量は増加しうることとなる。でたとへば、イギリスの立派な精密な調査が、同國では穀物不作期の前半には、流通する貨幣の量が增加することを示した。それは、減少した穀物量の價格總額が、減少前の穀物量の價格總量よりもより大きく、しかも同時に、他の商品量の流通は、暫時のあひだ舊價格で故障なく行はれるからであつた。これに反して、不作期の後半においては、流通貨幣の量は減少する。穀物以外の商品が舊價格で以前より少量しか賣れなかつたからか、ないしはそれらの以前どほりの商品量が低い價格で賣られたからである。

(11) 「現に定まれる商品價格を維持するのに充分であるかぎり」貨幣の量は問題にならなぬ。(ボアギューベル、前掲書、二一〇頁)。もし四億ポンド商品の流通に、四千萬ポンドの通貨を要し、この十分の一といふ比率が適當な標準なのであつたのなら、流通商品の價值が自然な原因で四億五千萬に増加した場合に、その標準をつづけるには、通貨は四千五百萬に増されねばなるまい。(ウキリアム・ブレイク「政府の支出によつて生ずる諸結果の考察」ロンドン、一八二三年、四二頁)

しかしながら、流通貨幣の量は、吾々が見たやうに、實現さるべき商品價格の總量のみならず、また同時に貨幣が流通する速度、すなはち一定期間にこの實現の仕事をはたす速度によつて、決定される。同じ一箇のソヴァレインが、いつも、一日に一ソヴァレインの價格の商品の十回の購買をなし、

従つて十回手を換へれば、このソヴァレインはまさに、その一日にただ一回流通する十箇のソヴァレインと同一の仕事をはたす^(三)。すなはち、金の流通の速度は、金の量を補ふことができる。いひ換へれば、流通過程における金の存在は、商品と並んでの等價物としてのその存在によつてのみならず、また商品轉形の運動内のその存在によつても規定される。だが、貨幣流通の速度は、ただある一定の程度において貨幣の量を補ふにすぎない。限りなく分散した賣買は、與へられた各時點において、空間的に相並んで起るからである。

(12) 「貨幣の多量あるは少量を出現せしめるものは、貨幣の流通の速度であつて金屬の量ではない。」(ガリアニ、前掲書、九九頁)

流通する商品の總價格は増加しても、貨幣の流通速度の増加よりも小なる割合で増加すれば、流通要具の總量は減少するであらう。逆に、流通の速度が、流通する商品量の總價格よりは大なる割合で減少すれば、流通要具の總量は増大するであらう。一般的に低下する價格とともに増大する流通要具の量、一般的に騰貴する價格とともに減少する流通要具の量は、商品價格の歴史において最もよく知られた現象の一つである。が、價格の水準における上騰と、同時に貨幣の流通速度の度における一そう大なる上騰を齎らす諸原因、およびその反對の運動を齎らす諸原因は、單純流通の考察の範圍外に屬する。一例として舉げてよいのは、信用が優越してゆく時期には、貨幣の流通速度が商品の價格よ

りも迅速に増大するが、減退しゆく信用とともに商品の価格は、流通の速度よりも緩慢に低下してゆくことである。單純貨幣流通なるものの表面的形式的な性質は、流通要具の數量を決定する一切の要因——流通してゐる商品の量、價格、價格の騰落、同時的賣買の度數、貨幣流通の速度、等が、商品世界の轉形過程に依存し、これが更に生産方法の全特質、人口の大きさ、都市と農村との關係、運輸機關の發達、分業の程度、信用、等、つまりはすべて單純貨幣の外にあつて、ただそれに反映するにすぎないところの、諸事情に依存するといふ事實のうちに示される。

で、流通の速度が前提されれば、流通要具の總量は、單純に商品の價格によつて決定される。すなはち、貨幣が多く或ひは少く流通するから價格が高く或ひは低いのではなく、價格が高く或ひは低いが故に、貨幣が多く或ひは少く流通するのである。これは最も重要な經濟法則の一つであつて、詳細にそれを商品價格の歴史によつて證明したことが、恐らくはリカアドー以後のイギリス經濟學の唯一の功績をなすものである。經驗はいまや、金屬流通の水準ないしは特定の一國に流通する金なり銀なりの總量は、それに一時的干満がありまた時には激しい干満があるにもせよ、しかも全體としては長期に互つて變化がなく、そしてその平均水準の動搖は、ただ微弱な振動において續行されるにすぎないことを示してゐるが、この現象は、流通する貨幣の總量を規定するところの諸事情の、對立的性質によつて證明される。それらにおいて同時に起る變化は、それらの作用を中和させて、そしてすべて

を舊のごとくにあらしめる。

(四) 金屬の流通がその平均水準以下に異常に減少した一例は、一八五八年の英國に見られる。「ロンドン・エコノミスト」からの次の抜萃を見るがよい。「事の性質上(すなはち單純流通の分散的性質によつて)、市場においておよび銀行家以外の諸階級の手において、浮動してゐる現金の高に關する精確な事實は得られない。が、恐らくは、大商業諸國の造幣局の活動ないし不活動が、現金額の變動における最も指標らしい指標の一つである。多く要するならば多くつくられ、またあまり要らなければ少くつくられないであらう。……イギリス造幣局の鑄造額は、一八五五年に九百二十四萬ポンド、一八五六年には六百四十七萬六千ポンド、一八五七年には五百二十九萬三千八百五十五ポンドであつた。一八五八年には造幣局は殆んど少しも鑄造しなかつた。」(エコノミスト、一八五八年七月十日)。だが、同時にほぼ千八百萬ポンドの金貨が銀行の金庫に横たはつてゐた。

貨幣の流通速度が與へられ、諸商品の價格總額が與へられれば、流通する媒介物の量が決定されるといふ法則は、次のやうにも表はせる。すなはち、諸商品の交換價值と商品轉形の平均速度が與へられれば、流通する金の量は金それ自體の價值に依存する、と。だから、金の價值、すなはち金の生産に要する勞働時間が増減すれば、諸商品價格はこれと逆比例して騰落し、そして、流通速度が不變なら、諸價格のこの一般的騰落に應當して、同一商品量の流通に要する金の量が増減しなくてはなるまい。在來の價值標準がより多き、または少き價值の金屬にとつて代られる場合にも、また同一の變化が生ずるであらう。で、オランダが、國債債權者に對する願慮やカリフォルニアおよびオーストラリアの金發見の結果に對する懸念から、金貨幣を銀貨幣にとりかへた時には、同一商品量を流通させるためにそれまで必要とした金の、十四倍ないし十五倍に當る銀を要した。

流通する金量が、變化する商品價格總額と變化する流通速度とに依存するとすると、金屬流通要具の量は、或ひは收縮し或ひは膨脹しうるといふことになる。言葉を換へれば、金は流通過程の必要に應じて、ある時は流通要具として過程に入り、ある時はまたそれから離れなくてはならぬ。流通過程自體が、いかにしてこれらの條件を事實化するかを、吾々は後に學ぶであらう。

。 鑄貨、價值表章

金は、流通要具としてのその機能においてそれ自身の形狀を享け、鑄貨となる。金は、技術的諸困難によつてその流通を阻害されないやうに、計算貨幣の標準に適應して鑄造される。貨幣の計算名、ポンド、シリング等で表はされてゐる重量分の金を含むことを、その刻印と數字とが示すところの金地片が、鑄貨である。鑄貨價格の決定と同様、貨幣鑄造の技術上の仕事は國家の役目となつてゐる。計算貨幣としてと同様、鑄貨としての貨幣は地方的および政治的性質を享け、異なる國語を話し、種なる國民的制服を着る。鑄貨としての貨幣が通用する範圍は、従つて一社會團體の境界によつて區別された、內國的商品流通のそれとして、商品世界の一般的流通から區別される。

それにしても金地狀態の金と、鑄貨としての金とは、その鑄貨名とその重量名として區別されるまでである。重量名の場合に名稱の差異であるものが、今や單なる態容の差異として現はれる。金鑄貨

は、坩堝に投げこまれることが出來、それによつて再び肩書のない金に轉化されることが出來るやうに、逆に、金地金が鑄貨形態を享けるためにはただ鑄造所へ送られるだけでよい。一の態容から他の態容への轉換と再轉換とは、純然たる技術上の作業として現はれる。

純量二十二カラット金百封度ないしは千二百オンスに對して、四千六百七十二ポンド二分の一、すなはちそれだけのソヴァレイン金貨をイギリス造幣局から受け取り、これを天秤の一方の皿に載せ、他方の皿に百封度の金地金を載せるならば、兩者は平衡する。といふことは、ソヴァレイン貨は、イギリスの鑄貨價格上ソヴァレインといふ名で示されてゐる重量分の金で、かれ獨特の態容と刻印とを有するものであり、そのほかのなにもでもないことが證明される。この四千六百七十二ポンド二分の一の金ソヴァレイン貨は雜多の諸點から流通に投げこまれ、そこに捉へられて一日に一定度數の流通をする——あるソヴァレインは數多く、あるソヴァレインは數少く。一オンス當りの一日の平均流通數が十回であるとすれば、千二百オンスの金は、一萬二千オンスすなはち四萬六千七百二十五ソヴァレインに當るだけの商品價格總額を實現する。一オンスの金をいかにこね廻し、細工して見たところで、十オンス金にはともなるまい。しかるにこの流通過程では、事實において一オンスが十オンスになる。流通過程内における鑄貨の存在は、鑄貨に含まれた金量に鑄貨の流通數を乗じたものに等し。従つて鑄貨は、一定重量の個々の金地片としてのその現實的存在のほかに、その機能から生ずる

觀念的存在を得る。がしかしソヴァレーンは、一回通用しようと十回通用しようと、個々の購買なし賣却のちのちの際には、ただ一箇のソヴァレーンとして働く。それはちやうど、戰場において、十箇の異なる地點に敏活に出現することによつて十人の將軍の代りをする一人の將軍も、その各地點において同じ一人の將軍であるのと同様である。貨幣流通の場合に、速度によつて量を補ふことから生ずるところの流通要具の觀念化は、ただ流通過程内での鑄貨の機能上の存在に關するだけで、個々の貨幣片の存在は動かない。

それにしても、貨幣の流通は荒い浮世での運動であり、ソヴァレーンは「素性を明かさぬ」とはいへ、彼はごつちやな社會を駆け廻る、ありとあらゆる手や財布、ポケットや巾着や紙入れや、袋や箱との摩擦によつて、鑄貨は磨損し、ここに金の一原子、かして金の一原子が落ち、彼が浮世の漂浪とともに磨り減らされて、ますますその内的實質を喪つてゆく。使用されるがほどに使用しつくされる。その自然の生まれながらの性質が、まだ殆んど傷はれてゐないかに見える時のソヴァレーンを、いま捉へて見よう。「出來たてのピカピカの金貨を今日、銀行で受け取つて、明日それを製粉に支拂ふバン屋は、同じ純眞な金貨を渡してゐるのではない。バン屋が受け取つた時よりもそれは軽いのだ。」^(三)「事柄の性質上、單に普通の避けがたい摩擦作用の結果として、鑄貨が絶えず減價してゆかねばならぬことは明らかである。いかなる時においても、輕量鑄貨をたとへ一日でも流通から排除しつくすこ

とは物理的に不可能である。」^(三)「ヤチュブの見積もるところによると、一八〇九年にヨーロッパにあつた三億八千萬ポンド英貨のうち千九百萬ポンドは、一八二九年までの間に、すなはち二十年間に、全く消滅してゐたといふ。^(三)で商品は、流通過程に入ること一步にして早くもそこから離脱するといふのに、鑄貨は、流境界を歩むこと二三歩にしてすでに自己の有するより以上の金實質を表象する。鑄貨が同一速度で流通することが長ければ長いほど、ないしは同一時間におけるその流通が敏活であればあるほど、それだけ鑄貨としてのその存在が、金や銀としての存在から隔たつて来る。残るものは「偉大なる名の影」である。鑄貨の肉體はもはや影にすぎない。鑄貨は最初この過程によつて重みがついたのに、今やそれによつて軽くなる。が、一つ一つの賣り買ひにおいては、元來の金量として働きつづける。ソヴァレーンは、見せかけのソヴァレーンとして、見せかけの金として、正銘の金塊片の役を演じつづける。他の存在は外界との接觸によつてその理想的性質を失ふのに、鑄貨は實踐によつて理想化され、その金なり銀なりの肉體のただの假現と變ずる。この、流通過程そのものによつてなされる金屬貨幣の觀念化、すなはち、その名義上の内容と事實上の内容との分離は、一方では政府の、他方では私的投機者らの喰ひ物にされ、種々様々な貨幣悪化となつて現はれる。中世の初期から、ずつと十八世紀にはいつてからまでの貨幣制度の全歴史は、この兩方からの敵對的な貨幣劣悪化の歴史に歸着する。そしてクストデイの編纂にかかる浩瀚なイタリー經濟學者の論集は、大部分このことに關したものである。

- (一) ドット「産業の驚異」ロンドン、一八五四年。
 (二) 「銀行家の通貨問題評論」(エディンバラ、一八四五年、六九頁)。「もし僅かばかり使用されたエクスチェン(貨)が、全く新しいエクスチェン(貨)よりも僅かばかり安く通用するやうなことがあらうものなら、流通は絶えず阻害され、争ひの起らない支拂とはならないことになるだらう。」(ガルニエ、第一篇第一章、二四頁)。
 (三) ウキリアム・ヤコブ「貴金屬の生産および消費に関する研究」(ロンドン、一八三一年、第二卷、第二十六章)。

だが、貨幣の機能内での金の假想的存在は、その現實的存在と衝突を起して来る。流通に際して金鑄貨のある者はその金屬内容の比較的少量を失ひ、ある者は比較的少量を失ひ、従つて一ソヴァレイン貨は、事實において他のソヴァレイン貨よりその價值が大きい。しかしそれらは、鑄貨としてのその機能上の存在においては同一に働き、四分の一オンスの目方あるソヴァレインでも四分の一オンスあるかに見えるソヴァレイン以上では通用しないから、完全重量のソヴァレインの方は、くよくよししない所有者の手で局部的外科手術を施され、軽い方の兄弟たちに對して、流通自體が自然に行つたことが今や人工的になしとげられる。彼らは截られたりして、その餘計の金脂肪分が坩堝に投げ込まれる。もし四千六百七十二・二分の一ソヴァレインを秤にかけて、千二百オンスの代りに平均八百オンスしかかからないなら、その金貨は、金市場において八百オンス金しか買へぬであらう。いひ換へれば、金の市場價格がその鑄貨價格以上に騰るであらう。どの貨幣片でもが、たとへ目方充分でも、その鑄貨形態においては地金形態以下にしか通用しないことにならう。で、目方充分のソヴァレインの

方は、地金形態に還元されなくてはなるまい——すなはち、多量の金は少量の金より大なる價值をもつところの形態に。この金屬内容の減少が、かなり多数のソヴァレインを襲ひ、従つて金の市場價格が鑄貨價格以上に騰るやうになるやいなや、鑄貨の計算名は、もともとほりの名でありながら、より少量の金を表示することにならう。いひ換へれば、貨幣の標準が變じ、金は將來この新標準に準據して鑄造されるであらう。流通要具としてのその觀念化によつて金は、自己が價格の標準であつたその法定の比率に反作用してこれを変ずるであらう。同様の革命は、一定期間の後にまたくりかへされるであらう。で金は、價格の標準としてのその機能においても、流通要具としての機能においても、不測の變化に曝され、そこで一形態においての變化が他形態における變化を生み、それが更にまた反作用するであらう。このことは、さきに述べたところの、あらゆる近代國民の歴史において、同一貨幣名目が絶えず減少する金量を代表してゐたといふ現象を説明するものである。鑄貨としての金と、價格標準としての金との間の矛盾は、鑄貨としての金と、一般的等價物——この一般的等價物として金は一國境界内のみならず、世界市場を流通する——としての金との間の矛盾となる。價值の尺度としては、金はいつも完全重量であつた。この場合、金はただ觀念上の金として仕へねばならぬからである。孤立した取引モノにおいての等價物としての金は、その活動的存在から直ちに休止的存在に戻る。だが鑄貨としては、彼の自然的實體が彼の機能と不斷の衝突を惹き起す。金ソヴァレインが假想の金

に轉化するのを、全然避けるといふことは出来ないのだが、しかし立法は、金ソヴァレーンの金屬内容の減少が、一定の程度に達する時は引き上げることが規定して、假想金の無制限的流通を避けようと試みる。たとへばイギリスの法律によれば、〇・七四七グレイン以上の重量を失つたソヴァレーンとはもはや法貨ではない。一八四四年から一八四八年にいたる短期間に、四千八百萬金ソヴァレーンといふものを秤にかけたイングランド銀行は、カットン氏の金秤量器を備へつけてをるが、この器械は單に、二箇の金貨における百分の一グレインの差を見つけ出すといふだけでなく、いかにも心あるもののやうに、定量以下の金貨は忽ちこれを盤の上に跳ね飛ばし、飛ばされた奴はそこでもう一つの器械に落ちこんで、東洋式の暴虐さで寸断される。

かうした事情では、金鑄貨は、その通用が特定の流通圏——その限界内では金鑄貨がそれほど迅速に磨滅しないところ——のうちに局限されるのでなければ、一般的に流通することは出来ないはずである。五分の一オンスの目方しかない金鑄貨でありながら、流通において四分の一オンスとして通用するかぎり、それは事實においては、二十分の一オンス金にとつての單なる表章ないしは象徴になつてゐる。かやうにしてすべての金鑄貨は、流通過程そのものによつて、多かれ少かれその實體の單なる表章または象徴に轉化される。が、いかなる物でも、それが自分自身の象徴であることは出来ぬ。繪にかいた葡萄は、本物の葡萄の象徴ではなく、假想の葡萄である。が、軽いソヴァレーンは、痔せ

馬が肥えた馬の象徴たりえないのと同様、目方充分のソヴァレーンの象徴たることはなほさら出来ないので、金はかくして自分自身の象徴となり、しかもさうしたものとして役立つことは出来ないところから、彼が最も速かに磨滅する流通圏、すなはち賣買が常にごく小規模にくりかへされる圏内においては、金は金存在から切り離された象徴的の銀存在を享得する。この圏内でも、全金貨の一定割合が——同一金貨片でないにしても——常に鑄貨として轉々するわけである。ちやうどその割合においては、金は銀表章や銅表章にとつて代られる。で、一國においてはただ特殊の一商品のみが價值尺度として、従つてまた貨幣として作用しうるのであるが、他の商品もこの貨幣と並んで鑄貨として役立つことになる。これらの補助的流通要具、たとへば銀表章や銅表章は、流通内で金鑄貨の一定部分を代表する。それら自身の銀實質や銅實質は、従つて銀や銅の金に對する價值比率によつては決定されず、法律によつて任意に設定される。銀表章銅表章は、彼らの代表する金鑄貨の小分割分が、よいか高位の金鑄貨と取り換へられるためになり、または比較的少額の商品價格を實現するためになり、常に流通したであらうところのその分量において發行されうるにすぎない。商品の小賣流通の内部において銀表章と銅表章とは、更に特種の圏に屬することにならう。事の性質上それらの流通速度は、彼らが各個の賣買において實現する價格、ないしは彼らが代表する金鑄貨分割分の大きさと反比例する。たとへば、英國のごとき一國內における日々の小取引の範圍の廣大なることを想へば、流通する補助

貨の總量の割合の比較的に小なることは、その流通の迅速さと常住さを明らかにする。たとへばついでこの頃出た議會の報告によつても、英國造幣局は一八五七年に、四百八十五萬九千ポンドの金を鑄造し、三十六萬三千ポンドの金屬價值ある七十三萬三千ポンドの名目價值の銀を鑄造してゐることが知れる。一八五七年十二月三十一日に終る過去十年間に鑄造された金の總額は五千五百二十三萬九千ポンドで、銀は二百四十三萬四千ポンドにすぎなかつた。銅貨の方は、一八五七年に、すべて三千四百九十二ポンドの金屬價值ある六千七百二十ポンドの名目價值のものであり、うち三千百三十六ポンドはペンス、二千四百六十四ポンドは半ペンス、三千百二十ポンドはファージングであつた。そして最近十年間に鑄造された銅の總價值は、十四萬四千四百七十七ポンドの名目價值、七萬三千五百ポンドの金屬價值であつた。あたかも金鑄貨が、それを貨幣でなくするところの、重量喪失の法律規定によつて、永久に鑄貨として機能をつづけることを妨げられてゐると同じやうに、銀表章や銅表章の方は、彼らが法律に従つて實現する價格の程度が規定されてゐることによつて、彼らの流通圏から金鑄貨の流通圏に移つて、そして貨幣としての地位を確立することを妨げられてゐる。で、たとへば英國では、銅なら六ペンスまで、銀なら四十シリングまで、支拂に際して受け取る義務があるとされてゐる。もし銀表章、銅表章が、彼らの流通圏の需要が要求するより以上に發行されるやうなことがあつても、それがために商品價格が上騰するやうなことはなく、それらの表章の方が、却つて小賣商人の手に集

積し、結局は、それを金屬として賣らなくてはならぬやうなことになる。で、一七九八年には、個人によつて發行されたイギリスの銅貨の、二萬三百五十ポンドに達する額が小商人の手に集積し、彼らはそれを再び流通させようと試みたが成功せず、結局、商品として銅市場に投げ出さねばならなかつた。

(四) デザイッド・ブカナン「ドクトル・スミスの研究の諸國民の富に扱はれた諸問題についての考察」(エディンバラ、一八一四年、三頁)。

内國的流通の特定圏内において、金鑄貨を代表するところの銀表章と銅表章とは、法律に規定された銀内容、および銅内容をもつのであるが、流通にはいつた以上は金鑄貨同様に磨滅し、觀念化され、その流通の迅速さと常住さのおかげで、金貨にもまして速かに假現體に化する。そこで更に銀表章、銅表章をしてその鑄貨資格を失はしめるところの、重量喪失の限界線が引かれねばならぬとなつたら、彼らそれ自身がさらに、自己の流通領域の一定圏内で他の象徴的貨幣、たとへば鐵や鉛によつてつて代られなくてはならず、そしてこの、一象徴的貨幣の他象徴的貨幣によつての表章なるものは、實にはしてしのない過程であるであらう。だから、すべて發達した流通をもつ國においては、貨幣流通の必要自體に強ひられて、銀表章、銅表章の鑄貨たる性質が、その重量喪失の度合とかかはりなきものにされてゐる。これによつて明らかなのは、事の性質に存することであるが、彼らが金貨のシンボル

であるのは、彼らが銀や銅でつくられたシンボルであるがため、すなはち彼らが價值をもつがためではなくて、却つて彼らが何らの價值ももたないかぎりにおいてである、といふことである。

そこで、ほとんど無價值な、紙のごときものでもが、金貨の象徴として機能を営むことが出来る。補助貨幣が、銀、銅等の金屬表章からなりたつてゐるのは、主としてかういふことから来る。すなはち大概の國では價值の少い金屬、たとへば英國の銀、古代ローマ共和國やスウェーデンやスコットランドの銅などは、流通過程がそれらをお小錢の地位に落して、より貴重な金屬がそれに代るまでは、みな貨幣として流通してゐたのであつた。それにまた、直接に金屬流通から發生した貨幣象徴が、まづそれ自身一つの金屬であるといふのも自然である。常に小錢として流通すべきはずの部分の金が、金屬表章によつてとつて代られるのと同じやうに、常に內國的流通圏のうちへ鑄貨として吸收される部分、すなはち絶えず流通してをらねばならぬ部分の金は、無價值の表章によつてとつて代られることが出来る。流通用鑄貨の量は決してこれ以下に降らぬといふ水準點は、各國において經驗的に與へられてゐる。そこで、金屬鑄貨の名目内容と金屬内容とにおける、初めはほとんど解らないほどの差異が、絶對的な差異にまで進むことが出来る。貨幣の鑄貨名稱はその實體からはなれ、實體のそとに、無價值な紙切れのうちに存在する。商品の交換價值が、その交換過程によつて金貨幣に結晶するやうに、金貨幣はその流通においてそれ自身の象徴に昇華する——初めは磨滅した金貨の形態において、

次には金屬補助貨幣の形態において、そして最後には無價值の表章の形態、紙片の形態、單なる價值表章の形態において。

それにしても金貨は、その重量喪失にもかかわらず鑄貨として機能しつづけたが故にのみ、その代位者を、初めは金屬で、次には紙で、つくり出してゐるものである。彼は、磨滅してから流通したのではなく、流通しつづけたから象徴などにまで磨滅した。流通過程にあつて、金それ自體が自己の價値の單なる表章と化するかぎりにおいてのみ、單なる價值表章が金貨にとつて代りうるのである。

運動 $W-G-W$ が、一方が他方へと互ひに直接に轉化するところの二要因、 $W-G$ と $G-W$ の過程的統一であるかぎり、ないしは商品がその全轉形の過程を通過するかぎりにおいて、商品はその交換價值を、價格に、貨幣に發展させて、そして直ちにまたこの形態を廢棄して、さらに商品に、いならむしろ使用價值になるのである。だから商品は、その交換價值のただ外觀上の獨立化へと進む。他方では、金は、それが鑄貨として機能するかぎり、ないしは絶えず流通にあるかぎり、事實においてただ商品轉形の連鎖と、商品の單に瞬時的なる貨幣存在とを表はし、一商品の價值をばただ他商品の價格を實現するためのみ實現し、いかなる場合にも交換價值の休止的存在、ないしはそれ自身休止的商品としては現はれないことを、吾々は見た。商品の交換價值がこの過程において享け、金がその流通において代表するところの現實性は、電氣閃光の現實性である。この金は現實の金ではあるが、假

想の金としてのみ機能し、従つてこの機能においてはかれ自身の表章によつてとつて代られる。

鑄貨として機能するところの價值表章、たとへば紙幣は、その鑄貨名でいひ表はされた金量の表章である。すなはち金表章である。一定量の金がそれ自身價值比率を表現しないのと同様、金にとつて代る表章もまたしない。一定量の金が對象化された労働時間として、一定の價值量をもつかぎりにおいて、金表章は價值を代表する。しかし金表章によつて代表される價值の大きさは、いかなる場合でも、金表章によつて代表される金量の價值に依存する。諸商品に對しては、價值表章は、それらの價格の實現性を表現する。それは「價值のしるし」であり、そして價值が價格に表現されてゐるが故にのみ價值の表章である。M—D—Mの過程においては、この過程が二つの轉形の過程的統一、ないしは直接的相互轉化として表はれるかぎり——そして價值表章が機能する流通圏内においては、さうしたものと表はれるのだが、諸商品の交換價值は、價格において單に觀念的な存在を、貨幣において單に想像的、象徴的な存在を享ける。交換價值は左様に、思考されたるないしは物的に表象されたるものとしてのみ現はれるが、彼は彼の現實性を、一定量労働時間が對象化されてゐるかぎりでの商品自體にのみ有し、その他には有しない。そこで價值表章は、金の表章としてでなく、價格にのみ表現されたる、しかし商品にのみ存在する交換價值の表章として表はれることによつて、直接に商品の價值を代表してゐるかやうに見える。だがこの外觀はうそである。價值表章は、直接には、ただ價格

表章であり、すなはち金表章であり、ただ間接にのみ商品價值の表章である。金は、ピーター・シュレミールのやうに自分の影を賣つたのではなく、その影をもつて買ふのである。だから價值表章は、流通過程にあつて一商品の價格を他商品のそれに對して代表し、ないしは、各商品所有者に對して金を代表するかぎりにおいてのみ働かせる。一定の比較上無價值な物、一片の革、紙切れ等は、まづ慣習によつて貨幣實質の表章となるが、しかし、かかるものとして自己を主張しうるのは、象徴としてのその存在が、商品所有者らの一般的意志によつて保證される時に限られる。すなはち、法律的に因襲的な存在を、従つて強制通用力を得る時に限られる。強制通用力を有する國家紙幣は、價值表章の完成形態であり、金屬流通ないしは單純商品流通そのものから直接に生長し出づるところの、紙幣の唯一形態である。信用貨幣は、社會的生產過程のより高度なる部面に屬し、全然違つた法則に支配される。象徴的紙幣は、ただ一そう廣き流通範囲において作用するといふだけで、事實上、金屬補助貨幣と全く異なるところがない。價格標準ないしは鑄貨價格の標準の單なる技術上の發達と、それから金地金の金鑄貨への外的變形とが既に國家の干渉を喚起し、それとともに内國的流通が一般的商品流通から目に見えて分離したのだとすると、この分離は、鑄貨の價值表章への發展によつて完成される。單なる流通要具としては、貨幣は一般にただ内國的流通の圏内においてのみ獨立化することが出来る。以上述べたことによつて吾々は、金實體そのものから切り離された價值表章としての、金の鑄貨存

在が流通過程それ自體から發生し、合意や、國家の干渉からではないことを明らかにした。ロシアは、價值表章の自然發生的起原の顯著な例證を供する。ロシアで獸皮類が貨幣として用立つてゐた頃、この消耗しやすく扱ひにくい物質と、その流通要具としての機能との間の矛盾は、極印のある小革片をそれに代らせる慣習を生み、そこでそれが、獸皮や毛皮拂ひの指圖證券になつた。その後、その小革片はコペックといふ名の下に、銀ルーブルの端數に對するただの表章となり、所によつては一七〇〇年まで使用された。その年にペーテル大帝は、それを國家の發行した小銅貨と引き換へて、撤回すべきことを命じた。^(五) 金流通の現象をのみ觀察することの出來た古代の著者たちは、つとに金鑄貨を象徴ないしは價值表章として解してゐた。プラト^(六)もアリストテレス^(七)もさうである。たとへば支那のやうな、少しも信用の發達してゐない國では、古くから既に強制通用の紙幣があつた。^(八) 初期の紙幣辯護者は、流通過程それ自體に發生する金屬鑄貨の價值表章への轉化を、明瞭に指摘してゐる。ベンジヤミン・フランクリン^(九)がさうであり、ビショップ・パークレイ^(一〇)がさうである。

(五) アンリ・ストルビ「經濟學教程」(ジャン・バティスト・セイ註釋版、パリ、一八二三年、第四卷、一七九頁)。ストルビはその著をベテルスブルグにおいてフランス語で公けにした。セイは直ちにそのパリ版を出版し、それには「註釋」が附してあるが、それがまた常套事以外の何ものも含まない。ストルビは(彼の「國民的収入の性質についての考察」パリ、一八二四年、を見よ)、この「科學のプリンシプル」によつてつくられた彼の著作のつけたりを有難がつてゐるところではな。

(六) プラト「共和國」第二卷、「交換の貨幣彙編」全集、ストールブミアス編、ロンドン、一八五〇年、三〇四頁。プラト^(一)は、貨幣を價值尺度および價值表章としての兩規定においてのみ展開したが、しかし内國的流通に役立つ價值表章のほか

に、なほギリシアと外國との交易のため役立つ、いま一つのもの求めた(彼の「法律論」第五部をも比較せよ)。

(七) アリストテレス「ニコマコス倫理學」第一卷、第五篇第八章。「欲望を充足することにおいて、貨幣は、合意によつて交換の媒介となつた。そしてその理由からそれは「法貨」の名を有する。貨幣は、その存在を自然に負はずして法律に負ふからであり、そしてそれを變ずること、空ならしめることは、吾々の力にあるからである。」アリストテレスは、プラト^(一)とは比較にならぬほど多面的にかつ深く貨幣を理解してゐた。次に示す一節において彼は、種々なる共同體の間の交易から、いかにして特殊の商品、すなはち、それ自身價值に充ちた實體に貨幣の性質を與へることの必要が生ずるかをみごとく論述してゐる。「一國の住民が一そう他國の住民に依存するやうになり、彼らの必要とするものを輸入し、剩餘を輸出した時、貨幣は必然的に使用されるに至つた。従つて人々は、相互の取引において何ものか本質的に有用でたやすく生活の目的に充用しうるもの、たとへば鐵や銀などのごときを使用することに同意した。」(アリストテレス「政治學」第一卷、第一篇第一章)。ミシェル・シェヴァリエはこの一節を引用して、アリストテレスの見解によれば、流通要具は、それ自身價值をもつ實體から發生せねばならぬといつてゐるが、彼はアリストテレスを讀まなかつたのか、讀んでも理解しなかつたのか、アリストテレスは却つてかうはつきりといつてゐる。いはく、單なる流通要具としての貨幣は、單に因襲的存在、ないしは法律上の存在をもつものやうである。その「法貨」といふ名稱がすでにそれを示すやうに、また事實においてその鑄貨としての使用價值はこれを單にその機能そのものからのみ享得し、それ自身に屬する使用價值からは得てをらぬことが示すやうに、と。「他の論者は、鑄貨は單なる假物であり、自然的ならずしてたゞ因襲的なるものであつて、使用者らも他の一商品をそれに代へてしまへば、もはや何の價值もなく、日々の生活のいかなる目的にとつても用なきものである、と主張するものである。」(上掲書、第二節)

(八) サイモン・マンデヴィル「航海と旅行」ロンドン、一七〇五年版、一〇五頁。「この皇帝(カッター或ひは支那の)は、見積りといふことをしないで自分の思ふまま幾らでも發行する。何故かといふに、彼は革や紙以外の貨幣は發行も、つくりもしないのである。そしてその貨幣があまりに長く流通して消耗しはじめると、人々は國庫に行つて古いの代りに新しい貨幣を買ふ。そしてその貨幣は國の隅々まで、その縣といふ縣すべてに行き渡る。……彼らは金や銀の貨幣は一つもつくらな

ら。」そこでマンデヴィルが思ふには、「だから皇帝はいつでも新しいのを無茶苦茶に發行できるのだ」と。

(九) ベンジヤミン・フランクリン「アメリカの紙幣に關する事實ならびに考察」一七六四年、三四八頁。「丁度いま、英國の銀貨さへが、その價值の一部分を、法貨たることに負うてゐる。すなはち、その名目と實際の目方との差に當る部分を、である。

現に流通するシリリング貨と六ペンス貨との大なる部分は磨損によつて、五%、一〇%、二〇%ほど目方が缺けてをり、六ペンス貨のあるものごときは五〇%にも及ぶ。この、實質と名目の差に當る分には、何ら固有の價值がないのである。紙ほどの價值だつてなく、全くのゼロである。それが法貨であること、同じ價值でそれをたやすくまた他へ渡すことが出来るといふ知識、それが三ペンスの値打ちしかないものを六ペンスとして通用させるのである。」

(一〇) パークレイ、前掲書。「その金屬が全くなくなつた後に、鑄貨の名義が維持されるなら、商業の流通が存続しないであらうか。」

幾束の紙が、紙片にされて貨幣として流通しうるものであるか？ かう提起したのでは、問題は無意味なものにならう。價值をもたない表章は、それがたゞ流通過程にあつて金を代表するかぎりにおいてのみ、價值表章であり、そして金それ自身が鑄貨として流通過程に入りこむであらう程度においてのみ、金を代表する。で、商品の交換價值と商品轉形との速度とが與へられてゐれば、流通過程に入りこむ金の量は金それ自身の價值で定まる。五ポンド名義の紙券は、一ポンド名義の紙券の数の五分の一だけしか流通しえないだらうし、また、すべての支拂がシリリング紙券でなされるなら、シリリング紙券はポンド紙券の数の二十倍だけ流通しなければなるまい。金鑄貨がもし、たとへば五ポンド券、一ポンド券、十シリリング券、等、種々なる名義の紙券によつて代表されるならば、これら各種の價值表章の數量は、金流通に要する金の量のみならず、またそれぞれの紙券の各流通範圍に要する金の量によつて定まる。かりに英金貨千四百萬ポンド（これは英國銀行條令の規定で、鑄貨に對するもので

はなく信用貨幣に對するもの）が、一國の流通がこれ以下には決して降らぬといふ水準であるとするなら、おのちの一ポンドに對する價值表章たる紙券が千四百萬枚流通しうるわけである。金の生産に要する勞働時間が減るなり増すなりしたために、金の價值が上るなり下るなりしたとすれば、商品の總額およびその交換價值に變化がないかぎり、流通するポンド紙券の數は、金の價值變動に逆比例して増減するであらう。價值尺度としての金が銀に代へられ、金に對する銀の價值比率が一と十五で、各個の紙券はそれまで代表した金の量と同一量の銀を今後は代表するものとすれば、今後は一千四百萬枚ではなくて二億一千萬枚のポンド紙券が流通しなくてはなるまい。で、要するに紙券の數量は、それが流通において代表するところの金貨の量によつて決定され、そして紙券は、それを代表するかぎりにおいてのみ價值表章であるのだから、紙券の價值はひとへに紙券の數量によつて決定される。すなはち、流通する金の數量は諸商品の價格に依存するのだが、流通する紙券の價值はあべこべに、ひとへにそれ自身の數量によつて定まるのである。

強制通用力ある紙幣を發行する國家の干渉は——そしてここではただこの種の紙幣のみを論ずるのだが——經濟法則を廢止するかに思はれる。鑄貨價格の場合には、ただ一定重量の金に洗禮名を與へ、また鑄造の場合にはただ金に自己の極印を捺したにすぎなかつた國家が、いまや、その極印の魔術で紙を金に變ずるかに思はれる。紙券が強制通用力を有する以上、國家が勝手な數量の紙券を流通に強

制し、またそれに「ポンド、五ポンド、二十ポンド等、勝手な鑄貨名を刷りこむのを、何人もあへて妨げることは出来ない。一度流通にはいつてしまつた紙券は、これを動かすことが出来ない。なぜといつて、國の境界標がその行方を遮るとともにまた流通の外へ出たが最後、紙券はすべての價值を、使用價值をも交換價值をも、喪失するからである。その機能上の存在を離れる時、紙券は一文の價值もない紙屑に變ずる。だが、この國家の權力はただの影である。國家は、紙券の任意の量に任意の鑄貨名を附して流通に投ずることは出来る。が、この機械的の行爲とともに、彼の支配も終る。流通に捉へられた時、價值表章なり紙幣なりは、自己の内具の法則に一身をまかせる。

英貨千四百萬ポンドが商品流通に要する金の總額であつて、そして國家が、一枚一ポンドの名目の紙券二億一千万枚を流通に投じたとするなら、この二億一千万は總額千四百萬ポンド英貨の金の代表物に轉化するであらう。それはあたかも國家が、ポンド紙券を、以前の十五分の一の價值の金屬の代表物に、ないしは以前の十五分の一の量目の金の代表物にしてしまつたやうなものである。自然に因襲的であるところの價格の標準の命名、それが變つた以外にはすべてがもとどほりであらう。その變化は、この場合、直接に鑄貨率の變更によると見てもよく、また低い新標準のために必要となつた程度まで紙券が増加することによつて間接に生じたと見てもよい。ポンドなる名稱は、いまや、十五分の一の金量を示すことにならうから、一切の商品價格は十五倍に騰貴し、そして二億一千万枚のポンド

券は事實上以前の千四百萬と全然同程度に必要な不可缺であらう。價值表章の總量が増大すると同じ割合において、各個の價值表章の代表する金の量は減少するであらう。諸價格の騰貴は、金に代つて流通せんとする價值表章をば、強制的に金量と同等化するところの、その流通過程の反動に外ならないであらう。

イギリスおよびフランス政府の貨幣惡鑄史を繙くと、價格は、銀貨が劣惡化された程度に比例しては騰貴しなかつたことを、しばしば發見する。それは單に、鑄貨の増加された割合が、鑄貨劣惡化の割合に適當しなかつたことによるのである。これをいひ換へれば、商品の交換價值が、爾今、價值尺度として新鑄貨で秤量され、このより小なる尺度單位に相當する鑄貨で實現されるものとする、その低劣な金屬組成に相當すべき數量では鑄貨が發行されてゐなかつたことによるのである。このことは、ロックとローンデスとの間の争ひにおいて未解決に残された困難を解決する。それが紙であれ、惡鑄された金銀であれ、價值表章が、鑄貨價格に従つて計算された金量や銀量を代表する比率は、それ自身の質料にはかかはりなく、流通界に存するその數量に依存する。従つて、この比率を識ることの困難は、價值尺度および流通要具としての兩機能における貨幣が、單に反對であるといふだけでなく、また一見兩機能の對立に矛盾するやうな諸法則に支配されることから生ずるのである。金が單に計算貨幣として、また單に觀念上の金として用立つにすぎないところの、價值尺度としてのその機能にあ

つては、すべてが貨幣の自然的質料にかかつて来る。銀で量られた交換価値ないしは銀價格としてのそれは、いふまでもなく、金で量られた交換価値ないしは金價格としてのそれは全く違ふ。が、反對に、金がただ觀念されてゐるだけではなくて、現實の物として他商品に並び存しなくてはならないところの、流通要具としての機能においては、貨幣の質料はどうでもよくなると同時に、すべてがその數量に依存してゐる。尺度單位としては、それが一ポンドの金か、一ポンドの銀か、それとも銅かが、決定的である。しかるに鑄貨をば、これらの尺度單位のおのこの、それぞれの事實化たらしめるものは、各鑄貨の數量であり、それらがいかなる質料のものかは更に問はない。が、觀念されただけの貨幣にあつてはすべてがその素材的實體に依存し、感覺的に存在する鑄貨にあつてはすべてがある觀念的な比例に依存するといふのでは、常識に矛盾する。

で、紙幣の數量の増減——但し紙幣が唯一の流通要具を形づくる場合のそれ——に伴つての諸商品價格の騰落は、外部から機械的に傷害された法則が流通過程を通して兇暴になし遂げる效力發揮に外ならない。法則とはすなはち、流通する金の量は諸商品の價格によつて規定され、流通する價值表章の數量は、それが流通において代表する金鑄貨の量によつて規定されることである。他方では、だから、いかなる數量の紙幣でもが、流通過程に吸収され、またある意味では消化される。なぜといふに、價值の表章は、それがいかなる金稱號を帯びて流通に入らうとも、流通内においてそれは自己

に代つてそこに流通しえたはずの金量の表章にまで壓搾せられるからである。

價值表章の流通の場合にあつては、現實の貨幣流通に關する一切の法則が逆になり、頭を地にして立つかに見える。金は、それが價值をもつから流通するといふのに、紙片は流通するが故に價值をもつ。諸商品の交換價值が與へられてゐる時、流通する金の量は、金そのものの價值に依存するといふのに、紙片の價值は、紙片自身が流通しつつあるその數量に依存する。流通する金の量は諸商品の價格の騰落に伴つて増減するといふのに、諸商品の價格は、流通する紙片の數量の變化につれて騰落するやうに見える。諸商品の流通は、ただ特定量の金鑄貨を吸収しうるにすぎず、従つて貨幣の交替的收縮膨脹は必然の法則として表はれるのに、紙幣に至つてはどれだけ膨脹してでも流通に入りこむやうに見える。規定の純分よりも僅か百分の一グレイン缺けた鑄貨を發行してさへも、國家は金銀貨を惡含まないところの、絶對的に價值のない紙幣を發行することによつて、國家は極めて正當な職務を遂行する。金貨の方は、明らかに商品の價值そのものが金で評價されるかぎり、すなはち價格で表はされるかぎりにおいてのみ商品の價值を代表するのだが、價值表章の方は直接的に商品の價值を代表するやうに見えるのである。してみれば、貨幣流通の諸現象をば一面的にただ強制通用力ある紙幣に即してのみ研究したところの觀察者たちが、何故に貨幣流通の内在的諸法則のすべてを誤認せねばなら

なかつたかは明瞭である。事實においてこれらの法則は、價值表章の流通においては、單にさかさまにといふだけでなく、また實に抹殺されて現はれる。蓋し紙貨幣は、もし正しき割合において發行され、ばある種の諸運動を營み、しかもそれが價值表章としての彼らに固有な運動ではないのであるし、同時に一方、紙幣固有の運動に至つては諸商品の轉形から直接に發生するものではなくて、却つて金に對する紙幣の適當比率の破壊からこそ發生するのだから。

第三節 貨幣

鑄貨と區別しての貨幣、すなはち $W-G-W$ なる形態の流通過程の結果は、 $G-W-G$ すなはち、商品を貨幣に引き換へんがために貨幣を商品に引き換へる形態の流通過程の出發點を形づくる。 $W-G-W$ の形態では商品が、 $G-W-G$ の形態では貨幣が、それぞれ、運動の出發點と終結點とを形づくる。第一の形態では貨幣が商品交換を媒介し、第二の形態では商品が貨幣の貨幣生成を媒介する。第一形態において單なる手段たる貨幣は、第二形態では流通の終極目的として現はれるのに、第一形態において終極目的たる商品は、第二形態では單なる手段として現はれる。貨幣それ自身がすでに流通 $W-G-W$ の結果であるから、 $G-W-G$ の形態にあつては、流通の結果が同時にその出發點として現はれる。 $W-G-W$ においては代謝機能がその現實の内容を形成するが、この第一過程から生

じ來たれる形態存在そのものが、第二過程 $G-W-G$ の現實の内容を形成する。

$W-G-W$ 形態においては、兩極は同一價值量の商品であるが、同時に質的に異なる使用價值である。その交換 $W-W$ は、現實の代謝機能である。これに反して、 $G-W-G$ 形態においては、兩極は金であつてそして同時に同一價值量の金である。商品を金と交換せんがために金を商品と交換すること、もしくはその結果なる $G-G$ について見れば、すなはち金を金と交換すること、これは無意味に思へる。だが、もし $G-W-G$ を、賣るために買ふといふ形式、すなはちある仲介運動を通して金を金と交換するに外ならないものに翻譯するならば、人は忽ちブルジョアの生産の支配的形態を認識する。實際においてはしかし、賣るために買はれないで、高く賣るために安く買はれる。貨幣が商品に引き換へられるのは、同じ商品をば更に、多額の貨幣に引き換へんがためであり、従つて兩極の G 、 G は、質的には異ならずとも、量的には異なつてゐる。かかる量的差異は、不等價物の交換を豫想するが、しかし商品および貨幣としての商品および貨幣は、單に商品自體の對立的二形態、すなはち同一價值量の異なるあり方にすぎない。循環 $G-W-G$ は、だから、貨幣および商品の形態の下に、一段と發展した生産諸關係を藏するもので、そして一そう高度なる運動の、單純流通内での反映であるにすぎない。それだから吾々は、流通要具と區別しての貨幣をば、商品流通の直接形態 $W-G-W$ から展開しなくてはならぬ。

金は、すなはち價值尺度としてまた流通要具として役立つる特殊の商品は、それ以上社會の助けを借らずして貨幣となる。銀が、價值尺度でも、支配的流通要具でもない英國では、銀は貨幣とならない。と全く同じやうにオランダにおける金は、それが價值尺度たる地位を奪はれるやいなや、貨幣ではなくなつた。で、一商品はまづ、價值尺度と流通要具との統一として貨幣となる。ないしは價值尺度と流通要具との統一が貨幣である。が、かかる統一として、金はさらに、獨立の、この兩様の機能におけるその存在とは別個の存在を有する。價值尺度としては金は、ただ觀念上の貨幣であり觀念上の金である。單なる流通要具としては、金は象徴的な貨幣であり象徴的な金である。が、その素朴な金屬肉體において、金は貨幣である。すなはち貨幣は、現實の金である。

で、吾々はしばし、休止態にある商品金——それは他の諸商品との關係において貨幣である——を考察しよう。あらゆる商品は、その價格において、一定量の金を表はし、その點ではいづれもただ觀念された金、ないしは觀念された貨幣であり、金の代表物である——あべこべに價值表章においては貨幣が、商品價格の單なる代表物として現はれると同じやうに。あらゆる商品が、かく、觀念された貨幣にすぎない場合に、貨幣は唯一の現實なる商品である。交換價值の、一般的社會的勞働の、抽象的富の、獨立なる存在を、單に表象するだけの諸商品に對して、金は抽象的富の實體的存在である。使用價值の方面では各商品は、自己と特種の欲望との關聯によつて、質料的富の一要因をのみ、富の

ただ一面をのみ表現する。しかるに貨幣は、それがどの欲望でもの對象に直接に換へえられるかぎりでは、どの欲望でもを充足する。貨幣自身の使用價值は、貨幣の等價物を形づくる使用價值の無限の連續において實現される。金は、その純真なる金屬態において、商品の世界に展開されある一切の質料的富を、表てに現はさずを含む。で、諸商品が、その價格において一般的等價物、ないしは抽象的富、金を代表するなら、金は、その使用價值において、すべての商品の使用價值を代表する。金は、それだから質料的富の實體的代表物である。それは「一切物の要約」(ポアギューベル)であり、社會的富の摘要である。同時にそれは、形式上では一般的勞働の直接體現であり、内容上では一切の現實的勞働の總和である。それは個體としての一般的富である。流通の媒介者としてのその身柄においては、金はあらゆる侮辱をうけ、剪み切られたりしたその上で、たゞのシンボルである紙きれにまでおとされた。だが、貨幣たる時、彼にその黄金の榮光が返される。奴僕から彼は君主となる。ただの人間人足から、諸々の商品の神になる。

(一)「貴金屬は諸物の表章であるだけでなく、反對にまた、諸物が金銀の表章でもある。」アントニオ・ジエノヴェジ「市民經濟教課」(一七六五年)クストデイ編、近世の部、第八卷、二八二頁。

(二)「金銀は『普遍的富』である。」「政治算術」前掲書、二四二頁。

(三)ミッセルデン「自由貿易、即貿易振興策」ロンドン、一六六二年。「商業の自然的材料は商貨であり、それを商人たちは貿易の目的から商品と呼んでゐる。商業の人爲的材料は貨幣であり、これは戦争と國家の力といふ稱號をえた。貨幣は、性質上および時代上では商貨の後に來るが、しかも現に用ひられてゐるところでは首領となつてゐる。」(七頁)。彼は商

品と貨幣とを「老ヤコブがその右手を年下の方に、左手を年上の方に載せてゐる、あの二人の孫」に比較してゐる(同上)。
 ボアギューベル「富の性質……」。ここに、商業の奴隷はその主人となる。……そこで、人々の窮乏は、奴隷であつたものを主人となし、すくなくとも暴君となすことから、生じてきた。(三九五、三九九頁)
 (四) ボアギューベル、上掲書。「人はこれらの金屬すなはち金と銀とを、一の偶像にした。そして商業に金銀を用ひることの目的や趣意を、すなはちその本来の目的たる、相互間の交換と譲渡との保障として役立たせるといふ目的を放棄して、それを一種の偶像と化した。しかも人々はこの偶像に對して、多額の財物や貴重な必需品を犠牲にし、また常に犠牲にしつつある。時には、人間をさへ犠牲に供する。古への蒙昧人でも、かかる虚偽の偶像に對してこれほどの犠牲を供したことは決してなかつた。」(同上、三九五頁)

a 貨幣の退藏

商品がその轉形の過程を中斷し、金に蝕化した商品たるままで停頓することによつて、金はまづ貨幣として流通要具から分離する。これは、賣却が購買に轉じないとすぐにいつでも起る。貨幣としての金の獨立化は、従つて、何よりもまづ、流通の過程ないし商品の轉形が、別々の、互ひに無關係に相並んで成立する二つの行爲に分解することの、分明なる表現である。鑄貨そのものは、自己の運行が中斷されるやいなや貨幣となる。自己の商品に代へて鑄貨を取り戻す賣手の手においては、鑄貨は貨幣であつて鑄貨ではない。が、彼の手を離れるやいなや再び鑄貨となる。各人は、彼が生産する一面的な商品の賣手であるが、彼が社會的生存に要する一切の他の商品の買手である。賣手としての彼

の登場は、彼の商品がその生産に要する労働時間に依存するが、買手としての彼の登場は、生活資料の不斷の更新に制約される。賣ることなくして買ひえんがためには、彼は、買ふことなくして賣つたのでなくてはならない。事實において、流通 $M \rightarrow G \rightarrow M$ は、それが同時に自身の分解の不斷の過程であるかぎり、賣却と購買との動的統一である。貨幣が鑄貨として絶えず流動するためには、鑄貨は絶えず貨幣に凝結せねばならない。鑄貨の絶えざる流通はそれが、大なり小なりの割合で、流通内の各方面で發生するとともに流通を制約するところの鑄貨の積立となつて絶えず停滯することを、條件とする。これらの積立の形成、分配、解體、および再形成は、絶えず變り、その存在が絶えず消滅し、その消滅が絶えず存在する。アダム・スミスは、この鑄貨が貨幣へ、貨幣が鑄貨への、熄むことなき轉化を、かういひ表はしてゐた。いはく、あらゆる商品所有者は、彼が賣る特種の商品のほかは、彼がそれをもつて買ふところの、普遍的商品の一定量を常に貯へてをらねばならぬ、と。吾々は、流通 $M \rightarrow G \rightarrow M$ にあつて、第二環 $G \rightarrow M$ が、一回きりではなく、時を逐うて順次に遂行される一聯の諸購買に分裂し、従つて G の一部分は鑄貨として流通し、他の部分は貨幣として休止することを見た。貨幣はその場合、事實において單に停職された鑄貨であつて、そして流通する鑄貨總量の個々の部分は、或ひは一の、或ひは他の形態で、不斷に變化して現はれる。流通要具の貨幣へのこの最初の轉化は、だから、貨幣流通それ自體の單に技術的なる一要因を表はすものである。

(一) ボアギューペールは「永久に流動するもの」の最初の不動化、すなはち流通要具としての貨幣の機能上の存在の否定をみて、忽ち商品に對する貨幣の獨立性を疑ひ出してゐる。彼はいふ、貨幣は「不斷の運動にあらねばならぬ。それは可動なることによつてのみ貨幣たることが出来る。が、それが不動となるやいなや、すべてが失はれる。」(フランス詳論二三頁)。彼が見落してゐるのは、この静止が、貨幣の運動の條件である、といふことである。彼が實際に欲したことは、商品の價值形態はその代謝機能の單に瞬時的なる形態としてこそ現はるべきであれ、決して自己目的となりきつてはならぬ、といふのである。

富の最初の自然生長的形態は、剰餘もしくは過剰の形態であり、使用價值として直接に要されざる生産物の部分、もしくは、その使用價值が單なる必需の範圍の外にあるところの、生産物の占有である。商品から貨幣への過渡を考察した際に吾々は、この生産物の過剰もしくは剰餘が、發達しない生産段階においては、商品交換固有の範圍を形成することを見た。過剰生産物は、交換されうる生産物ないしは商品となる。この過剰の適當なる存在形態は金銀であり、富が抽象的社會的富として確保されるその最初の形態である。ひとり商品が金銀の形態において、すなはち貨幣の質料において貯藏されうるばかりでなく、金銀はまた保藏形態の富でもある。使用價值としての使用價值は、いづれも消費されること、すなはちなくされることによつて、奉仕する。しかるに、貨幣としての金の使用價值は、交換價值の擔ひ手たることであり、無定形の原料として一般的勞働時間の體現たることである。交換價值は、無定形の金屬として不滅の一形態をもつ。かやうに貨幣として不動化された金なり銀なりは、退藏貨幣である。たとへば古代文明國のやうに純然たる金屬流通をもつ諸國民にあつては、貨

幣の退藏は、一個人から、國家退藏貨幣を守護する國家に至るまで、普く行ふ手續きである。更に上代のアジアおよびエジプトにおいては、この退藏貨幣は國王と僧侶との守護の下に、むしろ彼らの權力の徵證として見られる。ギリシアやローマでは、國家退藏貨幣をつくるのが、最も安全な、いつでも役にたつ過剰の形態として、その政策となる。退藏貨幣が征服者によつて急速に一國から他國に移送されることや、その一部分が突然に流通界へ流れ出すことは、古代經濟の一特質である。

對象化された勞働時間としては、金は、それ自身の價值量を保證し、そして金は、一般的勞働時間の體現であるから、流通過程は、金に、交換價值としてのその不斷の働きを保證する。商品所有者は、商品を交換價值としての姿において、ないしは交換價值自體を商品として確有する、といふ單純な事實によつて、商品をば金に轉化された姿において取り戻すための商品交換が、流通特有の動機となる。商品の轉形 $W \rightarrow D$ は、轉形そのものために起り、商品の特種の自然的富から一般的社會的富に轉化するため起る。質料轉換に代つて形態轉換が自己目的となる。交換價值は、運動の單なる形式から變じてその内容となる。商品が、富として商品として位置を保つのは、彼が流通の範圍内で位置を保つかぎりにおいてであり、そしてその流動状態に位置を保つのは、商品が銀や金に硬化するかぎりにおいてである。商品は流通過程の結晶としてその流れに留まる。が、それにしても金銀は、流通要具たらずるかぎりにおいてのみ、貨幣として定着させられる。非流通要具として金銀は、貨幣となる。だから、

商品を金の形態で流通から引き上げることが、商品を絶えず流通内にあらしめる唯一の手段である。商品所有者は、彼が商品として流通へ投ずるところのものを、ただ貨幣としてのみ流通から取り戻すことが出来る。従つて不斷の賣却、すなはち商品の、流通への継続的投入は、商品流通の見地からすれば、貨幣退藏の第一條件である。が、他方では、貨幣は流通要具として流通そのものうちにおいて、つねに使用價值に實現されて、そしてはかなき享樂のうちに融けてむことによつて、絶えず消滅する。で、貨幣は、この喰ひつくす流通の流れから救ひ出されねばならない。すなはち商品はその第一の變形のままに保持され、購買手段として貨幣の職能を行ふことを阻止されねばならない。かくして今や貨幣退藏者となつた商品所有者は、出来るだけ多く賣り、出来るだけ少く買はねばならぬ。夙に老カトーが教へた通り、「家長は賣るを好み、買ふを嫌ふ。」勤勉が貨幣退藏の積極的條件であるやうに、節儉はその消極的條件である。商品の等價物が、特種の諸商品ないしは使用價值として流通から引き上げられることが少ければ少いほど、それが貨幣ないしは交換價值の形態で引き上げられることは多くなる。で、一般的形態における富の我物化は、質料的現實性における富の斷念を條件とする。だから、貨幣退藏への激勵たる刺戟たるものは、貪慾であり、これの欲するところは、使用價值としての商品ではなく、商品としての交換價值である。過剰をこの一般的形態において占領するのには、特種の諸欲望は、贅澤や過分として扱はねばならない。で、スペインの議會は、一五九三年にフィリッ

プ二世に意見書を呈し、その一節でかういつてゐる。「一五八六年のパラドリドの議會は陛下に申請して、爾今、蠟燭、玻璃器、寶石、ナイフ、その他類似の物品の、王國への輸入を許可せられざらんことを乞うた。これらの物品たるや、あたかもスペイン人がインド人でもあるかのごとく、かかる人生に益なきものをば金と引き換へんがために外國から送られるものである。」で貨幣退藏者は、蠶魚にも鋪にも喰はれないまことに天國的で、またまことに地上的なる永遠の寶を追求せんとして、現世的、一時的、無常的なる享樂を蔑視する。前記の文書においてミッセルデンがいふには、「吾々にあつての金の缺乏の一般的根因は、王國が異國の商品を消費すること甚だ過多なるにある。それらのものは、本來かかるおもちやに代つて輸入さるべき寶を吾々から奪ふことによつて、商品たるより不商品たることを證據立てる。吾々は、スペインやフランスやライン地方やレヴァントの葡萄酒、スペインの乾葡萄、レヴァントのすくりの實、ハイナウルトの寒冷紗(リンネルの種類)とカムブレー麻布、イタリーの絹布、西インドの砂糖と煙草、東インドの香料、等を、夥だしく多量に消費してゐる。これらはみな一として吾々の絶對的必需品ではなくして、しかも正金をもつて購はれてゐる。」金銀として、富は不可滅である。それは、交換價值が不可壞な金屬に存するからでもあるが、わけても金銀は、それが流通要具として、商品の、消えて行く貨幣形態となることを妨げられるからである。かくて、可滅の内容が、不滅の形式の犠牲にされる。「もしも貨幣が、それを食ふために使ふものから租税と

してとり上げられ、租税によつてそれが土地の改良、漁業、鑛業、工業に費すものに與へられるならば、いな、着る物につひやす者に與へられるとしても、それによつてさへ社會は若干の利益をうる。何故といつて、着物にしてからが喰べ物や飲み物ほどには消えやすくない。もしまた家具に費されるなら、利益はそれだけ大きくなり、家屋の建築に費されれば更に大きい、等、等であつて、金銀が新たに國內にもちこまれた時にこそ、利益はまさに最大なのである。何故といふに、この物だけが減びず、しかもいついかなるところでも富として貴ばれるのであつて、他の一切のものはただ『その場かぎりの (Pro hic et nunc)』富にすぎないからである。』貨幣の、流通の流れからの救出、社會的質料轉換からの救済は、埋藏となつてもあらはれ、ここに社會的富は、地下の不滅の財寶として、全然秘密な、商品所有者との私的關係に立たされる。デリーのアウレンエップの宮廷にしばらく滞在してゐたベルニエ博士は、商人らがいかに彼らの貨幣を秘密に深く埋めておくかを語り、またなかでも、ほとんども全商業と全貨幣とをその手に握る非回教信者が、『いかにその生存中に埋藏する金銀が、死後のあの世で役立つであらうことの信仰に固まつてゐる』^(五)かを語つてゐる。だが貨幣退藏者は、その禁慾主義が實力的な勤勉と結びついてゐるかぎり、宗教上では主として新教徒であり、より以上に清教徒である。「賣買が一つの必要事であり、なさずにはゐられることではなく、またわけても、艱難と榮譽とに仕へる諸物をばクリスチャンらしく購ひうることは、否めない。何故かとなれば、すなはち長老たちも

また、家畜、羊毛、穀物、バター、牛乳その他の財物を賣られ、買はれたからである。これらのものは神の賜であり、神はそれを土よりとつて人に頒たれる。しかれども、カリカット、インドその他の地方より、價たかき絹、黄金の器、香料など、ただ榮華に仕へるほかに何の役立ちもなく、また徒らに國と民とより貨幣を奪ひ去るごとき商品をもたすところの、異國貿易は、われらにして諸侯の政府をもつかぎり、許されてはならない。とはいへ、予はいまそれをこれ以上書くまい。何となれば予は信ずる、われらにもはや貨幣がなくなる時、ひとりでにそれが止み、そして華美、飽食もまたおなじく止まねばなるまい』と。——「艱難と貧窮とがわれらを餘儀なくさせるまでは、筆も教へも甲斐ないであらう」と。^(六)

(一) 「商品の貯へが殖えるほど、退藏貨幣としての貯へは減る。」ミッセルデン、前掲書、七頁。

(二) 同上、一一一—一三頁、散見。

(三) ベタイ「政治算術」前掲書、一九六頁。

(四) フランソア・ベルニエ「旅行記——大蒙古事情記」パリ版、一八三〇年、第一卷、三二—三三四頁。

(五) マルティン・ルッター「商業と高利貸についての書」一五二四年。同じところでルッターはいつてゐる。「神は、われらドイツ人が、われらの金銀を外國へ押しやらねばならぬやう、全世界を富ませてわれらは乞食たらねばならぬやうに命じ給うた。もしドイツがイギリスに毛織物を送るなら、イギリスはより少量の金をしかもてないはずであり、もしまたわれらがポルトガルに香料を送るなら、ポルトガルもまたより少量の金をしかもてないはずである。數へても見よ、幾つのメッセがドイツ金土からフランクフルトに宛てて送られて行くか？——必要も理由もなしに。總錢一つでもがドイツにあることにこそ驚かねばなるまい。フランクフルトは、銀の穴、金の穴である。わが國で湧出し、増大し、鑄造され、刻印されたものが、その

穴を通つてドイツから外へ逃げ出して行く。この穴さへが塞がれば、われらはもはや、到るところ虚浮の負債があつて貨幣は更になく、あらゆる農村と都市とが高利を食られてゐるなどといふ嘆聲をも聞かなくならう。われらドイツ人はドイツ人たねばならぬ！ たらざればやまない。」

ミッセルデンは上掲の著書の中で、金銀はすくなくともキリスト教國の範圍に留まらしめたいと説く。「貨幣は、キリスト教國の彼方なるトルコ、ペルシア、東インドとの貿易によつて減少される。この商業部門は大部分現金で行はれ、しかもキリスト教國自體内での商業とは益々違ふ。何故といふに、キリスト教國内での取引は、現金をもつてしても、貨幣は依然としてその圍内に封じられてゐる。ここでも、貨幣の順流と逆流と干渉とがあることは事實である。その一國に貨幣が不足し、他國ではありあまることのある以上、該國内の一部分には貨幣が多く、他の部分には不足することはよくあるからである。貨幣は、或ひは來たり、或ひは去つて、キリスト教國の圍内に渦巻いてはゐるが、しかし常にその境界線に圍まれてゐる。しかるにキリスト教國外の上述の國々と取引する場合の貨幣は、絶えず流出して決して戻らない。」

社會的質料轉換の混亂の時期には、發達したブルジョアの社會においてさへも、退藏貨幣としての貨幣の埋藏が行はれる。緊密な形における社會的連結——商品所有者らにとつてはこの連結は商品に存し、そして商品の妥當形態は貨幣である——が、社會的運動を止めさせられる。社會的神経が、その肉體と並んで埋葬される。

退藏貨幣はいまや、もし彼が絶えず流通へ跳び戻らうと身構へてゐるのでなかつたら、まるで不用の金屬となり、彼の貨幣魂は彼から逃れ去つて、そして彼は流通の燃えつくした灰燼として、流通の蒸溜殘滓として残るであらう。貨幣ないしは獨立化した交換價值は、その質からすれば抽象的富の存在であるが、しかし他方では、與へられた貨幣量のどれでもは量的に限られた價值量である。交換價

値の量的限度はその質的一般性と矛盾し、貨幣退藏者はその限界を障壁として感ずる。この障壁は、事實において、同時に質的障壁と變じ、もしくは、退藏貨幣をば單に、質料的富の限られた代表物にする。一般的等價物として貨幣は、吾々が見たやうに、かれ自身がその一項を、商品の無限の系列がしかしその他項をなすところの、方程式のうち直接にあらはれる。貨幣が、ほぼどの程度までかかる無限の系列として實現されるか、すなはちどの程度まで交換價值としてのその概念に相應するかは、交換價值の大きさによつて定まる。交換價值の、交換價值としての、自動機械としての運動は、一般に、ひとへにその量的限度を超えようとするそれでありうる。が、退藏貨幣の量的限度が踏み越えられることによつて、さらに新しき障壁がつくりいだされ、それがまた更に止揚されなくてはならぬ。障壁として現はれるのは、退藏貨幣の一の特定の限度ではなく、退藏貨幣の各限界である。従つて退藏貨幣は、なんら自己固有の限度を、それ自身の極限をもつことなく、その都度々々の結果に、その開始の動機を見出すところの、際限もなき過程である。退藏貨幣は、保藏されるが故にのみ増加されるとしても、しかしまた増加されるが故にのみ保藏される。

貨幣は、致富の渴望の一對象であるばかりでない。それはその代表的對象である。致富の渴望は、本質的に「黄金慾」である。致富の渴望は、衣服、裝飾、畜群、等のごとき特種の自然的富ないし使用價值に對する渴望とは違つて、一般的富が一般的富として特種の一物に個別化されて、従つて一箇の

商品として確保されうるその時にのみ可能である。貨幣はそこで、致富の渴望の對象たると全く同じ程度にまた、その源泉として現はれる。このことの根柢に横たはるのは何かといふに、交換價值としての交換價值が、それとともにその増加が、目的となることである。貪慾は、貨幣が流通要具となることを許さずして、退藏貨幣を固持するのだが、しかし黄金慾は、貨幣の魂を生かし、流通に向つて走らんとするその不斷の緊張を保たせる。

(七)「金錢からまづ貪慾が發し、それが次第に一種の狂氣へと生長する。これはもはや貪慾ではなく、黄金への渴望である。」
(アフリニウス「博物學」第一卷、第三十三篇第十四章)

すると、退藏貨幣が形成されるところの活動は、一方では絶えずくりかへされる賣却によつて、流通から貨幣を引き上げることであり、他方では單純なる貯藏、蓄積である。富の蓄積としての富の蓄積が起るのは、事實上、單純流通の圏内のみにおいてであり、それも貨幣退藏の形においてである。が、なほ後に明らかにするであらうやうに、もう一つのいはゆる蓄積の諸形態なるものにあつては、ただ言葉の誤用から、また單純な貨幣蓄積を想ひ出すからのみ、それが蓄積として通用するまでのことである。他のあらゆる商品は、二つに一つの仕方では蓄積される。一つにはそれらが使用價值として蓄積され、そしてこの場合には、蓄積の様式は當の使用價值の特種性によつて規定される。たとへば穀物の蓄積には特種の工夫が要る。羊を蓄積するには私は羊飼ひにならなくてはならぬ。奴隸と土地

との蓄積は支配隷屬關係を必要とする、等、等。特種の富の貯藏は、蓄積すること自體の單純な行爲とは違つた特種の手続きを要し、人間個性のさまざまな特種部面を發展させる。また二つには、商品形態における富が、交換價值として蓄積され、そしてこの場合には蓄積は一の商人的ないしは特殊に經濟的な作業として現はれる。これにあつての主體は、穀物商人、家畜商人、等、等になる。で、金銀は、それを蓄積する個人の何らかの活動によつて貨幣であるのではなく、かかる活動の助けをからずして進み行く流通過程の結晶として貨幣なのである。個人はただ、金や銀をかき集め、その目方にまた目方を積んでゆくといふ外に何もすることがなく、それは全然無内容な活動であつて、それがもし他のすべての商品に適用されたら、商品の價值を減らしてしまふばかりである。

(八)「ホラーツが下のやうにいふ時、彼は貨幣退藏の哲學はなにも解つてをらない(諷刺時、一、二、三)。」

「音樂を習はうなど思つたこともない癖に、
胡弓を買つて、買つた時から藏つておいたら、

靴屋の仕事も知らないで鍔や靴型をいぢくり廻してゐたら、
袖も釧もわからずに船を操つてゐたら、

人は彼らを氣遣ひといふだらう。
だが、私に教へてくれまいか、その人たちのすることが、

儲けた金を儲けるが早いか藏ひこんで、一文にだつて觸つたら罰が當ると思つてる男と、
どこが違ふといふのだらう？」

セニョル君は問題をもつとよく理解してゐた。「金錢は、それに對する欲求が普遍的なものであるところの唯一のものである」

やうに思はれる。何故なら金銀は抽象的な富で、それを所有する人は、その性質の如何を問はず、自分のどんな欲望でも満たすことが出来るからである。」(ジャン・アリヴァー、ペイマ伯譯「經濟學の基礎原理」パリ、一八三六年、二二二頁)。またノトルヒはいふ。「貨幣は他のすべての富を代表するから、ただ貨幣を蓄積しきへすれば、人は世界に存するあらゆる種類の富を獲得することが出来る。」(上掲書、第二卷、一三四頁)

わが貨幣退藏者は、交換價値の殉教者として、^{かたじけなく}金柱の天邊に坐つた神聖な苦行者として現はれる。彼には、社會的形態にある富だけが問題であり、であるから彼は、それを埋めて社會からかくす。彼はいつでも流通しうる形態にある商品を欲し、それだから彼はそれを流通から引き上げる。彼は交換價値を夢にまで見、それほどだから彼は交換しない。富の流動態とその化石とが、長壽の薬と智慧の石とが、鍊金術的な奇怪さでお互ひを通して化けて出る。彼の想像に描かれる果てしなき享樂の追求において、彼は一切の享樂を諦める。あらゆる社會的欲望を充たさんと欲するが故に、彼は殆んど自然の必要をさへ充たさない。彼は、富をば、その金屬性の肉體でしつかりと握つてゐながら、ただ幻想にまでそれを蒸發させる。だが事實としては、貨幣のための貨幣の蓄積は、生産のための生産——すなはち社會的勞働の生産力の、慣習的欲望の埒外への發展——の、蒙昧形態である。商品生産の發展が未成熟であればあるほど、交換價値の、貨幣としての最初の獨立化するなはち貨幣退藏の重要さが大きい。従つて貨幣退藏は、古代諸民族においては、またアジアにあつては現在までも、そしてまた交換價値が未だすべての生産關係をつかまないところの近代の農業諸國民にあつても、重大な役割を演じてゐる。で、吾々はこれから、金屬流通それ自體内の貨幣退藏の、特殊に經濟的な機能について考察しようとするのであるが、その前に一應、貨幣退藏の他の一形態に言及しておく。

銀商品および金商品は、その審美的性質は全くこれを度外視するとしても、それらを構成する材料が貨幣の材料であるかぎり、金貨や金地金が金商品に轉化されうると同じやうに、貨幣に轉化されることが出来る。金銀は、抽象的富の質料であるのだから、富の觀せものの最大なるものは、具體的使用價値としての金銀の利用にあるし、そしてある生産段階にあつての商品所有者が彼の寶を埋藏するとなると、この退藏貨幣は彼を驅つて、自信さへあれば必ず「大盡」(ricco homine)顔をして他の商品所有者の前に現はれさせるものである。彼は自分と自分の家を金ピカにする。貨幣退藏が、ブルジョア經濟におけるごとく全生産機構の從屬的機能として現はれずして、この形態の富こそが窮極目的として固持されるところのアジア、わけでもインドにあつては、金商品や銀商品は本來、ただ退藏貨幣の審美的形態にすぎない。中世の英國では、金商品銀商品は、素朴な勞働を追加することによつてその價値が少しづつ増加されてゐるだけだから、金商品銀商品は、法律上では退藏貨幣の單なる形式と見られてゐた。その商品の目的は、再び流通に投入されることにあつたし、そしてその純量率は鑄貨のそれと全く同様なるべしと規定されてゐた。富の増加に伴つて、奢侈對象としての金銀の使用が増加するといふことは、古代人にもわかりきつてゐたほどにごく單純なことなのに、現在の經濟學者は、

金銀商品の使用は富の増大に比例して増加せず、ただ貴金屬の價值低落に比例してのみ増加する、といふ間違つた説をたててゐる。カルフォルニアとオーストラリアの金の利用に關する彼らの、他の諸點では正確な諸論證でも、原料品としての金の消費の増大が、彼らの論述においては、それに相應する金價値の下落によつては證明されてをらないといふその理由のために、いつも一つの穴がある。一八一〇年から一八三〇年にかけて、アメリカ植民地とスペインとの戦争および革命のために、鑛業が中絶した結果、貴金屬の年平均生産は二分の一以下に低下した。一八二九年には、ヨーロッパに流通する鑄貨の減少は、一八〇九年に比すれば殆んど六分の一に及んだ。かやうに生産量は減少し、そして生産費は——もし少しでも變化したとすれば——増加してゐたにもかかはらず、しかも奢侈對象としての貴金屬の消費は、英國ではすでにこの戦争中に、大陸ではパリ平和條約後に、著しく増加した。それは、一般的富の増加とともに増大したのである。一般的法則として、平和時代にあつては金銀貨の奢侈對象への變化が、そして後者の地金や鑄貨への再轉化は、しかしただ動亂狀態の下においてのみ優勢であるといへる。奢侈品形態をとる退藏金銀貨が、貨幣として仕へつつある貴金屬に對していかに大なる比例にあるかは、ヤコブによると、一八二九年には英國におけるこの比例は二と一とであり、全ヨーロッパおよびアメリカにおいては貨幣として存在する貴金屬よりも、奢侈對象として存在するその方が四分の一だけ多い、といふ事實によつても知れよう。

(九) 商品人の「内心の彼」は、商品人が文明化してそして資本家に進化したる場合で、いかに昔のままであるかといふことは、たとへば、ある世界的銀行のロンドン代表者が例證してゐる。彼は、十萬ポンドの銀行券をば、いかにも適はしい自家の教章であるとして硝子の額にして懸けておいた。面白いのは、この流通銀行券が嘲るやうな意大振りて流通を見下してゐることだ。

(一〇) 後に引用するクセノフの文句を見よ。

(一一) ヤコブ、前掲書、第二卷、第二十五および二六章。

(一二) 「激しき動搖と不安の時代、わけても内亂および外敵侵入の場合には、金銀商品は貨幣に轉化される。しかるに幣體と繁榮の時代には、貨幣は小皿や細工物に轉化される。」(同上、第二卷、三五七頁)

吾々は、貨幣流通は單に諸商品の轉形の現象にすぎず、ないしは社會的質料轉換が行はれるその形態變化の現象にすぎないことを知つた。一方では、流通する諸商品の變化する價格量の大小、もしくは同時的轉形の範圍の大小とともに、他方では諸商品の形態變化の毎回の速度とともに、流通する貨幣の總量は絶えず或ひは膨脹し、或ひは縮小しなくてはならず、このことは、一國に存在する貨幣の總量が、流通しつつある貨幣の量と常に變化する比を保つ、といふ條件の下にのみ可能である。この條件は貨幣退藏によつて充たされる。價格が低下すれば、ないしは流通速度が増加すれば、退藏貨幣の貯水池は、流通から分離した貨幣部分を吸収する。價格があがり、ないしは流通速度が減れば、退藏貨幣は開放されて一部分は流通へと流れ戻る。流通する貨幣の退藏貨幣への凝結と、退藏貨幣の流通への流入とは、絶えず變化する振動運動であり、これにおいて一傾向が勝つか他傾向が勝つかは、ひ

とへに商品流通の動搖によつて規定される。退藏貨幣がかやうに、流通する貨幣の排水路および給水路として現はれるところから、流通自體の直接必要に條件づけられた貨幣量だけが、常に鑄貨として流通することになる。總流通の範圍が突然に擴がり、賣買の流動的統一が優越し、従つて實現さるべき價格の總量が、貨幣流通の速度以上に速かに増加すれば、退藏貨幣はみるみる空虚になる。が、總運動が異常に澁滞するか、ないしは賣買の運動が固定するやいなや、流通要具は非常な割合で貨幣に凝結し、退藏貨幣貯水池はその平均水準以上に満たされる。純然たる金屬流通をもつ國々もしくは低い生産段階にある國々では、退藏貨幣は限りなく分散し、國の全面に撒布されてゐるが、ブルジョア的に發達した國々では、銀行といふ貯水池に集中されてゐる。退藏貨幣はこれを、絶えず流通してゐる貨幣の總量の一成分をなすところの、鑄貨準備と混同してはならぬ。退藏貨幣と流通要具との相働的關係は、この流通貨幣總量の方の増減を前提とするのである。金商品銀商品は、すでに見たやうに、貴金屬の排水路と同時にまた潜在的なその給水路をも形づくる。平常の時期には、ただ第一の機能だけが金屬流通の經濟にとつて重要である。

(一三) 次の文章においてクセノフォンは、貨幣としておよび退藏貨幣としてのその特殊の形態確定における貨幣を説いた。「吾々が知る作業のすべてのうちで、これ一つだけが、作業において、産業がますます發達しても何らの配慮を要しないものである。發見される鑛石が多量であればあるほど、採掘される銀はそれだけ多量であるし、採掘せんと欲する人もまたそれだけ多數である。自分の家に十分な家具をもつてゐる者なら、誰も、なほそれ以上家具を買はうなどは夢にも考へないが、しかし

銀となると誰もまだ「もう深山！」と叫ばざるを得ないほど多くもつたといふ者がない。それどころではない。誰でもが多すぎるほど銀を所有するに至るやうなことがあると、彼は穴を掘つてそれを埋めることに、現實にそれを用ひると同じやうな快樂を見出すのである。國が榮えてゐる時には銀ぐらゐる人の欲しがるものはない。男たちはみごとな武器や立派な馬や邸宅やまた贅澤な諸道具を求めるために貨幣を欲する。女たちは高價な衣裳や黄金の裝飾品にはしる。が、また、穀物やその他のもの不作なり戦争なりのために、國が疾む時には、通用する貨幣に對する需要は（土地は不生産的に廢てゐるとはいへ）、必需品や軍需品に支拂ふために却つて絶對的できさへもある。」クセノフォン「租稅論」(第四章)。アリストテレスは「政治學」第一卷、第九章において、流通の二運動 $W-G-W$ と $G-W-G$ とをその對立におきて「經濟學」と「理財學」といふ名稱の下に説いてゐる。この二形態は、ギリシアの悲劇作家、とくにユーリピデスによつて「Dikn」(權利) といふ「Keodos」(利益)として對立せしめられてゐる。

b 支拂要具

ここまでのところ、貨幣が流通要具から區別された二つの形態は、停止状態にある鑄貨の形態と退藏貨幣の形態とであつた。第一の形態の方は、鑄貨の貨幣への暫時的轉化にあつて、 $W-G-W$ の第二環、購買 $G-W$ が、一定の流通圏内で、一連續をなすつぎつぎの購買に分れねばならないことに反映した。が、貨幣退藏の方は、 $W-G$ が、 $G-W$ へと連續せずして隔離されることに由來し、もしくは商品の第一轉形の獨立的な展開であつた。貨幣は、すべての商品の讓與された存在として、商品の隨時に讓與される形態の存在としての流通要具と對立して發展する。鑄貨準備と退藏準備とは、非流通要具としてのみ貨幣であつたが、しかし流通しないが故にのみ彼らは非流通要具であつたのである。

吾々がいま貨幣を考察せんとするその規定においては、貨幣は流通し、または流通へはいつてゆくのだが、しかしそれは流通要具の機能においてではない。流通要具としての貨幣は常に購買要具であつた。今や貨幣は非購買要具として作用する。

貨幣が、貨幣退蔵によつて、抽象的社會的富の存在および質料的富の實體的代表物として發展するやいなや、それは、貨幣としてのこの確定においては、流通過程内に特有なる機能をもつに至るものである。貨幣が單なる流通要具として、従つて購買要具として流通するとすれば、それは商品と貨幣とが同時に相對してゐること、すなはち同一價值量が二重に存在して、一方の極では商品として賣手の手に、他方の極では貨幣として買手の手にあることを含意する。この兩等價物の、對置された極における同時的存在と、さうしてそれらの同時的位置轉換ないしは相互的讓渡は、それ自身さらに、賣手と買手とがそこにある二等價物の所有者としてのみ、互ひに關係するといふことを含意する。だが、貨幣の種々なる形態確定をつくり出すところの商品轉形の過程は、また、商品所有者をも轉形させる。すなはち、彼ら相互にとつての彼らの社會的性質を變化させる。商品轉形の過程において、商品の守護者は、商品が移動しまたは貨幣が新形態をとるたびごとに、その皮膚を變へる。で、商品所有者らは、初めはただ商品所有者としてのみ相對してゐたが、やがて一方は賣手、他方は買手となり、更に兩者は交る交る賣手および買手となり、それから貨幣退蔵者となり、最後に金持になつた。で、商品所有

者らは、入つた時と同じ彼らとして流通過程から出て來るのではない。事實において、貨幣が流通過程において享ける種々なる形態確定は、たゞ諸商品そのものの、結晶された形態轉換にすぎず、この形態轉換は更にまた、商品所有者らがその質料轉換をなしとげるその際の、移動的社會的關聯の、對象物的な表現にすぎない。流通過程において新しき取引關係が發生し、そしてこの變化した關係の擔ひ手として、商品所有者らは新たな經濟的性質を得ることになる。ちやうど、内國的流通の内部において、貨幣が觀念化され、單なる紙が金の代表者として貨幣の機能を營ひやうに、同じ流通過程は、貨幣または商品の單なる代表者としてそれに入りこむ買手や賣手に、すなはち未來の貨幣または未來の商品を代表する彼らに、現實の買手あるひは賣手たる效力を與へる。

金が貨幣として發展し、達するすべてのその形態確定は、單に、商品轉形のうちに閉ぢ込められてある諸規定の開展に外ならない。が、これらの諸規定はしかし、單純なる貨幣流通、すなはち鑄貨としての貨幣の現はれ、もしくは動的統一としてのW—G—W運動にあつては、獨立の姿態に分化されなかつた。もしくはまた該諸規定は、たとへば商品の轉形の中絶がさうであるやうに、單なる可能性として現はれる。W—Gの過程にあつて、現實の使用價值および觀念上の交換價值としての商品が、現實の交換價值および單に觀念的なる使用價值としての貨幣と關聯することは、すでに見た。賣手は、商品を使用價值として讓渡することによつて、商品がもつ交換價值と貨幣の使用價值とを實現する。反

對に買手は、貨幣を交換價值として讓渡して、貨幣の使用價值と商品の價格とを實現する、そこに、それに應ずる商品と貨幣との位置交換が起つた。この二重的兩極的對立の生きた過程は、今や再び、その實現において分裂されるのである。賣手は、商品を現實に讓渡して、そしてその價格をばまづそれ自身、ふたゝびたゞ觀念的にのみ實現する。彼は、商品とその價格で賣つたのだが、しかしその價格は、約定された數日のいつかのみ實現される。買手は將來の貨幣を代表するものとして買ひ、賣手の方は現在の商品の所有者として賣る。賣手の側では商品が、價格として現實に實現されることなしに、使用價值として現實に讓渡される。買手の側では、貨幣が、交換價值として現實に讓渡されることなしに、商品の使用價值において現實に實現される。前には價值表章が象徴的に貨幣を代表したが、こゝでは、買手それ自身が象徴的に貨幣を代表する。が、さきに價值表章の一般的象徴が國家の保證と強制通用を喚起したやうに、今や買手の人格的象徴が、法律をもつて強制しうべき私的契約を、商品の所有者相互間に喚起する。

反對に、G—Wの過程においては、貨幣の使用價值が實現される前に、ないしは商品が讓渡される前に、貨幣は現實の購買要具として渡されて、従つて商品の價格が實現されることも出来る。これはたとへば、前金といふありふれた形式で行はれてゐる。ないしはまた、イギリスの政府がインドの農民の阿片を買ひ、ロシア在住の外國商人がロシアの農産物の大部分を買ふ場合のやうな形式でも行はれる。

それにしても、貨幣はこゝではたゞ、すでに學んだところの、購買要具の形態で作用するまでのこと、従つて何ら新しい形態規定をとるものではない。だから、吾々はそれについてはこれ以上説かないのであるが、しかしG—WおよびW—Gの兩過程が、こゝで現はれるその轉化された姿態に關しては、なほ次の諸點を指摘しておく。すなはち賣ることと買ふこととの差異は、直ちにそれが流通において現はれる時には單に想像された差異であるのが、今や現實の差異となることである。何故ならこゝでは、その一方の形態においては商品のみが、他方の形態においては貨幣のみが存在し、しかもそのいづれにおいても、發意が動き出すところの主格のみが存在するから。その上になほこの兩形態にとつては、そのいづれにおいても、買手と賣手との共同の意志においてのみ等價物は存在する、といふ點が共通である。この意志は、双方を拘束して、そして特定の法律的諸形態を得る。

(二) 資本も、もちろん、貨幣の形態において前拂ひされ、そして前拂ひされた貨幣は前拂ひされた資本たりうる。しかしこの見地は、單純流通の水平線内に入らない。

賣手と買手とが債權者と債務者となる。商品所有者は、前には退藏貨幣の守護者として滑稽な役をつとめたが、今度は自分でなく隣人を一定貨幣額の存在として考へ、自分ではなく隣人を交換價值の殉教者たらしめるのだから、厳めしくなる。彼は、信心者(Gläubigen)から債權者(Gläubiger)になり、宗教を出て法律に入る。

「俺は證文の上になすわつて動かない！」

商品は、そこにあつて貨幣はたゞ代表されてゐるにすぎないところの、この變化した形態のモノにおいてはずなほち、貨幣は何よりもまづ價値の尺度として機能する。商品の交換價値は、その尺度としての貨幣で評價されるが、價格は、契約上で秤定された交換價値として賣手の頭の中にあるといふだけではなく、同時に買手の義務の尺度として存在する。第二に、貨幣はこゝでは、その未來の存在の影を投げてゐるだけではあるが、購買要具として機能する。すなほち貨幣は、商品をその位置から、賣手の手から、買手の手へ引きよせる。契約履行の期限が満つると、貨幣は流通に入る。それが位置を轉じて、そしてさきの買手の手からさきの賣手の手に移るからである。が、それは、流通要具ないし購買要具として流通に入るのではない。かゝるものとしては、まだ流通に入らぬうちに機能したのであつて、かゝるものとして機能することをやめてから後に、そこに現はれるのである。で、それはむしろ、商品にとつての唯一妥當な等價物として、交換價値の絶對的存在として、交換過程の最後の言葉として、短かくいへば貨幣として、しかも、一般的支拂要具としての特定機能における貨幣として、流通に入るのである。支拂要具としてのこの機能において、それは絶對的商品として現はれるのだが、しかし流通そのものの内部に現はれるので、退藏貨幣のごとくにその外部にはない。購買要具と支拂要具との差別は、商業恐慌の時期には、甚だ厄介に顯著になる。

(二) ルッターは購買要具と支拂要具との別を力説してゐる。「第二版註」「資本論」第一卷、第一篇、註九六參照

初めは、流通における生産物の貨幣への轉化は、その生産物が商品所有者にとつての使用價値ではなくて、その讓渡によつて漸く使用價値となるのであるかぎり、商品所有者にとつての個人的必要と見える。しかるに、契約期日に支拂をするためには、彼は前もつて商品を買つてゐなければならぬ。従つて賣ることは、彼の個人的欲求とは全く無關係に、流通過程の運動によつて、彼にとつての社會的必要に轉化する。一商品のさきの買手として彼は、貨幣を購買要具としてではなく支拂要具として得るために、すなほち交換價値の絶對的形態として得るために、強制的に他商品の賣手となる。結終行爲としての商品の貨幣への轉化は、ないしはまた、貨幣退藏の場合には商品所有者の氣紛れによるやうに見えたところの、自己目的としての第一の商品轉形は、今や一箇の經濟的機能となる。支拂ふためにする賣却の動機および趣旨は、流通過程の形態そのものから發生するところの、賣却の趣旨である。

賣却のこの形態において、商品はその第一轉形、すなほち貨幣への轉化を延期しながら、その位置轉換を遂げ、流通する。それに反して買手の側では、第一轉形の完了しないうちに、すなほち商品が貨幣に轉換しをはらぬうちに、第二轉形が完了され、すなほち貨幣が商品に再轉化される。すなほちここでは、時間的には、第一轉形が第二轉形の後に生ずる。そしてそれとともに貨幣——第一轉形に

おける商品の姿態——が、新しき形態確定を得る。貨幣すなはち交換價値の獨立的發展は、こゝではもはや商品流通の媒介的形態ではなく、その終局的結果である。

かゝる掛け賣り——賣却の兩極が時間的に分離してあるところの——が、單純商品流通から自然生長的に起りくるといふことは、別に詳しく論證するまでもなく明らかである。まづ、流通の發展は、同じ商品所有者らが賣手および買手としての交互的出現をくりかへすやうな結果に立ち至らせる。くりかへし起るこの現象は、もはや偶然的なことではなくなつて、商品は、たとへば將來の一定期日に交附されかつ支拂はるべき約束の下に註文される。この場合には、賣却は觀念的に、すなはちこゝでは法律的に行はれ、商品および貨幣が實體的にそこに現はれるといふことがない。貨幣の、流通用具および支拂要具としての形態は、こゝではなほ一致してゐる。それは、一つには商品と貨幣とが同時に位置を交換するからであり、二つには貨幣がこゝでは商品を買はずして、さきに賣られた商品の價格を實現するからである。更に一群の多數の使用價値の性質上、それらは事實上の交附とともにではなく、一定の期間引き渡されてあつてから始めて、實際に讓渡されるといふことが生じて來る。たとへば、一家屋の使用が一箇月間賣られるとすると、その家屋は月の初めに占有者を換へるとはいへ、その使用價値は月の終りに漸く交附済みになる。使用價値の事實上の引き渡しとその現實の讓渡とが、こゝでは時を異にして行はれるから、その價格の實現は、いつもその位置轉換より遅れて起ることにな

る。最後にまた、各種の商品が生産される時間の長さおよび時期に相違のある結果、一方が賣手として現はれても、他方はまだ買手として現はれない、といふことにもなり、そして同じ商品所有者らの中に賣買が頻繁にくりかへされる場合にはまた、賣却における二要因が、彼らの商品の生産諸條件に應じて、離れ離れになる。そこで商品所有者らのおひだに、債權者と債務者の關係がなりたつ。これは、信用制度の自然生長的な基礎を形成するにはするが、しかし該制度が存在するに先だつて充分に發展してゐることが出来る。それにしても、信用制度の形成とともに、すなはちブルジョアの生産一般の形成とともに、支拂要具としての貨幣の機能が、購買要具としてのその機能を犠牲にし、更に、より多く貨幣退藏の要因としての機能を犠牲にして、擴大されることは明らかである。たとへば英國では、鑄貨としての貨幣はすべて、生産者と消費者とのおひだに行はれる小賣商ひと小商業との範圍へ放逐されてゐるのに、支拂要具としての貨幣は、大商業取引の範圍を支配してゐる。

(三) マクレオド君は、彼の空理家式的定義自慢にもかゝらず、最も初歩的な經濟關係を誤認し、貨幣一般をば、貨幣の最も發展した形態なる支拂要具の形態から發生させたりしてゐる。彼はなにかんづくかういつてゐる。人々はその交互的奉仕をば常に同時に、また同一範圍において必要とするものでないから、「そこに第一の者が第二の者に負ふところの若干の不足、ないしは若干の勤めが残るであらう——すなはち債務が。」この債務に權利をもつ者は、彼の勤勞を直接必要としない第三の者の勤勞を必要とし、そこで第一の者が彼に負ふところの債務をば、「第三の者に移轉する。かくして、債務の證據物は所有者を換へる——すなはち通貨が。……一人が、金屬通貨で表はされた債務を受け取る時、彼は單に最初の債務者の勤勞を手に入れうるだけでなく、産業なる社會全體のそれを手に入れることが出来る。」(マクレオド「銀行の理論」および實際……) ロンドン、一八

五五年、第一卷、第一章)

一般的支拂要具として貨幣は、契約の一般的商品となる——初めはたゞ、商品流通の範囲内のみにおいて、^(四)が、貨幣のこの機能における發展とともに、次第に、支拂のすべての他の形態が貨幣支拂になつてゆく。貨幣が独自の支拂要具として發展してゐる度合は、交換價值が、生産をその深さおよび廣さにおいて支配してゐる度合を示す。^(五)

(四) ベーレー、前掲書、三頁。「貨幣は契約の一般的商品である。すなはち、將來完了すべき財産上の取引の大多數が貨幣で行はれる。」

(五) セニョル、前掲書、二二二頁。「あらゆる物の價値は、一定期間のうちに變動するから、人々は、その價値の變動が最も少く、與へられた平均購買力が最も長つづきする物を支拂要具として採用する。かくて貨幣は、價値の表現ないしは代表物となる」と。だがこれは逆だ。なぜなら、金銀が貨幣すなはち獨立した交換價値の存在となつてゐるから、金銀は支拂要具となるのである。セニョル君が言及してゐるところの、貨幣の價値量の繼續性に關する考慮が實際に問題となる時、すなはち貨幣が四圍の事情の力によつて、一般的支拂要具として振舞ふやうになる時期には、まさに貨幣の價値量にも動搖が見出されるのである。英國のこのやうな時期はエリザベスの時代であつた。その時代に、ベーレイ卿とトマス・スミス卿とは、貴金屬の下落が著しくなつたことに鑑みて、オックスフォードとケンブリッジ大學に、その地代の三分の一を小麦と麥芽で貯蓄する義務を負はせる法令を出したものである。

支拂要具として流通する貨幣の量は、まづ、支拂の總額によつて決定される。すなはち讓渡された商品の價格總額によつて決定され、單純貨幣流通におけるやうに、讓渡さるべき商品の價格總額によ

つてではない。かくして決定した總量は、しかしながら、二重に修正される。第一に、同一個貨が同一機能をくりかへす速度、もしくは支拂の總量が支拂の進行的連鎖として、自己を表はす速度によつて修正される。AがBに支拂ひ、ついでBがCに支拂ひ、等、等。同一個貨が支拂要具としての機能をくりかへす速度は、一方では商品所有者相互間の債權者と債務者の關係、すなはち同じ商品所有者が、一人に對しては債權者であり、他に對しては債務者である等の關係の連鎖に依存し、他方では、種々なる支拂期日の間隔をなす時間の長さに依存する。この支拂、すなはち事後的な商品の第一轉形の連鎖は、流通要具としての貨幣の流通においてあらはれる諸轉形の連鎖とは、質的に異なるものである。後種の連鎖は、時間的繼起において現はれるといふだけではなく、時間的繼起において始めてさうした連鎖となる。商品が貨幣となり、更に再び商品となつて、そして他の商品が貨幣となることを可能ならしめる、等、ないしは賣手が買手となり、それによつて他の商品所有者が賣手となる。この關聯は、商品交換の過程そのものにおいて偶然になりたつ。しかるに、AがBに對する支拂に用いた貨幣が、BからCに、CからDに、等、引きつづいて支拂はれ、しかもそれが迅速に連續する時間において起ること——この外部的關聯においては、ただ、既成のものとしてある社會的關聯が表面に出てくるまでである。支拂要具として登場するが故に、同一貨幣が種々なる人々の手を通過するのでなく、種々なる人々の手がすでに握られてゐるが故に、それは支拂要具として流通するのである。支

拂要具としての貨幣が流通する速度は、鑄貨ないしは購買要具としての貨幣が流通する速度が示すそれよりも、諸個人が流通過程に引きこまれてゐることの、遙かに深き程度を示すものである。

同時に、従つてまた空間的に相並んでゐる購買と賣却の價格總額は、鑄貨總額が通用速度によつて補はれる限度を形づくる。この制限は直ちに、支拂要具として機能する貨幣にとつてのそれとなる。同時になさるべき多くの支拂が一箇所に集中されると、かゝる集中は、初めは自然生長的にたゞ商品流通の大中心地にのみ生ずる、たとへば、AはBに支拂をなすと同時にCから支拂はるべきものがあるといつた風になるから、借方および貸方としての諸々の支拂が互ひに清算される。だから、支拂要具として要する貨幣の量は、同時に實現さるべき支拂の價格總額によつてではなく、支拂の集中される程度の大小と、そして、貸方および借方としての諸支拂を相殺した差引殘高の大小とによつて決定されるであらう。この清算のための特別の設備は、たとへば古代ローマにおけるやうに、信用制度が少しも發展してゐなくても成立する。が、それに関する考察は、どこでも特定の社會範圍において定まつてゐる一般的支拂期日についての考察と同様、こゝに屬する事柄ではない。それにしても、この期日が、流通する貨幣の量の週期的動搖に及ぼす特種の影響が、最近時に至つて科學的に研究されてゐる、といふことだけは注意してよからう。

諸支拂が貸方および借方として相殺されるかぎりでは、そこに現實の貨幣が仲に立つ餘地は全くない。この場合、貨幣はたゞ價值尺度としての形態で發展する——一方では商品の價格における、他方は相互の債務の大小における。で、交換價值は、この場合、その觀念的存在以外に何ら獨立的存在をもたず、價值表章としての存在さへもたない。いひ換へれば、貨幣はたゞ觀念的な計算貨幣となるにすぎない。そこで、支拂要具としての貨幣の機能は、かういふ矛盾を含むことになる。すなはち一方ではそれが、支拂が相殺されるかぎり、單に觀念上に尺度として働きながら、他方では、支拂が現實に行はれるかぎり、瞬時的流通要具としてでなく一般的等價物の休止的存在として、絶對的商品として、一口にいへば貨幣として、流通に入り來ることである。従つて、支拂の連鎖と支拂相殺の人為的な組織とが發展してゐるところでは、支拂の流れを暴力的に中斷し、支拂相殺の機構を攪亂するところの激動期には、貨幣は突如として、その雲霧的假幻的な價值尺度としての姿態を脱し、硬貨もしくは支拂要具に變化する。で、商品所有者がすでに久しき以前から資本家になつてをり、彼らのアダム・スミスを知つてをり、そして、金銀のみが貨幣であるとか、貨幣は總じて他商品と異なる絶對的商品であるとかいふ迷信を、嘲笑するやうになつてゐるところの發展したブルジョア生産の状態では、貨幣はまた突如として再現する——流通の仲立ちとしてではなく、交換價值の唯一妥當な形態として、そして貨幣退藏者の考へるところと全く同様に、唯一の富として。かくのごとく、獨自なる富の存在として貨幣は、現實に一切の質料的富の——たとへば、貨幣主義の場合のやうな假想のではなく——現實の

減價および價值喪失に際して、その正體を見せる。これは、世界市場恐慌の特殊の要因であつて、貨幣恐慌と呼ばれる。かゝる瞬間において、唯一の富として喘ぎ求められるところの「至上善」(Summum bonum)は、貨幣であり正金であつて、これと並ぶ時すべての他の商品は、まさにそれらが使用價值であるが故に役に立たないものとして現はれ、贅物として、玩具として、ないしはマルティン・ルッタ博士がいふやうに、たゞの華美飽食として現はれる。この、信用制度から現金制度への突如たる轉換は、實際上の恐慌に加ふるに學說上の恐慌をもつてする。そして流通の當事者らは、彼ら自身の關係の解くべからざる神祕の前に戰慄する。

(六) プルジョアの生産關係を阻止しようとし、プルジョアそのものに猛烈な攻撃を加へたボアギューベルは、單に觀念的にもしくは瞬時的に現はれる貨幣の形態を偏愛してゐた。で、まづ流通要件を。それから支拂要件を。彼がやはり理解してゐないことは、貨幣の觀念的形態からその外的現實性への直接的な轉換であり、單に思考された價值尺度の中にすでに硬貨は潜在的に含まれてゐるといふことである。彼はいふ、貨幣が、商品の單なる形態そのものであることは、「商品が評價された」後に、貨幣の仲介なしに交換が行はれるところの大商業取引において示される。(「フランス詳論」第一章、二一〇頁)

支拂はまた支拂で、一つの準備基金、すなはち支拂要件としての貨幣の蓄積を必要にする。この準備基金の形成は、もはや、貨幣退藏の場合のやうに流通自體の外部なる活動としては現はれず、また、鑄貨準備の場合のやうに鑄貨の單なる技術的保藏としても現はれない。むしろ貨幣が、將來の一定支拂期日に存在するやうに次第に堆積されなければならぬのである。だから貨幣退藏は、それが至當と

見做されるところのその抽象的形態においては、プルジョア的生產の發展とともに減少するが、この交換過程から直接に要求される貨幣退藏は増大する。もしくはむしろ、商品流通の圏内にあつてあまねく形成されるところの退藏貨幣の一部分が、支拂要件の準備基金として吸収されるのである。プルジョアの生産が發展すればするほど、この準備基金は必要最少限度に限定されてくる。ロックは利子の低下に關する彼の著書において、その時代におけるこの準備基金の大きさについて、興味ある説明を試みてゐる。それによつて吾々は、まさに銀行業の發達しはじめたその時代に、一般に流通する貨幣のいかに著大な部分が、英國における支拂要件の準備基金として吸収されてゐたかを知ることが出来る。

(七) ロック、前掲書、一七、一八頁。

單純な貨幣流通の考察から生じたやうな、流通する貨幣の量に關する法則は、支拂要件の流通によつて本質的に修正される。貨幣の流通速度が與へられてゐる場合には、それが流通要件としてである支拂要件としてであれ、與へられた期間内に流通する貨幣の總額は、實現さるべき商品價格の總額プラス同一時期に満期となる支拂の總和マイナス決濟によつて相殺する支拂、によつて決定される。流通する貨幣の量は諸商品價格に依存するといふ一般的法則は、これによつてすこしも動かされない。なぜなら支拂そのものの合計が、契約で定められた價格によつて決定してゐるから。だが、たとへ流

通の速度と支拂の節約とが、従前どほりであると假定するとしても、一定時期たとへば一日に流通する商品の量と、同じ一日に流通する貨幣の量とは、決して一致しないことは明らかである。何故といつて、そこには、將來に至つて漸くその價格を貨幣に實現する商品の多數が流通してゐるし、またそこには、久しき以前にすでに流通から離脱した、商品に對する支拂用としての貨幣の多くが流通してゐるからである。後者の總額それ自體は、諸支拂の價值總額のうちに、契約の期間はまるで違ふにしても、同じ日に満期となるものの金額の大小如何にかゝるのである。

吾々は、金銀の價值の變化が、價值尺度もしくは計算貨幣としての金銀の機能に影響しないことを見た。しかしこの變化は、退藏貨幣としての貨幣にとつては決定的に重要であらう。金なり銀なりの價值の騰落とともに、金なり銀なりの退藏貨幣の價值量は上下するからである。支拂要具としての貨幣にとつては、さらに一そう重要である。支拂は、商品の賣却の後に至つて始めて生ずる。すなはち貨幣は、二つの異なる時に、二つの異なる機能において、初めは價值尺度として、次にはそれが秤定に應當する支拂要具として作用する。で、もしその中間の時期において、貴金屬の價值ないしはその生産に要する労働時間が變化するならば、同一量の金銀は、それが支拂要具として登場する時には、さきに價值尺度として作用した時、すなはち契約が締結された時よりも、その價值は多いかまたは少いであらう。こゝにおいて、金や銀のやうな特種の一商品の、貨幣としてないしは獨立化した交換價值

としての機能が、該商品の、特種の商品としての性質、すなはちその價值が生産費の變化に依存することと衝突する。ヨーロッパにおける貴金屬の價值の下落をひき起した大なる社會革命は、古代ローマ共和國の初期に、平民の負債が契約されてゐた銅の價值の昂騰によつてひき起されたところの、これとは逆の革命とともに、周知の事實である。貴金屬の價值の動きがブルジョア經濟組織に及ぼす影響を、これ以上に追求しなくても、貴金屬の價值の低下は債權者を害して債務者を利し、その價值の昂騰は、債務者を害して債權者を利するといふことは、こゝにすでに明らかである。

。世界貨幣

金は鑄貨と區別される貨幣となる。第一には、退藏貨幣として流通から引き上げられることによつて、次には非流通要具として流通に入ることによつて、が、最後にはしかし、商品の世界に一般的等價物として機能するために、國內的流通の限界を突破することによつて。かくして金は世界貨幣となる。貴金屬の一般的重量尺度は、さきに最初の價值尺度として役立つたのであるが、貨幣の計算名は、世界市場の圏内において、今や再びそれぞれの重量名に轉化される。無定形の原料金屬 (base metal) が、流通要具の本來的形態であり、鑄貨形態は本來、金屬片の中に含まれる重量の公定表章にすぎなかつたのであるが、世界鑄貨としての貴金屬は今やふたゝび、模様や刻印から脱却して無頓着なる地金態

に立ちかへる。すなはち、國際的鑄貨、ロシアのイムペリアル、メキシコのターレル、イギリスのソヴァレインといったやうな國家的鑄貨が外國に流通してゐる時、その名稱はどうでもいゝものになつて、たゞその内容だけが通用する。貴金屬は、國際的貨幣として漸く、かの商品交換そのものと同様、自然發生的な社會團體の領内ではなく、種々なるそれらの接觸點に發生したところの、その交換要具としての本來の機能を完うするに至るものである。で、貨幣はすなはち世界貨幣として、その自然發生的な最初の形態を取り戻すのである。貨幣は、國內的流通を脱することによつて再び、特殊の範圍内における交換過程の發展から生じた特殊形態たる價格の尺度標準や、鑄貨や、補助貨や、價值表章、等のごとき、その地方的形態から脱却する。

一國の國內的流通においては、たゞひとつの商品だけが價值尺度としての役目をするを、吾々は見つた。がしかし、一國においては金が、他國においては銀が、この機能を營むところからして、世界市場においては二重の價值尺度が通用し、貨幣は他の一切の機能においてもまた、その存在を二重にする。商品價值の、金價格から銀價格への翻譯およびその逆は、その都度に、兩金屬の相對的價值によつて決定され、この相對的價值は不斷に變動し、従つてその設定は不斷の過程として現はれる。おのこの國內的流通範圍の商品所有者らは、海外の流通に對して金と銀とを代る代る使用することを餘儀なくされ、すなはち内地において貨幣として通用する金屬をば、彼らが海外において貨幣とし

て要するところの金屬と、交換することを餘儀なくされる。従つて各國民は、金と銀との兩金屬を世界貨幣として使用してゐる。

國際的商品流通において金と銀とは、流通要具としてでなく、一般的交換要具として現はれるのである。がしかし、一般的交換要具は、購買要具と支拂要具との、二つの發展した形態においてのみ機能する。兩者の關係はしかし、世界市場においては轉倒される。國內的流通の範圍では、貨幣は、それが鑄貨であつたかぎり、進行的統一W-D-Wの媒介者の働きをした。もしくは、ひとへに購買要具として、商品の不依の位置轉換における交換價值の、たゞ瞬時的な形態を表はした。世界市場においては反對である。こゝでは金銀は、質料轉換がたゞ一方的であるがために、購買と賣却とが相一致しない場合に、購買要具として現はれる。たとへば、キャフタにおける國境貿易は、實際上でもまた條約上でも交易であつて、銀は價值尺度となつてゐるにすぎない。一八五七年—五八年の戰爭は、支那をして、少しも買はずにならざるだけといふことに決定させた。と、突如として銀が購買要具として現はれた。條件の文面を顧慮して、ロシア人は、フランスの五フラン貨をつぶして粗末な銀商品につくり上げ、それがそこで交換要具として役立つことになつた。銀は、一方ではヨーロッパとアメリカとの間に、他方ではアジアとの間に、引き続き購買要具として機能してをり、アジアにおいてはそれが退藏貨幣として埋藏されてゐる。更にまた貴金屬は、二國間の質料轉換の在來の均衡が急に破壊される

と同時に——たとへば、凶作のために一國だけが異常に多く買はねばならぬやうなことが起ると——國際的購買要具として機能する。最後に、貴金屬は、金銀を産出する諸國の手にあつては國際的購買要具である。そこでは、金銀は直接の生産物であり、商品であつて、商品の轉化形態でない。種々な國家的流通範圍相互間の商品交換が發展すればするほど、國際貿易差額を決済するための支拂要具としての世界貨幣の機能が發展する。

國內流通と同様、國際流通は、絶えず増減するところの金銀量を必要とする。従つて累積された退藏貨幣の一部分は、各國において、世界貨幣の準備基金の役目をし、この基金は商品交換の振動に伴つて、或ひは空らになり或ひは充たされる。世界貨幣は、國家的流通範圍のあひだを往復する特種の運動の外に、ひとつの一般的運動をもつ。この運動の出發點は金銀の生産源泉にあり、そこから金銀の流れが種々なる方向をとつて世界市場へ流れる。その場合、金銀は商品として世界流通に入り、そして、國內的流通圏へ落ち込む前に、まづ等價物として自分がよくむ労働時間に比例して、各種の商品等價物と交換される。従つて國內流通においては、金銀は與へられた價値量をもつて現はれる。かくして、金銀の生産費の變化における一高一低は、世界市場において金銀の相對的價値に一樣に影響する。が、この相對的價値は、諸國の流通圏が金銀を吸収する程度には全く關はらない。金屬の流れの、商品世界の各特殊部面によつて捉ふるところとなつた部分は、一部は磨滅した金屬鑄貨を補足するため

に直接に國內の貨幣流通に入り、一部は鑄貨や、支拂要具や、世界貨幣の準備基金をなす各種の退藏貨幣貯水池に貯へられ、一部は奢侈品に變じ、そして最後に、その殘餘は單なる退藏貨幣となる。ブルジョアの生産の發達した段階においては、各種の退藏貨幣の形成は、流通の種々なる過程がその機構を自由に活動させるのに必要な最小限に限定される。で、こゝでは退藏貨幣としての退藏貨幣は、たゞ寢かされた富となるにすぎない——もしもそれが、諸支拂の差引殘額における過剰がとる瞬間的な形態、すなはち中絶した質料轉換の成果であり、従つて第一轉形における商品の硬化であるので、もなければ。

(一) 「蓄積された貨幣は、現實に流通に入りこんでいつて、取引上のあらゆる擾亂に應ぜんがために、その流通圏から退却してあるところの貨幣の數量を補充する。」(ザエルの「經濟學に關する諸考察」への、カルリのノート。クストデイの第十巻、第一章、一九六頁)

貨幣としての金銀が、その概念上、一般的商品であるやうに、世界貨幣における金銀は、それに相應した普遍的商品の存在形態を得る。すべての生産物は、金銀に對して讓渡されるといふ關係において、金銀はすべての商品の轉化された姿態となり、それ故にまた、あまねく讓渡される商品となる。一般的労働時間の體現として、現實の諸労働の質料轉換が地球面に網をはる度合に應じて、金銀は、一般的労働時間の體現として實現される。金銀は、彼らの交換範圍を形づくる特種の諸等價物の一系列が發展する程度に應じて、一般的等價物となる。世界流通においては、商品は、それ自身の交換價値

を普遍的に開展するが故に、交換價値の金銀のうちに轉化された姿態は、世界貨幣として現はれる。で、商品所有者からなる諸國民は、そのすべてにわたる産業とあまねく行はるゝ取引とによつて、金を妥當貨幣に變形すると同時に、一方、産業および取引は、彼らにとつてはたゞ、貨幣を金銀形態で世界市場から取り去るための手段としてのみ現はれる。世界貨幣としての金銀は、だから、一般的商品流通の産物であると同じやうに、またその範圍を擴張する手段である。金をつくり出さうとした鍊金術者の背後から化學が生じたやうに、その蠱惑的な姿態における商品を追ひまはしつゝ、ある商品所有者の背後から、世界産業の、世界商業の源泉が湧き出づる。金銀は、その貨幣概念において世界市場の存在を豫想することによつて、世界市場の成立を助ける。金銀のこの魔術的作用が、決してブルジョアの社會の幼年時代に限られるものでなく、商品世界の擔ひ手らの眼に彼ら自身の社會的勞働が映ずる際の、その轉倒から必然的に生長し出づるといふことは、十九世紀の中頃の新しい金産地の發見が世界取引に與へたところの、異常な影響がこれを示してゐる。

貨幣が世界貨幣に發展すると同じやうに、商品所有者は世界人^{コスモポリタン}に發展する。人間相互の世界人的關係は、本來たゞ商品所有者としての人間の關係である。商品はそれ自身、宗教的、政治的、國民的、言語的障壁を超越する。彼の普遍的言語は價格であり、その共同體は貨幣である。が、國家鑄貨に對立して世界貨幣が發展するとともに、實踐理性の信條としての商品所有者の世界主義が、人類の質料

轉換を妨げてゐる傳來の宗教的、民族的、その他の偏見と對立して發展する。アメリカのイーグル貨幣の形態で英國に上陸した同じ金がソヴァレーンになり、三日後にはバリでナポレオン貨幣として通用し、二三週間後には更にデューカート貨幣としてヴェニスに現はれて、しかも、常に同一價値を保つてゐるのを見れば、商品所有者にとつては、國民性なるものは「ギニー金貨のスタンプにすぎない」ことが明らかになる。彼らの頭にかぶ全世界なるものの崇高な觀念は、市場の觀念であり、世界市場の觀念である。^(二)

(二) モンタナリ「貨幣論」(一六八三年)前掲書、四〇頁。「諸國民間の交通は、地球の全面にあまねく擴がつてゐるところから、いはゞ全世界が一都市となり、この都市において、人は自宅にをりながら、貨幣を手段として土地と動物と人間の勞働とが、到るところに生産する一切の物を獲得し、享樂するやうなものだといへるほどである。すばらしい發明！」

第四節 貴 金 屬

ブルジョアの生産過程は、まづ、既成の、傳承された一機關としての金屬流通を捕へてゐる。この機關は、徐々には變形しながらも、常にその基本的構造を保有する。何故に、他商品でなく金銀だけが貨幣材料として役立つのかといふ疑問は、ブルジョア制度の限界外のことである。だから、吾々はたゞ、根本的な諸觀點を摘要的に纏めてみるだけにする。

一般的勞働時間そのものがたゞ量的差異のみを許すのであるから、その特殊の體現物として通用す